
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~二人の最凶~

月光丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ～二人の最凶～

【Nコード】

N2616U

【作者名】

月光丸

【あらすじ】

とある世界。二人の仮面ライダーが異形を相手に闘いを繰り広げていた。ある時、二人は小さな赤い宝石の光に飲まれ、気が付けば違う世界に降り立っていた。二人の最凶最悪のライダーによる物語が、今始まる。

プロローグ1（前書き）

どうも、陽炎丸です。

今度は失敗しないように頑張ります。

ちなみにアビスの必殺技は大きく変わっています。

プロローグ1

ここは日本のとある町。

この平凡とした町の裏では、“仮面ライダー”による壮絶な戦いが繰り広げられていた。

これは、鏡の中の世界、ミラーワールドにて戦いを続けている、2人の仮面ライダーによる物語である

「全く、面倒な奴が現れたもんだ」

ミラーワールド内で1人、ミラーモンスターと戦っている戦士がいた。

サメのような意匠を持った水色の仮面の戦士、“仮面ライダーアビス”である。

アビスは今、ミラーモンスターであるヤゴ型のモンスター“シアゴースト”と戦っている最中だった。

「まずはこれだな」

アビスは、鯨の紋章の入ったカードデッキから一枚のカードを抜き取り、左手に装備されている召喚機“アビスバイザー”に装填する。

SWORD VENT

アビスバイザーから音声が鳴ると同時に何処からか大剣アビスセイバーが飛来し、アビスの右手に収まる。

「よし、いくか」

アビスセイバーを手に持ったアビスは、シアゴーストに向かって走り出す。

「おらあっ!!」

アビスはアビスセイバーでシアゴーストを連続で切りつける。

シアゴーストも負けじと腕を振りかぶって襲い掛かるが、アビスはそれを難なく避け、シアゴーストを蹴り飛ばす。

「増えられると面倒だ、一気に決めるか」

アビスはカードデッキからもう一枚カードを抜き取り、アビスバイザーに装填する。

FINAL VENT

音声が鳴り、アビスの後ろに契約モンスターである“アビスラッシュヤー”と“アビスハンマー”の2体が出現する。

「フツ!!」

アビスは高くジャンプする。アビスラッシャーとアビスハンマーの2体が空中のアビスに高圧水流を纏わせ…

「ハアアアアアアアアアアッ!!!」

もの凄いスピードで、水流を纏ったドロップキックを繰り出す。これがアビスの必殺技“アビスダイブ”である。

動きの鈍いシアゴーストが対処できるはずもなく、アビスダイブを受けて爆散した。

その後、炎の中からシアゴーストの魂が小さな光となって出現し、それをアビスラッシャーが吸収した。吸収できなかったアビスハンマーは不満そうにしているが。

「ぶっ…」

地面に着地したアビスは一息ついた。

「さて、戻るか」

現実世界に戻るべく、近くに鏡か窓ガラスがないか探す…

「ウツへウツへウツへウツへ」

「ん？」

アビスが振り返ると、その先にはシアゴーストが大量に出現してい

た。

「ああもう、めんどくせえなあ」

またアビスがカードデッキからカードを抜き取るうとしたその時…

「ここかあ、祭りの場所は…」

声のした方にアビスが振り返る。

そこには、コブラの意匠を持った紫色の仮面の戦士、“仮面ライダー
―王蛇”がいた。

「うわあ、またさらにめんどくさい奴が出てきたなあ」

アビスは嫌そうに呟く。

王蛇も、アビスがいることに気付く。

「あ？ …何だ、お前もいたのか。お前も、俺を楽しませてくれる
のか？」

「悪いが、お前のやることに付き合っ気は無えよ」

アビスはそう返事を返す。

「はっ、連れない奴だなあ…」

王蛇はそう言うと、コブラの紋章の入ったカードデッキからカードを抜き取り、どこからか取り出したコブラのような杖型の召喚機“ベノバイザー”に装填する。

SWORD VENT

音声が鳴り、王蛇の右手にベノサーベルが飛来する。王蛇はそれを左手に持ち替える。

「イライラするんだよ…」

王蛇は首の骨をゴキゴキと鳴らし、シアゴーストの大群に突っ込んでいく。

「あゝ、めんどくせっ」

アビスもまた、アビスセイバーを持ってシアゴーストの大群に突っ込んでいく。

しかし2人は気付いていなかった。

2人が戦っている戦場の中に、小さな赤い宝石が転がり落ちていたことに

プロローグ1（後書き）

感想お待ちしています。

プロローグ2（前書き）

プロローグ2投稿！！

ちなみに今、アビスと王蛇はミラーワールド内の商店街辺りにいます。

プロローグ2

アビスがシアゴーストの大群と対峙する中、王蛇も乱入し、戦いはさらに激化していく。

「ハッハア！！」

王蛇がベノサーベルを振るい、シアゴーストを次々と吹き飛ばし、なぎ倒していく。

「うわあ、あの虫共が次々と…まあ、奴が数を減らしてくれるなら都合が良いな」

アビスもアビスセイバーを振るい、迫り来るシアゴーストを一体ずつ確実に倒していく。

2人が戦っているうちに、シアゴーストも30体近くはいたのが、いつの間にかあと5匹程度に減っていた。

王蛇も痺れを切らしたのか、ベノサーベルを一旦投げ捨て、カードデッキからカードを一枚抜き、ベノバイザーに装填する。

FINAL VENT

音声が鳴り、王蛇の後方から契約モンスターの“ベノスネーカー”が出現する。

突然王蛇がベノサーベルを振るって襲い掛かってきた。

アビスは王蛇の攻撃をアビスセイバーで受け止める。

「祭りはまだ終わってないってか？浅倉あさくら」

「少しは俺を楽しませろよ、二宮このみや」

そう言っていると王蛇は、アビスを無理やりなぎ倒す。

そしてアビスに向かってベノサーベルを振り下ろそうとしたが…

「図に乗るなっ！！！！」

「ぐおっ！？」

アビスバイザーから水の衝撃波が発射され、王蛇は怯む。その際にアビスは素早く起き上がり、王蛇から離れる。

王蛇も体勢を立て直し、再び構える。

「はっはあ…そうだ、それでいい。そうでないと面白くない…！！！」

「はあく、こっちは大迷惑なんだがな…」

2人は構える。

そして再び駆け出したその時…

- キイイイン… -

「「!?!」」

突然謎の音が響き渡る。

2人は音のした方へ振り向いた。

そこにはあの小さな赤い宝石があった。しかし何故か点滅している。

そして急に宝石が光りだした。

「なっ」

「うおっ」

数分後…

その場には誰もいなくなっていた。

アビスも、王蛇も、あの赤い宝石も、みんな姿を消していた

「ん？」

アビスは目を覚まし、起き上がる。

その隣には王蛇が倒れている。

2人は今、どこかの工場跡地みたいなところにいた。

「どこだここ…？」

アビスはVバックルからカードデッキを抜き取って変身を解除し、
にのみやえいすけ二宮鋭介の姿に変わった。

「確か俺達、商店街辺りにいたよな…」

二宮は外に出てみる。

外には高層ビルが沢山並んでおり、明らかに自分達のいた平凡な街とは違っていた。

「どうなってんだ？」

二宮は何故自分達がここにいるのか理解できなかった。

自分はさっきまでミラーワールドで王蛇と戦っていたはずなのだが、突然そこらに落ちていた赤い宝石が光りだしたと思ったら、いつの間にかここにいたのだ。しかも自分達がいたのはミラーワールド内の商店街辺りで、工場跡地ではない。不思議に思うのは当然である。

「ん？」

二宮は足元にあの赤い宝石が落ちているのに気づき、拾い上げる。

「まさかとは思うが…これの所為か？」

二宮が不思議に思っている間に、王蛇が起き上がった。

「あ…？ どこだ、ここは」

王蛇も不思議そうに周りを見渡している。そして二宮がいることに気づく。

「二宮、ここはどこだ？ 俺達はミラーワールドにいたんじゃないかっただのか？」

「さあな。俺だってわかんねえよ」

二宮がそう返すと王蛇はその場から立ち上がり、Vバックルからカードデッキを抜き取って変身を解除し、あさくらたけし浅倉威の姿に変わった。

「まったく、今日は本当にイライラする日だなあ…」

「それは俺だつていつしょだつての」

「お前を潰せば、少しはイライラが収まるかもしれないなあ…」

「お前のイライラを俺に押し付けんな」

2人が言い合っていると…

・キイイイイン…キイイイイン…

「「!!」」

突然頭に響く金切り音。

それはつまり…

「モンスターか…」

「ちょうどいい、イライラしていたところだ」

2人は近くの窓ガラスの前まで移動し、自身のカードデッキを突き出す。

すると2人の腰にVバツクルが出現する。

2人は変身ポーズをとり、あのセリフを叫ぶ。

「変身……！」

カードデッキをVバックルにはめ込み、二宮はアビス、浅倉は王蛇に変身した。

アビスは左手のアビスバイザーを2回撫で、王蛇は首の骨をゴキゴキと鳴らす。

「さあて、いくか……」

「面倒だが、行くしかないか」

2人は窓ガラスに近づき、ミラーワールドに突入した。

プロローグ2（後書き）

アビスの変身ポーズは説明しづらいので省略、皆さんの好きなように想像してください。

それでは感想お待ちしております。

第一話 エンカウント（前書き）

学校の授業中にこっそり更新！！先生にばれないようにするのが大変・・・

第一話、始まります。

第一話 エンカウント

アビスと王蛇がミラーワールドに突入してから数分後：

「ねえ、フェイトちゃん。ここだよね、次元震が発生した場所って」

「うん、そのはずなんだけど……」

ミッドチルダの工場跡地に、時空管理局機動六課のスターズ1である高町なのは、ライトニング1であるフェイト・T・ハラオウンの2人がやって来ていた。

2人は工場跡地で次元震が発生したと聞き、ここまで飛んで来たのだ。

しかし2人が工場跡地に来て、そこには特に何も無かった。

「何も無いね」

「ううん、ひょっとしたら何かあるかもしれない。もう少し調べてみよう」

「うん、わかった」

2人は調査を再開した。

「ギシャアアアア!!」

「うおっ!?!」

「ちっ、イラつかせる…!!」

ミラーワールドに突入したアビスと王蛇は、クモ型の大型モンスター“デイスパイダー”と戦っていた。

しかしデイスパイダーは前足を使って攻撃したり、クモの糸をはいたりして2人をてこずらせていた。

「ホントにめんどくさい奴が現われたな…おっと!!」

アビスはデイスパイダーの攻撃を避け、その場から大きく離れる。

そしてある程度離れた後、カードデッキから一枚のカードを抜き取り、アビスバイザーに装填する。

STRIKE VENT

アビスの右手に、アビスラッシャーの頭部を模した手甲アビスクローが装着される。

そしてアビスクローをデイスパイダーに向けて構え…

「ハアッ!!」

高圧水流を発射する。

デイスパイダーはその水流に弾き飛ばされ、大きくひっくり返った。

「邪魔をするな。こいつは俺の獲物だ」

「お前の獲物だといつ決まった」

こんな時でも2人は言い合っている。

しかしそうしているうちにデイスパイダーは起き上がり、ビルの壁を登り何処かへ逃げ出した。

「ちっ、逃げる気か!?!」

「逃がさん…!!」

2人はデイスパイダーの後を追った。

一方、ミッドチルダの街中でも、とある戦いが繰り広げられていた。

「スバル、一気に決めるわよ!!」

「うん!!」

機動六課のスターズ3である“スバル・ナカジマ”と、スターズ4である“ティアナ・ランスター”の二人が、ガジェット相手に戦っている。

迫り来るガジェットをスバルが殴り飛ばし、離れたところからティアナが遠くのカジエツトを打ち落とす。

二人の奮闘もあって、ガジェットも残りあと一機になった。

「これで…最後っ…!!」

そして最後の機をスバルが破壊し、ガジェットは全滅した。

「ふう、やっと片付いたね」

「そうね。さっさと戻りましょ」

「うん！」

2人が移動しようとしたその時…

- キュイイイイン -

「ギシャアアアアアアアアア!!」

「…!?」

突然ビルの窓ガラスの中から、ディスプレイダーが出現した。

「な、何よこれ!?!」

「うわわわ!! ク、クモ!？」

デイスパイダーの出現に慌てる2人だが、デイスパイダーはそんな事もお構い無しに2人に攻撃を仕掛けて来た。

「うわあっ!?! 攻撃してきた!?!」

「くっ、いきなり何なの!?! スバル、こっとなったらコイツも倒すわよ!?!」

「ええっ、戦うの!?! だってクモだよ!?!」

「ああもうグチグチ言わない!! いくわよ!?!」

2人は焦りながらも、デイスパイダーに攻撃を仕掛ける。

「クロスファイアー! シュート!?!」

ティアナがデイスパイダーを狙い撃つが…

「ギシャアアアア!?!」

(ツ!?! あまり効いてない!?!)

デイスパイダーはあまりダメージを受けていなかった。それどころか、デイスパイダーは糸をはき、ティアナを捕まえた。

「キヤアツ!?!」

「ティア!?」

糸に捕まったティアナは下に落下する。

そこにデイスパイダーがゆっくりと迫る。

「(うそ…このままじゃ私、食べられる!?)(いや、来ないで…!!)」

ティアナは必死にもがくが、糸は全く千切れない。

「ティアを離せ!!」

スバルはデイスパイダーに突撃するが…

「ギシャアアアアツ!!」

「キャアアツ!?」

デイスパイダーに弾かれ、吹き飛ばされてしまう。

デイスパイダーはティアナの目の前まで来た。

「ティアアツ!!!!」

もう間に合わない。

「キャアアアアアアアアアアアツ!!!!!!」

そしてティアナが喰われそうになったその時…

- キュイイイイン -

ビルの窓ガラスから二台のライドシューターが飛び出し・・・

「ギシャアアアアッ!!!??」

デイスパイダーを跳ね飛ばした。

二台のライドシューターはスバルの近くに止まる。

「
えっ?」「」

スバルもティアナも呆気にとられた。

「
やれやれ、左手がこんなんだから、運転が不便だな」

「ハッ、今に始まった事じゃないだろ」

ライドシューターの中から、アビスと王蛇の二人が出て来た。

そして、デイスパイダーに言い放つ。

「さあ、祭りを再開しようか…!!」

「お前も、沈めてやるうか…?」

最凶最悪の仮面ライダーが二人、ミッドチルダに参上した。

第一話 エンカウト（後書き）

アビスって左手があれだから、ライドシューターとかは運転しにくいと思うんですね。それともそう思っているのはボクだけでしょうか？

それでは感想お待ちします。

第二話 二人を保護！？（前書き）

第二話投稿！！

それではどうぞ。

第二話 二人を保護！？

「ああもう、面倒だからさっさと終わらせよう」

アビスはいきなりカードをアビスバイザーに装填する。

A D V E N T

「グオオオオオオッ！！」

アビスラッシャーとアビスハンマーが召喚される。

アビスラッシャーは口から高圧水流を、アビスハンマーは胸のバルカン砲から爆撃を発射する。

「ギシャアアアアッ!？」

攻撃が直撃し、デイスパイダーは前足が一本折れてしまった。

「俺の獲物だと言ったはずだ…!!」

王蛇もカードをベノバイザーに装填する。

A D V E N T

「ギユアアアアアアアアアアッ!!」

召喚されたベノスネーカーは、デイスパイダーに向かって口から溶解液を発射する。

「ギシャアアアアッ!?」

溶解液をまともに浴びたデイスパイダーは苦しそうにのたうち回る。

「消える…!!」

王蛇はカードを抜き、ベノバイザーに装填する。

それを見たアビスも、カードをアビスバイザーに装填する。

FINAL VENT

「ハアッ!!」

アビスと王蛇は同時に飛び上がり…

「ハアアアアアアアアアアアッ!!!」

アビスダイブとベノクラッシュが繰り返され、デイスパイダーに炸裂する。

二人の必殺技を同時に受けたデイスパイダーは、あっという間に爆発した。

「す、すい…」

アビス達の戦いを見ていたスバルとティアナは、啞然としていた。

「それにしても、何なのかしら？ あの二人」

ティアナは疑問に思う。

「うーん、わかんない。でも二人共すごい強いなあ」

スバルは目を輝かせていた。

「…それで、これからどうするつもりだ？」

「この街は明らかに俺達の知ってる街じゃない。取り敢えず、ここが何処なのかを把握しないとな」

二人はこれからについて話し合っていた。ちなみにまだ変身は解いていない。

するとそこへ…

「動かないでっー!!」

「…あつ？」

二人は振り返る。

視線の先には、バリアジャケットを纏ったなのはがいた。

「時空管理局機動六課スターズ分隊隊長の高町なのはです。今すぐ武装を解除し、投降してください」

なのははそう言い放つ。しかし…

「…何だお前、時空管理局だと？」

「それに機動六課？ 意味がわからん。それに何だそのコスプレは…？」

二人共何が何だかサツパリわからないでいた。

「あっあの！ 待ってくださいなのはさん！！」

スバルが割って入る。

「スバル！？ 危ないからその人達から離れて！！」

「違うんです！！ この二人が私達を助けてくれたんです！！」

「えっ、そうだったの？」

なのはは驚く。そしてすぐにアビスと王蛇の方を向く。

「勘違いして申し訳ありません。二人を助けてくれてありがとうございます」
「ございました」

なのはは謝罪する。

「助けた？ …違うな。俺達はさっきのクモを潰そうとしていただけだ」

王蛇がそう言う中、アビスは一人で考え事をしていた。

（コイツら、この街に着いて知ってるらしいな。だとすれば、一応コイツらに従った方が案外得策かもしれないな…）

アビスは考えていた。

「あの、あなた達について幾つか聞きたい事があります。同行お願い出来ますか？」

なのははアビス達について来るように言う。

「何だと？ 見ず知らずの他人に、何故ついて行かなきゃならん」

王蛇は彼女達について行く事に不満を言っている。だが…

「…いや、ついて行く」

アビスはそう言い出した。

「…何？」

王蛇は驚いた。

「協力ありがとうございます。では私達について来てください」

なのははそう言って、ヘリのある方へ向かう。スバルとティアナも彼女について行く（ちなみにティアナは既にスバルにクモの糸をほどいて貰っている）。

「…二宮。何を考えてやがる？」

「安心しろ。ちゃんと考えてはいる。それに…」

アビスは王蛇の方に振り返る。

「使えるものは、有効活用しないとな」

そう言って、なのは達について行く。

王蛇も不満そうではあるが、一人でどうこう出来る訳でもない為、渋々ついて行く事にした。

こうして彼らは不本意ながらも、機動六課に関わる事になった。

第二話 二人を保護！？（後書き）

感想お待ちします。

第三話 交渉（前書き）

第三話投稿！！

いつもに比べると長いかな？

今回は後書きにてお知らせがあります。

6月29日、学校でPCの授業があったのでついでに一部再編集。

第三話 交渉

あれからアビスと王蛇の二人は機動六課に到着し、なのはに部隊長室まで案内されていた。

先程まで不満そうにしていた王蛇も、今は大人しくしている。まあ、イライラは溜まっていくかもしれないが。

(さて、これから事情聴取されるわけだが…どこまで話すべきかな) アビスが考えていると…

「着きました。ここが部隊長室です」

いつの間にか部隊長室に着いていた。

(まあ、行き当たりばったりでもいいか？めんどくさいけど…)

彼らはなのはに続き、中に入った。

「初めまして。機動六課部隊長の八神はやてと言います」

まず最初に、部隊長のはやてが自己紹介をする。

「改めて、機動六課スターズ分隊長の高町なのはです」

「同じくライティング分隊隊長のフェイト・T・ハラOWNです」
なのはとフェイトも続いて自己紹介をする。

「あなた達の名前と出身世界を教えてくださいませんか？」

はやては二人に聞く。

アビスと王蛇は、ここでようやく変身を解除し、正体を現す（はやて達は変身解除を見て驚いたが）。

「俺は二宮鋭介だ、よろしく」

「…浅倉威だ」

二人も自己紹介をする。

「二宮鋭介さんに、浅倉威さんですね。名前からして、二人共地球出身やな」

「…まあそつだ。だが、何故聞く必要がある？」

「この際ハッキリ言うとかわ。あなた達二人は次元漂流者や」

「…次元漂流者？」

二人の声がハモった。

「せや。何らかのトラブルが生じて違う世界に転移し、迷子になっ

て元の世界に帰れなくなってしまった人の事を言っんや」

「要するに俺達は迷子かよ、情けねえ……」

二宮は良い年して迷子になった事に落胆している。

「あつ、でも地球はウチらの出身世界やから、すぐに帰れるかもしれへん」

はやては二宮を元気づける。

「それで二人共、地球の何処ら辺に住んどるんや？」

「何処つて言うかまあ…… OREジャーナルつて言えばわかるか？
そういう名前の企業があるはずなんだが……」

“OREジャーナル”は日本の新聞記者の間では名は結構広まっている。地球に戻るなら目印だけでもすぐにわかるだろう、そう思っていた二宮だが……

「OREジャーナル？ そんな名前の企業なんて聞いたあらへんで」

「うん、私も聞いた事ないよ。そんな名前の企業」

はやてもなのはも、そんな名前の企業は聞いた事がないという。

「何っ！？ そんなバカな!？」

二宮は驚いた。いや、彼だけでなく、浅倉も驚いている。二宮の言うOREジャーナルは浅倉でも知っている（何せここにもライダー

が一人いるのだから)。それが何故無いのか、二人は理解出来なかった。

「うーん…ひよっとして二人共、違う地球から来たんちゃう?」

「「違う地球?」」

二人の声がまたハモった。

「うん、平行世界って言えばわかるかな?」

なのはがわかりやすく説明する。

「平行世界…なるほど、無限の可能性を秘めた世界か」

二宮と浅倉は納得する。まあ彼らも非日常な毎日を送っているので、納得せざるを得ない。

「…それで、俺達は元の世界に帰れるのか?」

浅倉が聞く。

「うーん…普通の次元世界ならわかるけど、平行世界となるとだいぶ時間がかかる。まあでも、決して帰れんってわけじゃあらへん」

「そうか…」

二宮はそれを聞いて安堵した。流石にこの訳のわからん世界に取り残されるだなんて言われたら、とてもじゃないが堪らない。

「さあ、こつちからも聞かせて貰うで。二人がなっていたあの姿、それにあのクモのような怪物は何なん？」

今度ははやてが二宮と浅倉に聞く。

「（どこまで話すべきか）…俺達が変わっていたあれば、ライダーだ」

「「ライダー？」」「」

はやて達は首を傾げる。

「そうだ。俺はアビスで、浅倉は王蛇だ。簡単に言えば、モンスター」の力を借りて戦う戦士ってところかな」

「モンスター？ あのサメみたいなのと、コブラみたいな奴の事かいな？」

「正確に言えば、あの巨大グモもな。モンスターは基本的には、鏡の中の世界ミラーワールドに生息している」

「ミラーワールド…そんな世界があるの？」

フェイトが驚く。

「鏡でなくとも、窓ガラスや水溜まり等からも奴等は出現する。奴等は人間を餌としており、一度狙った獲物を何処までも付け狙う。大抵の場合は、捕まえた人間をミラーワールドに引きずり込んでから捕食する事が多い」

二宮から浅倉がバトンタッチして説明する。

「…じゃあ、一度狙われたらもう逃げられないの?」

「そつだ。それに、一度ミラーワールドに引きずり込まれてしまつたらもう助からない」

「何でや?」

「ミラーワールドでの活動時間は限られている。ミラーワールドに引きずり込まれた人間は、時間が経つと消滅し、消えて無くなるからな」

「「「!」」」

浅倉の説明を聞いて、はやて達は驚愕した。今このミッドチルダに、そんな危険な怪物が現れ始めているという事に。

「俺達はそのモンスター達を退治する為に、ライダーとして戦っている」

「…あれ? 二人もモンスターを従えていたよね? どうやって従わせたの?」

なのはが聞く。

「俺達は、モンスターと契約している」

二宮が言う。

「『『契約?』』」

「そつだ。俺達は、契約したモンスターの力を借りて戦っている。だが契約というのは、お互いに利益があるから結ぶもの。モンスターが俺達に力を貸す代わりに、俺達は契約モンスターにある物を提供しなければならぬ」

「ある物?」

「餌だよ。主に人間か、倒したモンスターの魂だ」

「…人間はさつき聞いたからわかるけど、モンスターの魂って?」

「モンスターは倒すと中から魂が出てくる。魂の中には、そのモンスターが食った人間の生命エネルギーが含まれているからな。それを食わせても、餌を与えた事になる」

フエイトが恐る恐る聞く。

「…餌を与えなかったら、どうなるの?」

「餌を長期間与えなかった、またはライダーのカードデッキが破損した場合は契約破棄と見なされ、俺達が契約していたモンスターに喰われる事になる」

「『『!』』」

「俺達は常に、死と隣り合わせってわけさ」

二人の説明も、あながち間違っではない。しかし実はこの二人、

まだ話していない事がある。二人がライダーの力を得るきっかけとなった“肝心な事”を……。

ここではやては話を切り替える。

「…まあ、二人のことは大体わかった。ここからが本題や」

はやては真剣な表情になる。

「二人共今は次元漂流者や。こっちは立場上、二人を保護せなきゃならんのやけど…」

「保護？引き入れるの間違いじゃないのか？」

浅倉は確証を突く。

「正直に言うと、私達だけじゃモンスター達には対抗でけへん。二人にも協力して欲しいんや。今このミッドチルダにもモンスターは出現し始めてる。せやから、二人の契約モンスター達の餌の確保には持って来いって話や」

それを聞いた二宮は考え始める。

（コイツらに大人しく従っていれば、衣・食・住、全てが揃う。モンスターへの対抗手段も持ってないみたいだし、後は余計な詮索さえさせなければ問題はないか？ …一応、利用価値はあるな。浅倉もいるし、今のこの状況を切り抜ける為にも、コイツらには利用されて貰おう）

「…わかった。協力しよう」

「何っ!?!」

「ホンマかつ!?!」

浅倉は驚き、はやて達は喜ぶ。

「ただし条件がいくつもある」

二宮は条件を挙げる。

「まず一つ目、俺達の衣・食・住を全て揃える事。二つ目、俺達はいつでも自由行動できるようにする事。三つ目、俺達の持つカードデッキを勝手に調べたりしない事。そして四つ目、俺達の事は上層部には報告しない事。これらを守るなら、協力してやっても良い。基本的にはモンスターが最優先になるが」

「「「!?!」」」

「…ああそつだ。そういえばこれもあつたな」

二宮は懐からあの赤い宝石を取り出す。

「なっ!?! それってレリックやんか!?!」

「俺達はこの所為でこの世界に来てしまったのさ。条件を守るなら協力はするし、こいつもくれてやる。どうだ? 悪い話じゃないはずだ」

「…一つ目と二つ目はどうにか出来るかもしれへん。けど、三つ目

と四つ目は…」

「拒否権は無い。守れないようなら…」

「お前達全員、この場で沈んで貰う」

「「「…ッ!?!?」「」」

急に雰囲気が変わった二宮に、三人は一瞬恐怖を感じた。

「（何や今の威圧感、尋常じゃあらへん!!）…わかったわ。その条件、飲んだる」

はやては四つの条件を了承した。

「…交渉成立だな」

二宮は笑みを浮かべる。

「まあ安心しろ。そっちが余計な事をしない限りは何もしない。浅倉はわからんけどな」

「ふん…」

浅倉は目を逸らす。

「…じゃあ二人共、この機動六課の事は知らんやろつし、案内するわ。リイン！」

「はいです〜」

何処からか“リインフォース・ツヴァイ”が飛んで現れ、二宮と浅倉の周りを飛び回る。

「…何だこれ？ まさか妖精か？」

二宮はリインを見て純粹に驚いている。

「むう〜、私は妖精じゃありません！！ リインフォース・ツヴァイという名前があるんです〜！！」

リインが怒るが、大して恐くない上にどこか可愛らしい。

「まあまあ。それじゃリイン、二人を案内してえな」

「はいです〜 それじゃあ二人共、ついてきてくださ〜い」

「行くぞ。浅倉」

「ああ」

二宮と浅倉はリインについていき、部隊長室を出ていった。

二人が出ていった後、はやて達三人は大きく息をついた。

「…ふう、ホンマ疲れたわ。あんな人達は初めてや」

「あの二人、何者なんだろう」

なのはがはやてに問い掛ける。

「わからへん…特に二宮さんは、腹の底が全く見えへんかった。まあ協力してくれるとは言うてたし、結果オーライやろ」

「だと良いんだけどね（あの二人、まだ何か隠してるような…）」

はやてが言う中、フェイトは二宮と浅倉がまだ何か隠してるのではないかと考えていた。

その頃、ミッドチルダの街中では…

- バキバキバキバキ… -

倒されたディスプレイダーの残骸が、一ヶ所に集まり始めていた

第三話 交渉（後書き）

これからおよそ一週間後に定期テストがある為、暫く更新は出来ません。

ちくしょおおおおおおおっ！！！！

テストなんて無くなってしまえば良いのにiiiiiiiiiiiiっ！！！！

第四話 模擬戦・巨大グモの逆襲（前書き）

今もまだテスト期間の最中ですが、後はある程度勉強すればどうにかなるかな？っていう教科しかないので、第四話投稿しました。

…どうでもいいけど、戦闘描写苦手…誰か…ボクに文才を…

第四話 模擬戦・巨大ゲモの逆襲

部隊長室を出た後、二宮と浅倉の二人はリインフォース・ツヴァイに機動六課の案内をされていた。

そして今、機動六課の施設の一つである訓練場までやって来る。

「リインと言ったっけ？　ここは何の施設だ？」

二宮がリインに聞く。

「ここは訓練場です。フォワード陣の皆さんはここで日々訓練に励んでいます」

リインの話を聞いた浅倉は…

「…ほお」

顔がにやついていた。

(コイツ、闘いたそうな目してやがる…!!)

浅倉のにやついている顔を見た二宮は呆れ返っていた。

「中に入って、皆さんの訓練を見ていきますか？」

リインは二人にフォワード陣の訓練を見ていくか聞いてみた。

「…面白い」

浅倉は一人で勝手に中に入って行く。

「はあゝ…めんどくさい」

そう言っつて、二宮も中に入って行く。

「ああっ!!！ そっちから入ったら危ないですよゝ!!！」

ラインが止めようとするが、結局二人は中に入って行ってしまった。

「…何だこれ？」

中に入った二宮と浅倉は驚いていた。

訓練場に入ったと思ったら、中は大きな街のようになっていたからだ。もちろんこの街はホログラムでできているのだが。

「すごいな…この世界の技術は一体どうなってるんだ？」

二宮が感心していると、浅倉は更に奥へ進んでいく。

「あっおい、待てよ浅倉!!！」

二宮は浅倉の急いで後を追う。

「リイン。二人は今どないしてる？」

後から訓練場にやって来たはやて達三人がリインに尋ねる。

「そ、それが二人共、勝手に中に入って行ってしまったんですよお
〜！！」

リインは慌てた様子で答える。

「まあ、あの二人の事や。多分問題は無いやろ。シグナムとヴィー
タもいることやし」

はやて達はモニターを通じて、二人の様子を見る事にした。

「あれは…」

二宮と浅倉は、訓練中のスバルやティアナ達を発見する。

「ほお…面白そうだなあ」

浅倉はカードデッキを左手に持ち、変身しようとする。すると…

「待て、貴様等」

二人の前に、ライトニング分隊の副隊長である“シグナム”と、スターズ分隊の副隊長である“ヴィータ”の二人が降りてきた。

「貴様等、何者だ？ 機動六課の関係者ではなさそうだが」

「返答次第じゃ、容赦しねえぞ」

シグナムもヴィータも、二人に対して敵意剥き出しである。

しかし浅倉は…

「…クハハハハハハハハハッ！！」

二人を見て突然笑い出した。二宮はそれを見てため息をついている。

「何がおかしいっ！？」

「ハハハア、なかなか強そうな奴等が出て来たものだからなあ、つい笑いが出てしまった…お前等も、俺を楽しませてくれるのか？」

浅倉の返答は明らかに挑発的である。

「てめえっ！！ アタシ達をバカにしてんのか！！」

浅倉の態度にヴィータがキレる。

「…そこまで言えるという事は、貴様もそれなりに強いのだろうか？」

シグナムも怒りを露にしている。

「ハツハア…鬭るか？ この俺と」

「あれ、まさか俺も巻き添えなのか？」

二宮はいつの間にか自分も巻き添えになってる事に気付く。

そんな一触即発の中…

「四人共、ちよつと待って!!」

彼らの下に、バリアジャケットを纏ったのが飛んできた。

「シグナムもヴィータも、話を聞いて。その二人は、次元漂流者なの」

「えっ!?!」

なのははシグナムとヴィータに、二宮と浅倉の事について説明した。

「じゃあ、私達の勘違いだったのか…」

「ごめんよお前等」

シグナムとヴィータは、二宮と浅倉の二人に謝罪する。

「俺は別に良い。だが浅倉がなあ…」

二宮がそう言うと、なのはが二人に提案する。

「それじゃあ、二人共。シグナム達と模擬戦する？」

「…はっ？」

二宮は呆気にとられたような表情になる。

「ほら、二人の実力も確かめてみたいし。シグナム達も良いでしょ？」

なのははシグナムとヴィータに聞く。

「私は彼らと戦ってみたい」

「アタシも構わない」

二人はアッサリ了承した。

「…めんどくせえ」

「面白い」

二宮はめんどくさそうにするが、浅倉は逆に嬉しそうにしていた。

「何だかすごい勝負になりそうだね、ティアー!!」

「ああもうはしゃぐなバカスバル!!」

「あの二人強そうだね。キャロ」

「楽しみだね、エリオ君」

「キュルクウ」

なのは達とフォワード陣の四人は、モニターで二宮達の様子を見る事になった。特にスバルとエリオは目を輝かせていた。

「あの二人はシグナムとヴィータに勝てるかどうか、じっくり見物させてもらうで」

はやても、彼らの実力がどれ程のものか楽しみにしている。

「二人共、準備は良い？」

なのはは二人に確認をとる。

『こっちは問題ない』

『…こっちもない』

二人の返事が返って来た。ちなみに二人はなのはから通信機を渡されており、それをつけた状態で変身している。

「それじゃあ、模擬戦スタート！」

なのはがスタートの合図を出し、模擬戦は始まった。

「俺の相手はお前かあ…」

「そついう事だ」

王蛇は早速、シグナムと向き合っていた。お互い、距離は大きく離れている。

「はああ…」

王蛇は大きく息を吐き、首を捻る。

シグナムも自身のデバイスであるレヴァンティンを構える。

「さあ、祭りを始めようかあ…!!」

「烈火の将、シグナム…参る!!」

早速シグナムが斬り掛かる。

王蛇はそれを簡単に避ける。

(これぐらいは簡単に避けられるか…ならば!!)

シグナムは素早く王蛇の後ろに回り込み、レヴァンティンを振るう。

しかし王蛇はを体を反らすだけで上手く避け…

「ハアツ!!」

「グツ!?!」

シグナムに一発、拳を入れる。

「くっ…!!」

シグナムはまたレヴァンティンを振るうが、王蛇は右手で剣先を上
手く弾き、受け流す。

「ハツハアツ!!」

「グハツ!?!」

また王蛇に一撃を入れられ、シグナムは体勢を崩しかけるが、どう
にか踏み切る。

「オラアツ!!」

「ッ!!」

王蛇の蹴りを上手く避け、シグナムは一旦王蛇から離れる。

(今の数回の攻防だけでわかる。動きは少し雑だが、この男……闘
い慣れている!!)

シグナムは王蛇の闘いのセンスに驚いていた。それと同時に…

(この勝負…とても面白い!!)

喜びも感じていた。

彼女は今までなかなか強い者と闘えずにいた。

しかし今目の前にいる男は、自分よりも遙かに強い。

そう思うと、何故か楽しくて堪らないのだ。

「どうした、もう終わりか…?」

「フツ、まだまだ…!!」

闘いはまだ、始まったばかりである。

一方、アビスとヴィータは…

「フツ!!」

「おりゃあっ!!」

アビスセイバーとグラーフアイゼンによる打ち合いが続いていた。

ヴィータはグラーフアイゼンを振るうが、アビスはそれをアビスセイバーで上手く受け止め…

「ハアッ!」

「何っつわああああああっ!」?

左手のアビスバイザーから水の衝撃波を発射し、ヴィータを吹き飛ばす。

吹き飛ばされたヴィータは、空中でなんとか体勢を整える。

「お前、やるじゃねえか。ここまでやれる奴なんて久しぶりだ」

ヴィータは彼の強さに感心するが、アビスはあまり楽しそうではない。

「…ああもつ、お前さつさと沈んでくれねえか? めんどくさいんだよ」

「ッテメエ!!! グラーフアイゼン!!!」

アビスのセリフが頭にきたのか、ヴィータはカートリッジをロードし、グラーフアイゼンはラケーテンフォルムに変わる。

「ぶち抜けっ!!! ラケーテンハンマアアアアアッ!!!」

ヴィータのラケーテンハンマーが、アビスに迫る。

「フッ!!!」

しかしアビスは、近くのビルの窓ガラスからミラーワールドに飛び込んだ。

「何っ…!?!」

当然、ヴィータの攻撃は失敗に終わる。

「くそっ、何処に行った!?!」

ヴィータは辺りをキョロキョロと見回す。

ミラーワールドに逃げ込んだアビスは、既に次のカードを抜いていた。

「めんどくさい。さっさと決めよう」

STRIKE VENT

右手にアビスクローが装備される。

そしてミラーワールドから出て来て、ヴィータにアビスクローを向ける。

「なっ!?!」

ヴィータが気付くが、もう遅い。

「ハアッ!?!」

「うわあああああああつ!?!」

アビススマッシュが決まり、ヴィータはビルの壁に叩きつけられた。

「ゲツ…!?!」

ヴィータは立ち上がろうとしたが、アビスはヴィータの頭にアビスバイザーを向ける。

「俺の勝ち。これでもう良いだろ?」

「くそっ…!?!」

アビスとヴィータの勝負は、アビスの勝利に終わった。

「ヴィータ副隊長が負けた!?!」

なのは達はヴィータが敗北した事に驚いていた。

「すごい、何なのあの強さ…!?!」

「か、カッコいい…!?!」

フェイトが驚く中、スバルとエリオは目を輝かせていた。

(見た感じ、あの人は本気を出してるようには見えなかった。なの

にヴィータ副隊長に勝った。あの人に比べたら、ワタシなんてまだまだ…)

ティアナは二宮が本気を出さずにヴィータに勝った事に驚き、それと同時に劣等感も感じていた。

「ヴィータが負けただと!?!」

シグナムもヴィータが負けた事に驚いていた。

「よそ見をしてる余裕があるのか?」

「ッ!?!」

シグナムはすぐに視線を王蛇に戻し、王蛇のベノサーベルをレヴァンテインで防ぎ、王蛇から素早く離れる。

「俺はこの闘いが楽しいんだ。ガツカリさせてくれるなよ…!?!」

「そうか、それは私も同じだ!?!」

そして二人が同時に駆け出したその時…

…キイイイイン…キイイイイン…

「!?!」

突然聞こえてきた金切り音に、王蛇は一度立ち止まる。

「どっした?」

シグナムには金切り音は聞こえていない。

しかし、シグナム達からだいぶ距離の離れているアビスは気付いていた(ヴィータには聞こえていない)。そして…

「グオオオオオッ!!」

「なっ!?!」

アビスとヴィータの前に、ミラーワールドからレイヨウ型モンスター“ギガゼール”が二体出現し…

「ハッハアツ、面白い…!!」

「何だこれは…!?!」

「ギシャアアアアアアアッ!!」

王蛇とシグナムの前に、デイスパイダーの強化再生されたモンスター“デイスパイダー・リボン”が出現した。

モンスターの乱入により、闘いは、更に激化していく事となる。

第四話 模擬戦・巨大グモの逆襲（後書き）

模擬戦&リボン戦、これで終わらせようと思いましたが、無理でした…orz

次回で決着がつきます。そろそろアイツらにも登場してもらわないとな…

それでは感想お待ちしてます。

第五話 ヘビープレッシャー（前書き）

テスト終了！！！！

というわけで第五話投稿！！

タイトル通り、今回はアイツが登場します。

第五話 ヘビープレッシャー

「な、何だよコイツ等…!!?」

突然目の前に現れた二体のギガゼールを見て、ヴィータは驚きを隠さずにはいられなかった。逆に、モンスターを見慣れているアビスは落ち着いていたが。

「向こうにはあの巨大グモか…全く、虫つてのは一体どこまで生命力強いんだか。目の前にはガゼルが二体いるし」

アビスは二体のギガゼールと向き合う。

「ホント、めんどくさくてしょうがねえ…!!」

「グオオオオオッ!!」

二体のギガゼールは、容赦なく二人に飛び掛かる。

「な、何やあれ!？」

はやて達は突如現れたディスプレイ・リボンやギガゼールを見て、驚きを隠さずにはいられなかった。

そんな中…

「ティア、あれって…!!」

「わかってる、でも何で!? あのクモは倒された筈じゃ…!?」

スバルとティアナだけは、デイスパイダー・リボーンに見覚えがある。何せこの二人は、一度ミッドチルダの街中でデイスパイダーに襲われており、アビスと王蛇に倒されるところを直接見ていたからだ。

「こつしちやおれへんな…:…なのはちゃん、フェイトちゃん!!
今すぐ二宮さん達の下に向かってえな!!」

「了解!!」

はやての命令を受けたなのはとフェイトはすぐにバリアジャケットを纏う。その時…

『高町、ハラオウン。こつちに応援よこせ。浅倉の方は必要ないか』

アビスの方から通信が来た。

「えっ、でも浅倉さんは!?!」

『心配はいらん、アイツはそう簡単にやられはしない。それに…』

アビスは一息ついて言う。

『アイツの契約モンスターは、一体だけじゃない』

一方、王蛇とシグナムは…

「ハアア…またコイツかぁ…」

王蛇は目の前に現れたディスプレイ・リボーンを見て溜め息をつく。

「…浅倉と言ったか。何なんだコイツは？」

シグナムが王蛇に問う。

「簡単に言えば、鏡の中の化け物ってところだな」

「ギシャアアアアアアアッ!!」

王蛇が言い終わると同時に、ディスプレイ・リボーンが前足を使って襲い掛かって来た。

「クツ、レヴァンティン!!」

explosion

攻撃を回避したシグナムはカートリッジをロードし、レヴァンティンが炎を纏う。

「紫電……一閃!!」

シグナムは必殺技である紫電一閃をデイスパイダー・リポーンに炸裂させる。しかし……

「ギシャアアアアアアッ!!」

「何っ、ぐあっ!?!」

あまり効いていないらしく、シグナムは大きく弾き返された。

「コイツ、防御力が上がっている……ちっ、イラつかせる!!」

王蛇がデイスパイダー・リポーンに接近する。

もちろんデイスパイダー・リポーンは王蛇に対しても攻撃を仕掛けるが、王蛇は上手く攻撃を避ける。

「オラアッ!!」

王蛇のベノサーベルがデイスパイダー・リポーンの頭部に直撃する。

「ギシャアアアアアッ!!」

「オアッ!?!」

しかし王蛇も弾き返され、シグナムの横まで吹き飛ばされる。

「(このままでは埒があかん……!!)(浅倉、何か手はないか!?)」

このままでは分が悪いと判断したシグナムは王蛇に問い掛ける。しかし…

「お前は邪魔をするな、コイツは俺の獲物だ…!!」

王蛇はまた一人で突っ込んで行く。

「なっ、一人では無茶だ!!」

シグナムも王蛇に続く。しかしディスプレイ・リボーンはシグナムに向かってクモの糸を放つ。

「しまった…!?!」

シグナムはクモの糸に捕らえられてしまう。

「クッ!!」

シグナムは必死にもがくが、糸はなかなか千切れない。

「ギシャアアアアアアアアアアアッ!!」

そうしている間にも、ディスプレイ・リボーンは王蛇に迫る。

すると突然、王蛇は自分の手に持つてるベノサーベルを投げ捨てた。

「（剣を捨てた!?!）危ない!!」

シグナムが叫ぶ中、王蛇はカードデッキから一枚のカードを抜き取り、ベノバイザーに装填する。

STRIKE VENT

音声が鳴ると同時に…

「ギシャアアアアアアアアアアアッ!!」

デイスパイダー・リボーンの前足による攻撃が、王蛇に炸裂する。

「浅倉っ!!!」

シグナムは浅倉の名を叫ぶ。

今の攻撃は確実に当たった。シグナムはそう思っていた。しかし…

「ハツハア…!!!」

デイスパイダー・リボーンの攻撃は、王蛇には当たってはいなかった。

よく見ると王蛇の右手には、とあるサイの頭部を模したような大きな手甲“メタルホーン”が装備されており、王蛇はこのメタルホーンを使ってデイスパイダー・リボーンの攻撃を防いだのだ。

「オラアッ!!」

「ギシャアアアアアアアアッ!?!」

王蛇はメタルホーンを使ってデイスパイダー・リボーンを押し返す。そしてメタルホーンを一旦その場に捨てる。

「浅倉!!」

そこへクモの糸をほどいたシグナムが駆けつける。

「何だお前か…邪魔するなと言ったはずだがな」

「そうは言われても、アレを放置するところちが迷惑だからな。そこでだ」

「あ…?」

「このままではジリ貧だ。二人同時にトドメをささないか?」

シグナムは王蛇に提案する。

「…奴は俺の獲物だ」

「今はそれどころではない。それはわかっているだろ?」

こうしている間にも、ディスプレイダー・リポーンは二人に迫って来ている。

「チッ」

王蛇は舌打ちし、シグナムに言い放つ。

「足引つ張つたらお前から潰す」

そう言って、ベノバイザーにカードを装填する。

「そうか」

シグナムもレヴァンティンを構え直す。

FINAL VENT

explosion

同時に音声が鳴る。

「ブオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!」

王蛇の後ろに、サイ型のモンスター“メタルガラス”が出現し、王蛇の右手に再びメタルホーンが装備される。

「ハアツ!!!」

王蛇はメタルガラスの肩に飛び乗り、デイスパイダー・リボーンに向かって突進を繰り返す。

「レヴァンティン!!!」

レヴァンティンは今まで以上に大きな炎を纏う。

そしてシグナムは炎を纏ったレヴァンティンを手にも、デイスパイダ

ー・リボーンに突撃する。

「オラアアアアアアアアアッ！！！」

「紫電・・・一閃！！！」

王蛇の“ヘビープレッシャー”とシグナムの“紫電一閃”が同時に、
デイスパイダー・リボーンに炸裂する。

「ギシャアアアアアアアアアアッ！！？」

デイスパイダー・リボーンは為すすべもなく二人の必殺技を受け、
跡形も無く爆散した。

その後、炎の中からデイスパイダー・リボーンの魂が出現し、それを
メタルゲラスが吸収した。

それと同時刻、アビスとヴィータの方は…

A D V E N T

アビスラッシャーとアビスハンマーが出現し、アビスは先程使った
アビスクローを再び右腕に装備する。

「アイゼン！！！」

Schwalbe fliegen

ヴィータは幾つもの小さな鉄球を飛ばす。

「ハアッ!」

「オラアアッ!」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!」

アビスはアビスクローから高圧水流を発射、ヴィータは鉄球を飛ばす。

アビスラッシャーは口から高圧水流を、アビスハンマーは胸のバルカン砲から砲弾を発射する。

「グオオオオオオオオオオオオ!」

一体のギガゼールにその集中攻撃が炸裂し、爆発する。

それを見たもう一体はこの場から逃げ出そうとする。その時…

「グオオオ!」

突然ギガゼールがリングのようなものに縛られ、動けなくなる。

「バインドからは逃げられないよ」

バインドを放つたのはとフェイトがアビス達の下に飛んで来た。

「二人共、大丈夫？」

フェイトが二人に駆け寄る。

「アタシは平気だ」

「…俺も問題ない」

アビスはバインドで動けなくなっているギガゼールの方を向く。

「さて、さっさと沈んでもらおうか」

FINAL VENT

「フッ!!」

アビスが大きくジャンプし…

「グオオオオオオオオオッ!!」

アビスラッシャーとアビスハンマーが空中に跳んでいるアビスに水流を纏わせる。

「ハアアアアアアアアアアアッ!!!!」

アビスダイブがギガゼールに炸裂、ギガゼールは断末魔を上げる事も無く爆発した。

そして二体のギガゼールの魂をアビスラッシャーとアビスハンマー

が吸収した。

こうして、モンスターが出現するといつアキシデントもあり、模擬戦は中断する事となった。

第五話 ヘビープレッシャー（後書き）

速攻で決着つくかなと思ったけど、案外普通だった・・・。

それでは感想お待ちします。

第六話 二宮の本性（前書き）

第六話投稿！！

今回はちよっぴり二宮の本性が見えます。

それと、後書きで皆さんに聞きたい事があります。

第六話 二宮の本性

今回の模擬戦は、モンスターの出現もあつた為に中断する事になった。

現在、皆は食堂で食事を取っている（二宮と浅倉の分はなのはが代わりに支払ってくれた）。

しかし浅倉はともかく、二宮はあまり食事が進んでいない。何故なら……

「……………」

「ガツガツガツガツムシャムシャムシャムシャ」

「モグモグモグモグガツガツガツガツ」

フォワード陣の約二名が、二宮の目の前でものすごい量の食事を一気に平らげていつているからだ。

しかも片方は若い女の子、もう片方はまだ十歳位の少年。どう見ても大食いのイメージは無い。そんな二人が今、目の前で物凄い量の料理を平らげているのだ。食欲が失せるとかそれ以前に、もはや呆然とするしかあるまい。

「ちょっと、スバルにエリオも！！ 二宮さんがゆっくり食事出来

ないでしょ!!」

ティアナがスバルとエリオという名の少年に注意する。

「ふえ？ なにはいつは？（え？ 何か言った？）」

「食いながら喋るな!!」

「……」

「…もう何でもありか」

スバルとティアナのコントを余所に、浅倉は黙々と肉料理を貪り、二宮はもうどうでも良いやみたいな感じになる。

「にやははは…何だかまた楽しそうだね」

「楽しいのはええ事や」

この光景を見ていたなのはやてが言う。

「全然楽しくねえよ…」

二宮は溜め息を吐く。

ここでフェイトが話を切り替える。

「そういえば、まだ二人にはフォワードの皆を紹介してなかったね。皆、自己紹介して」

「ムグムグ、ゴクン……はい、スターズ3のスバル・ナカジマです
！」

口の中の料理を飲み込んだスバルが最初に元気良く自己紹介をする。

「はい、スターズ4のティアナ・ランスターです」

続いてティアナ。

「ライトニング3のエリオ・モンディアルです」

その次にエリオ。

「ライトニング4のキャロル・ルシエです。こっちはフリードリ
ヒ」

「キュルク」

最後にキャロルが自己紹介し、フリードリヒ（以下フリード）が元気
いっぱいに鳴く。

「…この世界には龍もいるんだな」

二宮はフリードを見て言うが、今まで数々のモンスターを見てきた
為なのか、内心ではあまり驚いてはいない（おまけに彼の知ってい
るライダーの中には、赤いドラゴンと契約している者もいる）。

「八神達から聞いているだろうけど、改めて名乗っておこう。俺は
二宮鋭介だ、よろしく。それと、俺の隣で料理喰ってんのが浅倉威
だ」

ちなみに浅倉はまだ肉料理を貪っている。

「二宮さんも浅倉さんも、ても強かったですね。普段トレーニングが何かしてるんですか？」

スバルが二人に聞く。

「いつモンスターが現れるか分からんからな。闘いで死なないように、トレーニングなんかは必要な量だけ毎日こなしてる。めんどくさいけどな」

「それであの強さですか!？」

ティアナはそれを聞いて驚いていた。逆にスバルとエリオは目を輝かせているが。

「弱い奴は喰われ、強い奴だけが生き残る。世の中弱肉強食だ。生き残るには、強くないと話にならないからな」

そして二宮はボソリと呟く。

「…全ての人間が、俺の敵だしな」

「二宮さん?」

フェイトが心配そうな目で見る。

「何でもない、気にするな。それより…」

二宮はここでまた話を切り替える。

「こっちにいる間は、一応協力はしよう。基本的にはモンスターの退治が最優先になるが、それ以外でも出来る範囲でなら手伝おう。だからお前等も、約束はちゃんと守れよ？」

「…分かつとる。約束は破らへん」

はやては了承する。

ちなみにさつきから黙って料理を貪っている浅倉も、彼らの会話を最後まで聞き逃さないでいた。

「はい、これが部屋の鍵です。なくさないでくださいね」

二宮と浅倉の二人は、機動六課の男子寮の部屋で休む事になり、なのはから部屋の鍵を渡される。

その後二宮は自分の部屋の前に到着し、中に入る。

「ふうん、結構良い部屋だな」

二宮は部屋のベッドに寝っ転がる。その時…

「似合わない事を言ったもんだな、二宮」

部屋の中に浅倉が入って来た。

「…何でお前が入って来る？」

「ドアに鍵が掛かっていないもんだからなあ」

二宮はドアの方を見る。確かにドアの鍵が開いたままである。

(…鍵、閉めとくべきだったな)

二宮はさりげなくそんな事を思う。

「協力だなんて、お前には一番似合わない言葉を言ったもんだ。何を企んでる？」

「…アイツ等に協力する事だが？」

「協力？ “利用する”の間違いだろ？」

「……」

二宮は黙り込む。

「奴等はモンスターへの対抗策を持っていない。多少は闘えるだろうが、それでも倒すのにだいぶ苦戦している。そんな時に俺達が現れたんだ。モンスターと互角に闘える俺達を、奴等が放っておく筈がない。おまけに俺達のカードデッキが破壊されてしまえば、俺達は契約モンスターに喰われて死ぬ事になるが、それと同時に奴等のモンスターへの対抗策がなくなる。敢えて弱点を教えておく事で、奴等の俺達に対する扱いを良くした。自らの生存率を上げる為にな」

二宮は黙って浅倉の話の話を聞いている。

「それに、奴等に協力するフリをすれば“衣・食・住”の全てが揃う。これなら利用しない手立てはない。違うか？」

「まあ、その通りだな」

黙っていた二宮がようやく口を開く。

「せっかく寢床が手に入るんだ。これを利用しないバカが何処にいるっ。」

二宮はベッドから起き、立ち上がる。

「…お前も、なかなかえげつないな」

「自分の弟をベノスネイカーのエサにしたお前に言われたくない」

二宮は鼻で笑う。

「…ライダーバトルについては何も話さないのか？」

「話す必要が無い」

二宮はハッキリと断言する。

「余計な詮索をされない為か？」

「詮索されて困るのは、カードデッキから得たデータを元に、カー

ドデッキが複製される事くらいだな。ホントに複製出来るかどうかは疑問だが、用心するに越した事はない」

二宮は一息ついて言う。

「ライダーバトルの事は……まあ、ばれない限りは話す事は無いだろう」

「なるほどな……」

浅倉はドアの前に立つ。

「俺も暫くはお前に従う事にしよう。この世界にも、強そうな奴がいるしなあ。だが、元の世界に戻った時はまた敵同士だ」

「お前の相手は勘弁しろ。めんどくさい」

「ふん……」

浅倉は部屋から出ていった。

浅倉が出ていったのを確認した二宮は、ベッドに座る。

「……そう、何もかも俺が生き残る為の手段だ。機動六課も、浅倉も」
そして二宮はまたベッドに寝っ転がる。

「何も信用出来ない。全てが俺の敵なんだ」

二宮は右手の手の平を見つめる。

「何としても、俺は生き残ってやる……目の前の敵は全て、この
手で沈めてやる……!!!!」

二宮は拳を握り締めた。

第六話 二宮の本性（後書き）

エビルダイバーの鳴き声がどんな感じだったか忘れてしまいました。ていうかエビルダイバーって鳴き声発してましたっけ？分かる人がいたら教えて下さい。

それでは感想お待ちしてます。

今更キャラ設定（前書き）

タイトル通り、今更載せちゃいました。

この小説の主人公の一人、二宮鋭介についての設定です。

ネタバレが追加されました。ネタバレが嫌な人は読まない方が良
いかもしれません。

今更キャラ設定

二宮銳介 / 仮面ライダーアビス

にのみやえいすけ

性別：男

年齢：22

髪型：茶髪のオールバック

好き：昼寝、静かな場所、見ていて楽しい事（ジャンル問わず）、
コーヒー

嫌い：めんどくさい事（ジャンル問わず）、戦闘、騒ぎに巻き込まれる事、騒がしい場所、しつこい奴、偽善者

望み：特に無し（本人が興味を持っていない）

詳細：仮面ライダーアビスとして闘う青年。ライダーバトルには神崎士郎によって強制的に参加させられている。ライダーになる前から格闘技等でトレーニングをしていた時期があった為、戦闘能力は高い。知略にも長けており、大勢が戦っている場合には介入せず、陰で様子を見る慎重派。アビスに変身した際にアビスバイザーを二回撫でる癖があり、敵を倒したり殺したりする場合は“沈める”と彼なりの表現をしている。ちなみに一人暮らし。

かなりのめんどくさがり屋で、必要な事以外でめんどくさいと思った事は、基本的に自分からはやるうとしない。しかしトレーニング等が必要な事として見ており、常に必要な量だけこなしている。昼寝が大好きで、暇な時間があれば大抵は寝ている（ただし彼の昼寝

を邪魔した者は、問答無用で彼からの制裁を受ける)。見ていて楽しいと思つた事には悪ノリし、他人の隠し事を知つた時はそれをチラつかせて脅したり、誰かがからかわれている時は相手が精神的に凹むまでいじり倒す等、DSな一面もある。ただし、自分が弄られるのは好きではない。料理は意外と上手だが、普段は簡単な料理しか作らない。

基本的に誰に対しても普通に接しているが、内心では「その場の状況を切り抜ける際は、その場にある物(者)をとことん利用する」という考えを持っており、周りの人間達の事も「生き残る為の手段」としか見ておらず、完全には信用していない。それ故に誰かが犠牲になつても何とも思わず、見えない所で民間人を契約モンスター達の餌にしたり、民間人がモンスターに襲われても救いようがないと判断した場合は容赦なく見捨ててしまふ等かなり冷酷。しかし使えろと判断した場合は敢えて生かし、自分にとつて都合の良くなるようにうまく利用する策略家でもある。

実は子供の頃に、家族を全員事故で失つた過去を持つ。その際周りの人間達は遺産目当てで二宮の事を真つ直ぐ見ようとしなかつた為に、当時子供だった二宮は心が傷ついて人間不信に陥り、他人に対する憎しみを持つようになる。そしてライダーになつた後に高見沢逸郎こと仮面ライダーベルデに出会い、彼の「人間は皆ライダー」という壮大な演説を聞かされる事で、人間社会を一種のサイバルと認識するようになり、目的の為なら手段を選ばない冷酷な人間へと変わってしまった。

レリックによる次元転移で、仮面ライダー王蛇である浅倉威と共にミッドチルダに飛ばされてしまい、なのは達と出会う。機動六課とはモンスター退治を手伝う代わりに幾つかの条件を飲ませる事で協力関係を結んでおり、破つた場合は六課の人間を全員殺害するつもりでいる。後に仮面ライダーオーディンからミッドチルダに流れ着いたミラーモンスター達の退治を頼まれ、彼からの報酬であるタイムベントを目的に行動する事になる。後に仮面ライダーファムであ

る霧島美穂やハツカーのルシファーと出会い、先の事を考え、六課に隠れて戦力を揃え始める。

仮面ライダーアビス

二宮銳介が変身する仮面ライダー。サメ型モンスターと契約している為、頭部にサメの意匠がある。全体のスペックは龍騎や王蛇と同じくらいだが、変身している二宮自身がライダーになる前から日々格闘技等でトレーニングを積んでいた為に戦闘能力も高く、知略にも長けているが故に、他のライダーからは脅威の存在として見られている。

左手に装着されているサメの形をした召喚機“アビスバイザー”にカードを装填する事で、装填したカードの能力を発動することが出来る。アビスバイザーからは水の衝撃波を連続発射する事も可能（ただし左手全体がバイザーとなっている為、ライドシューター等のマシンは運転が不便になっている）。

アビスラツシャー・アビスハンマー

アビスと契約しているミラーモンスター（アビスラツシャーがサメ型、アビスハンマーがシュモクザメ型である）。アビスラツシャーはノコギリ状の大剣を二本、アビスハンマーは胸部のバルカン砲を武器としており、共通の能力で口から高圧水流を発射することも出来る。契約前から二体一緒に行動することが多かった為か、アビスが片方を召喚した際は二体同時に出現することがほとんどである。どちらもかなり凶暴な性格で、一度狙った獲物は捕食するまで絶対に諦めない（それでも二宮の命令はちゃんと聞いている）。現在は

二宮の命令により、六課陣の監視を行っている。
どちらもAP5000。

ソードベント

アビスラッシャーの使用している大剣“アビスセイバー”を召喚する。二宮が一番愛用している武器でもある。
AP3000。

ストライクベント

アビスラッシャーの頭部を模した手甲“アビスクロー”を召喚する。右手に装着し、アビスクローの発射口から高圧水流を発射する“アビススマッシュ”を発動する。龍騎のドラグクローファイヤーとは違い、攻撃自体は単体で行う。
AP3000。

ファイナルベント（ユナイト前）

敵にトドメを刺す際に使用するカード。高く宙に跳んだアビスがアビスラッシャーとアビスハンマーの発射した高圧水流を纏い、高速でドロップキックを繰り出す“アビスダイブ”を発動する。命中率はかなり高い。
AP6000。

ユナイトベント

特殊カードの一種。契約モンスターであるアビスラッシュヤーとアビスハンマーが合体し、巨大サメ型モンスター“アビソドン”へのパワーアップを遂げる。

アビソドン

アビスラッシュヤーとアビスハンマーがユナイトベントによって合体する事で誕生した、巨大なサメ型モンスター。合体前とは違って、完全にサメの姿をしている。巨大になっている分、攻撃力や防御力、耐久力等はかなり上がっており、その巨大な口はあらゆる物を噛み砕き、高圧水流を発射する事も可能。

通常の姿である“ホオジロモード”、突き出た目から砲撃を繰り出す“シュモクモード”、長いノコギリを使って敵を切り裂く“ノコギリモード”、三つのモード全てが合わさった“ホオジロシュモクノコギリモード”の計四種類のモードがある。

因みにアビソドンの状態でモンスターの魂を吸収した場合は、アビスラッシュヤーとアビスハンマーの両方に餌を与えた事になる。

AP7000。

ファイナルベント（ユナイト後）

アビスの使用出来る、もう一枚のファイナルベント。アビスセイバーを装備したアビスが超高速で相手に接近し、連続で斬りつけた後に蹴り飛ばし、蹴り飛ばされた相手をノコギリモードになったアビソドンが真っ二つに切り裂く“デュアルスライサー”を発動する。

技の性能上、ファムのファイナルベントとは違い1対1の時にしか使用出来ない。

AP8000。

サバイブ 〓無限〓

二宮がオーデインから授かった、強化変身用のカード。三枚あるサバイブの内、一番強力な力を持つ。オーデインはこのカードにより、常時サバイブ状態となっていた。二宮本人は浅倉に目をつけられないように、浅倉や六課メンバーの前ではこのカードは出来る限り使わないようにしている。

小説内では、“サバイブ『無限』”と表記している。

話が進み次第、随時更新します。

第七話 テロリスト騒動 part 1 (前書き)

第七話投稿！！ オリジナル話です。

ちなみにこの小説は原典の龍騎と違い、モンスターの出現する順番は完全にランダムになっています。

第七話 テロリスト騒動 part 1

「ああ、かつたるい」

翌日、目を覚ました二宮はベッドから起き上がり、欠伸をする。

時間を見てみると、まだ六時になったばかりである。

「…起きるか。めんどくさいけど」

いくら眠いからと言っても、せつかく機動六課の協力者になったのだからさすがに寝てばかりでは少々まずい。眠い時は、何もする事が無い暇な時間に寝ればいいだろう。しかしその睡眠も、時々モンスターが現れる所為で遮られてしまう事もあるが（その場合はモンスターをリンチしてストレスを解消している）。

二宮はベッドから立ち上がり、洗面所に向かう。

その後、身の支度を済ませた二宮は浅倉と合流し、食堂で朝食を取ることにした。

「ちっ、イライラする…何故こんなものを着なきゃならん」

「そう言ってる割には、律儀に着こなしているじゃねえか」

「それはお前もだろう」

「…否定はしない」

ちなみに二人は今、機動六課のメンバーと同じ制服を着ている。実は昨日、二宮と浅倉が就寝に着く前にはやてが二人の下にやって来て、六課にいる間には他のメンバーと同じ制服を着るように言われたのだ。最初は断ろうとしていた二人だが、その後もはやてにじっくり迫られた為に、いちいちしつこく迫られるのも面倒だと判断した二宮の決断により、仕方なく着る事になった。しかし二宮はともかく、あの浅倉までもが制服をきっちり着こなしている。この二人、嫌そうにしてる割には結構律儀な部分がある。

「へえ…あれだけ嫌がつといて、ちゃっかり着こなしてるやんか」
「ん？」

二人の下にはやてがやって来た。

「…なんだお前か」

「ちょおっ！？ 何やその反応!？」

はやてが素早くツツコミを入れる。

「いやだって…なあ？」

「…まあ、な」

制服の件があった為、こんな反応になるのは当たり前である。

「二人共、私の事を何やと思うとるん!？」

「めんどくさい(イライラする)狸」

二人の声がちょうど重なる。

「…酷い」

はやては体操座りになって凹んだ。

「…それで? 何か言いに来たんじゃないのか?」

浅倉がはやてに問う。

「はっ、そうや!… 忘れるところやった!…」

「復活早えな」

はやては素早く復活し、立ち上がる。

「実はと言うとな、二人の事を六課の皆に紹介したいねん。食事を
終えたら、ちょっとウチについて来て欲しいんや」

現在ロビーでは、なのは達を含む機動六課の職員達が全員集まっていた。

「皆さん、おはようございます。今日は皆さんに、本日より機動六課に協力することになった、民間人協力者を紹介します。それでは二人共、前にどうぞ」

二宮と浅倉が前に出る。

「今日から機動六課に協力する事になった、二宮鋭介だ。よろしく」

「…二宮と同じく、機動六課に協力する事になった、浅倉威だ」

「俺も浅倉も、まだよく分からない事はいろいろあるが、まあこれからよろしく頼む」

二人は自己紹介を終える。それと同時に職員達は二人を拍手で迎えた。

同時刻、管理局の地上本部では…

「おい、今の状況はどうなってる!?!」

「はい!!! ショッピングモールに立て込もったテロリストグループは今、何人もの人質を取り、身代金を要求しています!!! 従わないようなら、人質を一人ずつ殺害していくと!!!」

「何てことだ!!!」

スバルの父、ゲンヤ・ナカジマ三佐はモニターを見て拳を握り締め
る。

実は先程、グラナガンのショッピングモールに突然テロリストグル
ープが現れ、人質を取って立て籠もる事件が発生していた。

テロリストグループのリーダーは身代金を要求しており、従わない
ようなら人質を一人ずつ殺害すると言っただ。

「現場の局員達も、手出しが出来ないようですよ!!」

「くそっ!! 俺達にはどうにも出来ねえのかよ!!」

ゲンヤは机をドンと叩いた。

例のショッピングモールでは…

「まだ管理局の反応は無いか…」

テロリストグループのリーダー、“ダリア・グランツ”が呟く。

「だがまあ良い、こっちには人質が何人もいるんだ。奴等も手出し
は出来はしない」

グランツは勝ち誇っていた。

確かに、今彼らテロリストグループは民間人やショッピングモールの従業員達を人質に取っており、管理局も手出しが出来ないでいる。人質にされた人達もテロリストグループのメンバーに銃を向けられ、大人しくしている。

しかし、彼らの計画は打ち碎かれる事となる。

管理局ではなく、鏡の世界からの招かれざる異形によって

「さて、どうするかねえ…?」

ロビーでの自己紹介を終えた二宮は部屋に戻り、ベッドでくつろいでいた。

部屋に戻ったのは良いが、する事が特に何も無いのだ。

「昼寝でもするか」

二宮が眠りにつこうとしたその時…

・キイイイイン…キイイイイン…

「…空気読めねえのかオイ」

二宮は素早くベッドから起き上がり、洗面所の鏡まで向かう。

洗面所の鏡の前に立ち、カードデッキを取り出す。

腰にVバックルが出現し、二宮は変身ポーズをとる。

「変身!!」

カードデッキをVバックルにはめ込み、二宮はアビスに変身する。

「さっさと沈めに向かうとするか」

アビスは左手のアビスバイザーを二回撫で、ミラーワールドに突入した。

第七話 テロリスト騒動 part 1 (後書き)

ひよっとしたら、ギンガが意外と早く登場するかもしれない・・・。

それでは感想お待ちします。

第八話 テロリスト騒動 part 2 (前書き)

第八話投稿!!

やっぱり戦闘描写は苦手…。

他の皆さんの戦闘描写はホントすごいなあ…。

第八話 テロリスト騒動 part 2

ミラーワールド内、グラナガンのショッピングモール広場…

「ハツハアツ!!」

「グオオオオオオオツ!!」

既に浅倉は王蛇に変身しており、シマウマ型モンスターの“ゼブラスカル・アイアン”と闘っている最中だった。

「なんだ、先に来ていたのか」

到着したアビスは王蛇が闘っているを見つけ、すぐに物陰に隠れて様子を見る。

「あのまま倒してくれると楽でいいんだがなあ…」

アビスは呟く。

しかしこの世の中、常にうまくいくわけではない。

「グオオオオオオオツ!!」

「ッ!?!」

アビスに向かって、シマウマ型モンスターの“ゼブラスカル・ブロンス”が飛び掛かって来た。アビスはゼブラスカル・ブロンスの攻撃を紙一重で避け、体勢を整える。

「もう一体いたのか」

アビスはカードを装填する。

STRIKE VENT

「ハアッ!!」

アビスクローを装備し、高圧水流を発射する。しかし…

「グオオオオオオオッ!!」

ゼブラスカル・ブロンズは体がバネのように伸び、ダメージを軽減してしまった。

「何っ!?!」

さらにゼブラスカル・ブロンズは腕のブレードを使い、アビスに攻撃を加える。

「グッ!!」

アビスはすぐにアビスクローを投げ捨て、次のカードを装填する。

SWORD VENT

飛来したアビスセイバーを手に持ち、ゼブラスカル・ブロンズを切り倒し、アビスセイバーを振り下ろす。

しかしゼブラスカル・ブロンズはそれを転がって回避、立ち上がった後に連続でジャンプしながら何処かへ逃げ出した。

「ああもう逃げんな、めんどくさくなるだろうがっ!!」

アビスもすぐに後を追う。

一方の王蛇も、さつきからベノサーベルによる攻撃を避けてばかりのゼブラスカル・アイアンに対してイライラしていた。

「ちょこまかと逃げるな…イライラする!!」

王蛇はベノサーベルを投げ捨て、別のカードをベノバイザーに装填する。

SWING VENT

王蛇の左手に、とあるエイの尻尾を模した長い鞭“エビルウィップ”が飛来する。

「フンッ!!」

王蛇はジャンプしているゼブラスカル・アイアンの足にエビルウィップを巻きつける。

「グオオオオオオオオッ!？」

どうやらいきなり自分の足に鞭が巻きつけられるのは想定外だったらしく、ゼブラスカル・アイアンは思いきり地面に転がり落ちる。

そんなゼブラスカル・アイアンを王蛇は容赦なく右足で蹴り飛ばし、またカードを抜く。

「さつさと消える…!!」

FINAL VENT

ファイナルイベントのカードが装填され、王蛇の後ろからエイ型モンスター“エビルダイバー”が飛来する。

「ハアツ!!」

王蛇はエビルダイバーに飛び乗り、ゼブラスカル・アイアンに向かって突撃する。

「ハアアアアアアアアアアアツ!!」

「グオオオオオオオオオオツ!?!」

王蛇の第三の必殺技“ハイドベノン”がゼブラスカル・アイアンに炸裂する。

ゼブラスカル・アイアンはすかさずバネのように伸縮するが、流石に破壊力が強すぎたのか、ダメージを軽減できることもなく爆散した。

「何処に逃げた？」

一方のアビスは、完全にゼブラスカル・ブロンズに逃げられてしまっていた。

気配も完全に消えてしまい、何処にいるかがわからない。

「…仕方ない、戻るか」

これ以上探しても無駄だと判断し、アビスは現実世界に戻りに行く事にした。

「…そういえばここ何処だ？ショッピングモールっぽい感じはしているが…」

「おいおい、約束の身代金はどうしたんだ？」

「クッ……！！」

ショッピングモールの中央ホールでは“ギンガ・ナカジマ陸曹”が、グランツやその手下達と対峙していた。

グランツは幼い女の子を人質に取っている為、ギンガは迂闊に動けないのだ。

「その子を離しなさい！！ 自分が何をやってるか分かってるのですか！？」

「うるせえっ！！」

グランツは女の子の頭に銃を突きつける。女の子は怯えており、今にも泣きそうになっている。

「いいか。お前ら局員共はなあ、俺達の為に金を用意すればいいんだよ！！ わかったらさっさと用意しやがれ！！ このガキがどうなってもいいってんなら話は別だがなあ…！！」

グランツはギンガに怒鳴りつけ、また女の子に銃を向ける。

（今すぐ犯人達を取り押さえたいけど、下手に刺激すれば人質の命が危ない！！ いったいどうすれば…！！？）

管理局が屈するわけにはいかない。でもこのままだと人質に取られた人達が危ない。ギンガはどうすればわからずにいた。

この時、ギンガ達はまだ気づいていなかった。

「フフフフフ…」

近くのショーウィンドウに、モンスターの姿が映っていた事に。先
程アビスが取り逃がしたゼブラスカル・ブロンスとはまた違う、別
のモンスターがギンガ達の様子を窺っていた事に

第八話 テロリスト騒動 part 2 (後書き)

エビルダイバー登場、そしてハイドベノンやってしまった：ハイド
ベノンはまだ先って言ったのに：ダメだ、有言実行出来ねえ：orz
今回はモンスター三昧です。最後に出てきたモンスターは、鳴き声
でわかる人もいるでしょう。

それでは感想お待ちします。

第九話 テロリスト騒動 part 3 (前書き)

第九話投稿!!

今回は二宮が凶悪な一面を見せます。でもちょっと無理やり過ぎたかも…。

それではごっご。

第九話 テロリスト騒動 part 3

一方の機動六課では、この日のフォワード陣の訓練を終えたのがフェイトに二宮と浅倉の所在を聞いていた。

「フェイトちゃん。二宮さんと浅倉さんは何処に行ったの？」

「さっき浅倉さんが変身してミラーワールドに行っちゃったから、きつと二宮さんも今頃、ミラーワールドに向かっているんじゃないかな」

そこへ…

「なのはさん、フェイトさん〜!!」

リインフォースが慌てた様子で飛んで来た。

「リイン、どうしたの?」

「大変なんです!! ちょっと来て下さい〜!!」

そう言ってリインは、また来た道を飛んで戻っていく。

「…なのは」

「うん、行こう。何かあったのかも」

なのはとフェイトはリインの後をついて行く事にした。

「ホントに、ここ何処だ？」

変身を解いた二宮は、グラナガンのショッピングモール内をうろついていた。

当然、テロリストグループによる事件が起こっている為、中はかなり静かである。

「…参った、めんどくさい事になっちまった」

そう言いながら二宮が歩いていると…

「動くな」

テロリストグループの手下が商品棚の影から姿を見せ、二宮に銃を向ける。

「はい？」

二宮はマヌケな声を上げる。

「誰だお前は？ ここに忍び込むことは不可能のはずだが」

手下は明らかに敵意剥き出しである。

「…どうやら俺、自分からめんどくさい事に首突っ込んでしまったみ

「たいだな」

二宮は溜め息をつく。

「ゴチャゴチャ言つな。お前にも大人しくしてもらおうか」

手下が二宮を取り押さえようとする。

「…めんどくさい」

二宮は近くの等身大の鏡を見る。すると…

「グオオオオオオオオオオオオツ！！」

「なっ！？」

鏡からアビスラッシャーとアビスハンマーが現れ、手下を捕まえる。

「なっ何だ、この怪物はっ！？」

慌てる手下とは逆に、二宮は冷静な口調で言う。

「お前等でちゃんと分けるよ？」

そう言うと、二体は手下を鏡の中に引っ張り始める。

「ひいっ！？ お、おい！！ 助け」

言い終わる前に、手下は鏡に引きずり込まれた。

「さて、どうすつかねえ…」

二宮は何事も無かったかのように周りを見渡した後、等身大の鏡を見る。

「…変身しといた方が良さそうだな」

二宮は鏡にカードデッキを向ける。

「変身！！」

中央ホールでは、緊迫の状態が続いていた。

「身代金はちゃんと用意したようだな…」

グランツの前には、スーツケースを持ったギンガが立つ。

「身代金は用意しました。人質を解放して下さい」

「まあ待て。中身を確認してからだ」

そう言くと、グランツの手下がギンガからスーツケースを受け取り、中身を確認する。

そしてグランツにOKのサインを出す。

「よし、約束はちゃんと守ったようだな。さて」

グランツはまた女の子に銃を向ける。

「なっ!?! 約束が違いますよ!?!」

「おいおい、そんなすぐに解放するつもりか? 俺達の逃げ道も確保してもらわねえとなあ」

どうやら、完全に逃げ切るまで人質を解放する気はないらしい。

「くっ…!?!」

「さあ、早くしろよ?」

グランツの顔は余裕の表情で満ちている。

その時…

「めんどくさい事になってんのな」

「くっツ!?!」

全員が声のした方を向く。

そこには壁に寄りかかり、左手のアビスバイザーを撫でているアビスの姿があった。

「な、何だお前っ!?! どうやって入って来た!?!」

「教える必要も無い。それより…」

アビスは壁から離れて言う。

「さっきから面倒な事態に巻き込まれるし、浅倉程ではないがイライラしてるんだ。さっさとこの状況をどうにかしたいところなんだがな」

「うっうるさい、そこから動くな!! コイツがどうなっても良いのか!?!」

グランツは女の子を盾にする。

普通の人なら、動く事を躊躇うだろう。

そう、普通の人なら

「…それがどうした?」

アビスは何の迷いもなく、グランツに向かって歩き出す。

「お、おい!?! コイツが死んでも良いってのか!?!」

それでもアビスは止まらない。

「知らん。俺には関係ないからな」

アビスはだいぶ近づいてきた。

(何だよ、何なんだよコイツ…!?!? このガキの事も眼中にないみてえだし、このままじゃやられる…!?!?)

グランツはかなり焦っていた。このままだと自分は確実に殺られてしまう。

「ま、待って下さい!?!」

「ん?」

アビスの前にギンガが立つ。

「…そこをどけ、通行の邪魔だ」

「どきません!! 犯人を刺激して、関係のない子を巻き込むわけにはいきません!?!」

お互いに譲らない二人。

(よし、ナイスだお嬢さん。そのまま足止めしといてくれよ)

二人が言い合っているうちに、グランツは女の子を連れだままこっそり逃げようとする。しかし…

「…仕方ない。ここは引き下がるか」

「「!?!?」」

突然アビスの方から引き下がった。

「…何を驚いてんだ？ 女の子が傷ついちゃダメなんだから？」

アビスは後ろを向き、グランツ達から離れていく。

「え……えっ？」

ギンガはアビスが急に自分から引き下がったので、わけがわからずにいる。

(よ、よし!! 逃げるなら今のうちだ!!)

グランツが女の子を無理やり連れて逃げようとし…

「嘘に決まってるだろ？」

「「ッ!?!」」

素早くアビスが振り返り、アビスバイザーから水の衝撃波が発射される。

「ぐああああああああああつ!?!」

水の衝撃波がグランツに直撃した。ちなみに女の子はギリギリ当たらずに済み、隙についてグランツの腕の中から抜け出した。

「へえ…結構適当に引っ掛けたつもりだったが、ホントにうまくいくとはな」

「ぐっ、てめえっ…!!」

グランツはアビスを睨みつける。

人質にされていた女の子は急いでギンガに駆け寄り、彼女の後ろに隠れる。

(あの状況で犯人に的確に攻撃を当てた上に、攻撃した際に何の戸惑いもなかった!? 本当に女の子ごと攻撃しようとしたのか、それとも、女の子には攻撃は当たらないと確信していた!? この人、いったい何者なの…!?)

ギンガはアビスの先程の攻撃を見て驚愕の表情を示していた。

アビスは再びグランツに歩み寄る。

「さてと、どうしようか。あんまりめんどくさい事にはしたくないんだが…」

アビスはグランツに近づきながら、「ここからどうするべきか考える。だが…」

・キイイイイン…キイイイイン…

「!?!」

アビスは金切り音を聞いて立ち止まる。その時…

- ダアーンツ!!! -

突然銃声が鳴り響く。

「…えっ?」

ギンガは顔が青ざめる。

何故なら、ギンガの視線の先には…

グランツの手下である男の、首から上が消し飛んでいたのだから

「キ、キヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ!?!」

人質だった女性が悲鳴を上げると同時に、中央ホール内はパニックに陥った。

「そんな…人が撃たれた!？」

シヨッピングモールの様子をモニターで見ていたなのは達隊長陣やフォワード陣は啞然としていた。

「ギン姉は!？ ギン姉は無事だよね!？」

「落ち着いてスバル!! ギンガさんは無事だから!!」

姉であるギンガの事が心配なスバルを、ティアナが落ち着かせる。

「うっ…!？」

「キャロ!？ 大丈夫!？」

キャロが危うく嘔吐しそうになり、彼女の背中をエリオが擦る。

「二宮さん、大丈夫だよね？」

なのはが不安そうな声を上げる。

「大丈夫や。今頃浅倉さんも現場に向かってるやろうし、きっと大丈夫や…!！」

そう言っているはやても、実際はかなり不安そうだった。

「そ、そんな……うつ！!?」

ギンガは目の前で起こった惨劇を見てしまい、彼女も思わず嘔吐してしまいそうになる。

「これは…ッ!? そこか!」

アビスは近くのショーウィンドウに目を向け、水の衝撃波を発射する。

水の衝撃波がショーウィンドウに命中し、それと同時にショーウィンドウの中から何かが飛び出して来た。

「…さっきのシマウマ野郎とは違う?」

「フフフ、フフフ」

飛び出して来た何かが、アビスの前に降り立つ。

その正体は、サル型ミラーモンスター“デッドリマー”だった。

「フフフ、フフフ…」

デッドリマーは不気味な鳴き声を上げる。

「さっき逃げられたのとは違うみたいだな。全く、めんどくさい…」

アビスはこんな状況でもめんどくさそうにしている。

「フフフ」

デッドリマーは銃のような尻尾を取り外し、アビスに向けて高周波弾を放つ。

「ちっ！！」

アビスはそれを転がって避けた後にカードを抜き、アビスバイザーに装填する。

S W O R D V E N T

飛来したアビスセイバーを手に持ち、デッドリマーに向かって走る。

「せいやっ！！」

「ウワッ！？」

アビスがデッドリマーに切り掛かり、デッドリマーは転がり倒れる。

しかしデッドリマーはすぐに起き上がり、アビスの肩を踏みつけてジャンプし、高周波弾を撃つ。

「ぐっ！？ ああもっっ！！」

アビスがまたデッドリマーを追おうとしたその時…

「ギユアアアアアアアアアアアッ！！」

「ウワアッ！？」

突如ベノスネーカーが現れ、デッドリマーを跳ね飛ばした。

「ベノスネーカー!? って事は…」

アビスが後ろを振り返る。

「…お前、何を遊んでいる?」

王蛇がアビスに歩み寄って来た。

「来てたのか」

「またモンスターの反応があったもんだからな。さて…」

王蛇はデッドリマーのいる方に目を向ける。

「お前も、俺を楽しませてくれるか…?」

王蛇はベノサーベルを手に持ち、デッドリマーに向かって走り出した。

「おいおい、俺の出番は無し…!? まあ良いけど」

「ギヤアアアアアアアアアッ!?!」

「!?!」

アビスは別の方向を向く。

「い、いやだあああああああっ!?!」

「グオオオオオオオオオオオオツ!!!?」

突然の攻撃だった為にゼブラスカル・ブロンズはバネのように伸縮出来ず、そのまま爆死した。

そしてゼブラスカル・ブロンズの魂は、アビスラッシャーによって吸収された。

「ふう…」

着地したアビスは一息つく。

「いやあ、ありがとなアンタ。助かったよ」

「あつ?」

アビスにグランツが近寄って来た。

「どうだお前、俺のボディガードにならないか? さっき管理局の女から身代金を頂いてる。今なら山分けも出来るぞ?」

グランツはアビスを仲間になろうと迫る。

「…ところでさあ」

アビスが呟く。

「大丈夫か? その手」

「へっ? 何が…ッ!?!?」

グランツは自分の右手を見て驚愕した。

グランツの右手からは粒子が出ており、少しずつ消え始めていた。

「お、おい！？ どうなってんだコレ！？」

グランツは慌てだす。

(ミラーワールドでの活動時間は限られている。コイツはもう時間切れってわけか)

アビスは内心そう考えていた。

「お、おいお前！！ 助けてくれ！！」

グランツが必死になって頼むが、アビスは黙ったままである。

「頼む！！ お前にも金は分けてやるから！！」

それでも、アビスは反応を示さない。

「お前の好きなものは何でもやる！！ 俺が用意してやる！！ だからお願いだ、助け」

「 何で俺がお前を助けないといけないんだ？ めんどくさい」

「がつ…!？」

アビスは容赦なくグランツを蹴り飛ばした。

「ぐがあっ…てめえ、何を…!？」

「ぶっちゃけて言うとなあ、お前には興味ないんだよ。お前は特に利用する価値もなさそうだし、お前を助ける義理も俺にはないしな」
アビスは平然と言つてのける。

「それに、俺はお前の事は信用しちゃいない。信用もしてない奴を、俺が助けると思つか？」

「てめ…ッ!？」

グランツは体中から粒子が出る。

もう、消える寸前である。

「い、嫌だ、死にたくない、やめてくれ…!!！」

「沈めよ。光の见えない、闇の中へ」

「い、嫌だあああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああっ!!!??？」

グランツは断末魔を上げ、ミラーワールドから完全に消滅した。

「…さて、帰るか」

モンスター達を退治した後、二宮と浅倉の二人は機動六課の方から迎えの車を出してもらい、ようやく機動六課に戻って来る事が出来た。

あれから結局、生き残っていたテロリストグループのメンバーは全員逮捕され、事件は一応解決した事になっていた。しかし何人かのメンバーはモンスター達によって殺害されており、リーダーのグラントンは行方不明の扱いになっていた。

現在、六課での空気はかなり重い感じである。

「…二宮さん。あの人は、どうなったんですか？」

なのはが恐る恐る二宮に聞く。あの人とは、グラントンの事である。

「…消滅したよ。ミラーワールドでな」

「「「ツッ!?!」「」」

それを聞いたなのは達は表情が更に暗くなる。

「聞きたいのはそれだけか？」

「……………」

全員が黙ったままである。

「…これ以上死人を出したくないなら」

二宮の発言に、六課陣の全員が顔を上げる。

「お前等が強くなれば良い。死人を出さなくて済むくらいまでにな」

「…はいつ…!!」

皆が力強く返事をした。

(今回の件で、コイツ等のモチベーションが下がっても困るしな。戦力としては微妙だが、いないよりはマシだろうしな)

そう考えた後、二宮は自分の部屋に戻っていった。

「ギンガ、大丈夫か？」

ゲンヤは、現場から戻って来たギンガの事を心配していた。

「ああ、はい。大丈夫です…」

ギンガは力のない返事を返す。

(私一人じゃどうにもならなかった、何も出来なかった…)

彼女はモンスターが襲撃して来た際に、自分が何も出来なかった事

を悔しく思っていた。

(強くないといけない。今のままじゃダメなんだ…そう、今のままじゃ…!!)

ギンガは心の中で、自分にそう言い聞かせた。

第九話 テロリスト騒動 part 3 (後書き)

モンスター達があっさりやられ過ぎた…!!

二宮の凶悪さを早く見せる為とはいえ、無理やり過ぎました。期待していた人はすいません。

それでは感想、お待ちしてます。

第十話 派遣任務（前書き）

第十話投稿！！

今回からサウンドステージ編です。

どうでもいいけど、次は何のモンスターだそうかな…。

第十話 派遣任務

「ん？」

二宮の目が開き、起き上がる。

そこは何もない、真っ暗な空間だった。

「何処だここ？ さっきまで部屋で寝ていた筈だが…」

二宮が疑問に思っていたその時・・・

「？ 何だあの光……ッ!？」

突然何か光り、真っ暗だったのがあっという間に明るくなった。

「くっ、何だよこれ……ッ!？」

二宮は光の先にある、何かに気付く。

光の中に僅かに映る、戦士の姿に…

「!？ お前は」

「　　ッ!？」

二宮はガバツと起き上がる。

機動六課の男子寮の部屋だ。

「あれは…夢だったのか？それにアレは…」

二宮は夢の中に出てきた謎の戦士に見覚えがあった。

「…いや、まさかな」

二宮はベッドから起き上がり、洗面所に向かう。

「『『派遣任務?』』」

「それも異世界?」

あれから二宮達は、はやてから派遣任務の説明を受けていた。

「せや。私等の下にそういう依頼が来てな、私等で向かう事になったんや」

「…まさか、俺達も行くのか?」

「その通り」

当然である。二人のいた地球には、海鳴市は存在してないのだから。

「…二人が平行世界の住人だって事すっかり忘れとったわ」

「えっ!? 二人は平行世界から来たんですか!？」

二人が平行世界から来た事を知らなかったティアナ達は驚く。

「そういえば、コイツ等に説明すんの忘れてたな」

「…俺達が世界の迷子だって事も忘れてたな」

この二人、自分達が次元漂流者である事を忘れかけていたらしい。

「…二人共、何で平然としとんのや」

「じゃははは…」

はやては呆れ果て、なのはは苦笑する。

「まあとにかく、これからその海鳴市でロストログアを回収せなあかんのやけど、二宮さんと浅倉さんもついて来た方がええ。同じ地球やし、ひよっとしたら元の世界に帰る為のヒントか何か見つかるかも知れへんし」

「(…! …言われてみると確かにそうだな。いつまでもこんな世界にはいらねえし、何かヒントでも見つかれば上出来か?) …わかった。そういう事なら、俺達も同行しよう」

「それがええわ。それじゃあ皆、出発の準備に入るで」

はやてが話を纏め、メンバーは出発準備の為に一度解散した。

「参ったな、どうするか…」

部屋で準備していた二宮は考えていた。

何を考えていたのかというと、契約モンスター達の事である。

これから二宮と浅倉は地球の海鳴市に向かう。しかし、それは二人の知っている地球とは違うので、野生のモンスターが生息していない可能性がある。下手をすると、契約モンスター達の餌の確保が出来ないかもしれないのだ。

「ヤンキーでもいたら、そいつ等を餌にすれば良いか？ 八神達にばれないように、見えないところでこっそりとな」

さりげなくとんでもない結論を出した二宮は、ひとまず出発の準備を終える事にした。

「おっ、二人も来たみたいだな」

ヴィータの声に皆が振り向くと、ミッドチルダに流れ着いた時の服を着た二宮と浅倉が合流した。

「これで全員そろったみたいやな」

今この場に揃っているのは、二宮、浅倉、なのは、フェイト、はやて、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ＋フリード、シグナム、ヴィータ、シャル、リインの十三人と一匹である。

ここで二宮が気付く。

「…シグナムも」

「ああ」

「ヴィータも」

「おう」

「シャルも」

「はあ〜い」

「それにリインも」

「はいです〜」

「…何でこのメンバー？」

明らかに主要メンバーばかりである。

「部隊はグリフィス君が指揮を取って、ザフィーラが留守を守ってくれる」

「ロストロギアも詳細不明だから、全員で出撃ってわけ」

二宮の疑問になのはとフェイトが答える。

「…ああそう」

聞いた本人はやはり興味なさそうだ。

「それじゃ、海鳴市へ出発や！」

一同はへりに乗り、地球へ飛び立った。

第十話 派遣任務（後書き）

サウンドステージ編がちゃんと書けるかどうか心配…。

それでは感想お待ちします。

第十一話 海鳴市、到着！（前書き）

第十一話投稿！！

前回の話が短いという意見がありましたので今回は少し長めです。

それではごしげ。

第十一話 海鳴市、到着！

へりに乗っている間、フォワードの四人は地球について調べていた。

「第97管理外世界…文明レベルB…」

「魔法文化無し、次元移動手段無し……って、魔法文化無いの!？」

「無いよ？ うちの父さんも魔力ゼロだし」

ティアナは地球に魔法文化が無い事に驚いていたが、スバルは知っていたらしい。

「スバルさんはお母さん似なんですよね？」

「うん、そっだよ」

エリオの問いにスバルが答える。

「いや、そんな世界からどうしてなのはさんや八神部隊長のようなオーバーSランクの魔導師が…」

「まあ突然変異っていうか、たまたまくって感じやな」

「へ？ …あ、すみません」

「ええよ別に」

突然説明してきたはやてにティアナは謝るが、はやてはすぐに許し

た。

「私もはやてちゃんも、魔法に出会ったのは偶然だしね」

「……へえ」「」「」

（偶然だったとしても、十分異常な気がするがな……）

フォワードの四人が声を揃える中、二宮はなんとなくそう思っていた。

そんな時、シャマルが何かを取り出す。

「はい、リンちゃんのお洋服」

「ありがとうございます」

どうやらリン用のお洋服らしい。しかし…

「…サイズおかしくないか？」

「「確かに」「」

リンの服のサイズが大きすぎる事に二宮が気づき、エリオとキヤロもそれに同意する。

「はやてちゃんのちっちゃい頃のお下がりです」

「あ、いえ、そういう事ではなく……」

「なんか、普通の人間のサイズだなと思って…」

それを聞いたリインは「あゝ」という感じになる。

「まだフォワードの皆さんや、二宮さん達には見せた事なかったですね」

「「「？」」」

フォワードの四人や二宮が首をかしげる中、リインは特殊魔法を発動する。

「システムスイッチ、アウトフレームフルサイズ！！」

魔法が発動した瞬間リインの体が巨大化し、普通の人間と同じ大きさになった。

「でかつ！！」

「いや、それでもちっちゃいけど…」

「普通の女の子のサイズですね」

皆がそれぞれの反応をとる。

「向こうにはリインサイズの人間も、ふわふわ飛んでる人間もいねえからな」

「ふうん…」

ヴィータの言った事に二宮は納得するが、やはり興味なさそうだ。

「リイン空曹、そのサイズの方が便利じゃないですか？」

「この姿は燃費と魔法効率があんまり良くないですよ。コンパクトサイズの方がラクチンでいいんです」

「なるほど……」

スバル達は納得する。

皆が楽しく談話する中、到着のアラームが鳴った。

「八神部隊長、そろそろ……」

シグナムがはやてに呼びかける。

「うん。ほんならなのは隊長、フェイト隊長。私と副隊長達はちよつと寄るところがあるから」

「わかった」

「先に現地入りしとくね」

「……お疲れ様です……」

「ああそれから、二宮さんと浅倉さんはなのは隊長達と一緒に向かってえな」

「ん、了解」

「……」

二宮は返事を返すが、浅倉は黙ったままだった。

なのはとフェイトにフォワード陣、二宮と浅倉は転送ポートにより、とある湖畔に到着した。

「ひとまず到着か」

二宮は周囲の景色を見渡す。

「ミッドチルダとあまり変わりませんね」

「空も青いし、太陽も一つだし……」

「湖が綺麗ですしね」

「ホントね」

フォワードの四人が景色を見て感動する中、浅倉は近くにコテージがある事に気付く。

「あのコテージは何だ？」

「現地の住人の方が使用している別荘です。捜査員待機所としての

使用を快く許可してくださったです」

浅倉の疑問にリインが答える。

「現地の？」

その時、一台の車がやってきた。

「あ、こっちの世界にも車あるんだ」

ティアナが車を見て言う。

そして車の中から一人の女性が降りてきた。

「なのは！！ フェイト！！」

「アリスちゃん！！」

「アリス！！」

アリスと呼ばれる女性となのはとフェイトがハイタッチする。

「ホント久しぶりね」

「にはははは、ごめんね。色々忙しくって」

「忙しいのはこっちも一緒よ。私だって大学生なんだから」

フォワードのメンバーは三人の様子を見てわけが分からないかのよ
うな感じになる。

「あ、紹介するね。こちらが民間協力者で私達の友人の……」

「アリサ・バニングスよ。よろしくね」

「」「よろしくお願いします!!」「」

フオワードは元気良く返事を返す。

「そういえばはやては?」

「はやてちゃん達は別行動。後でまた合流するよ」

「そう……ん?」

ここでアリサは二宮と浅倉の存在に気付く。

「なのは、この二人は?」

「この二人は私達の協力者で……」

「二宮鋭介だ。まあ、よろしく」

「……浅倉威だ」

一応二人も自己紹介を済ませます。

「そう、よろしくね」

アリサは特に警戒する事もなく、笑顔で返す。

「それじゃあ今からスターズとライトニングに分かれて動くけど、二宮さんと浅倉さんはこれからどうしますか？」

なのはに聞かれた二宮は少し考えた後、こう告げる。

「俺と浅倉は少し別行動を取る。調べたい事があるからな。浅倉もそれで良いだろ？」

「ああ」

二人は調べ物の為に、なのは達とは別行動を取ると言う。

「え、でも二人だけで大丈夫ですか？」

「んゝまあ、地図さえあればどうにかなると思う」

二宮は地図さえあれば問題ないと言う。

「分かりました。それじゃあ皆、それぞれ分かれて行動しましょうか」

なのはが一旦話を纏め、メンバーは解散する。

「やっぱり無いな」

アリサから海鳴市の地図を借りた二宮と浅倉は街に到着し、近くに
あったコンビニの雑貨コーナーで様々な雑誌を見て回っていた。

しかしどの雑誌にも、OREジャーナルに関する記事は載っていない。
二宮はかつてOREジャーナルの記事で『金色のザリガニ』に
ついて載せられているのを見たことがあるが、そういうのも全く見
当たらない(『金色のザリガニ』の記事はいつたい誰が載せたのか
知っている人には説明は不要だろう)。

「浅倉、そっちはどうだ？」

「……こっちもダメだな。碌な情報が無い」

浅倉も収穫はゼロらしい。

「(どの雑誌にも、OREジャーナルに関する記事は載っていない。
何故だ？ 少しは何かあっても良い筈なんだがな)……まさか本当に
平行世界に来ちまったのか？」

二宮は雑誌を元の位置に戻しながら呟いた。

「だろうなあ……まあ、俺はこの世界が何であろうと関係ないがな」

「お前も少しは危機感持て」

特に危機感を感じていない浅倉に対し、二宮は呆れ果てる。

「まあ、お前が何と思おうがそれはお前の勝手だ。だが良いのか？
もしこのまま元の世界に戻れなくなってしまうたら……」

二宮は浅倉の耳元でささやく。

「 “スーパー弁護士さん”との決着も、つけられないまま終わる事になるぞ?」

「ッ!」

二宮の台詞に、浅倉は強く反応する。

「少しは考え直せよ。あの男とは因縁があるんだろ?」

「……………」

浅倉は何も言わず、コンビニの外に出て行く。

(ただの逆恨みである事は知ってるけどな…それでも、浅倉はホントに扱いやすいから助かるな)

そんな事を思いながら、二宮もコンビニの外に出る。

二人がコンビニを出たその時…

「ん?」

二人の前に一台の車が止まる。

「二宮さんに浅倉さん、ちょうど良かった」

車に乗っていたのはフェイト達だった。

それから二人は、なのは達に合流する為にフェイトの運転する車に乗って行く事にした。車には運転しているフェイト、二宮に浅倉、エリオとキャロの五人（フリードは怪しまれないように、アリサのコテージで待機）が乗っている。二宮も浅倉もちゃんとシートベルトをしており、やっぱりどこか律儀である。

「そっちの用はもう済んだのか？」

「はい、必要な分だけサーチを設置し終わりましたから。二人の方はどうでした？」

「…俺達が本当に平行世界に来てしまった、ていうのはよくわかった」

二宮はめんどくさそうに答える。

「そうですか…」

フェイトは二宮の表情を見る。

「（何だろう…二宮さん、どこか冷めたような目をしてる）…二宮さんは、誰か待っていてくれる人はいるんですか？」

二宮が冷めたような目をしている事に気付いたフェイトは、思い切って彼に聞いてみた。

「…いないな。家族は全員死んでいる。ガキの頃にな」

「あつ、ごめんなさい…」

それを聞いたフェイトはすぐに謝った。

「いや、別に良い。かなり昔の事だからな。俺も、浅倉も…」

「えつ、浅倉さんも？」

それを聞いたエリオとキャラは浅倉の方に目を向ける。

さつきから黙っていた浅倉はまた口を開く。

「…俺もガキの頃に、家族が火事で死んだ」

「そんな…」

エリオとキャラは暗い表情になる。

「お前等が気にする事じゃない。これは俺達の話だからな…」

そう言って、また浅倉は何も言わなくなった。実はまだ、二宮と浅倉は隠している事があるのだが、それを明かすのはまだ先の話だろう。

聞いてはいけない事を聞いてしまったと思ったフェイトは、彼らに對してどう口を聞けば良いかわからないでいた。エリオとキャラも同じである。

しばらくの間、車の中では沈黙が続いていた。

第十一話 海鳴市、到着！（後書き）

話の中に、もし何かおかしな点があったら言ってお下さい。

あ、でも悪口は書かないで下さい。作者はメンタルが弱いので、そういう事を言われるとものすごく凹んでやる気なくします…。

それでは感想お待ちしてます。

第十二話 夕食&銭湯・二宮の企み（前書き）

第十二話投稿！！

サウンドステージ編、終わるかと思ったらまだ続いてるよ…。

まあでも次回辺りで終わるかな？

それではどうぞ。

第十二話 夕食&銭湯・二宮の企み

あれからフェイト達はコテージに戻り、はやて達と合流した。

そんな中、二宮は紫色の髪の女性がいる事に気付く。

「誰だ？」

「ああ、二人にはまだ紹介しとらんかったな」

「初めまして。月村すずかです」

紫色の髪の女性、月村すずかは二宮と浅倉に自己紹介する。

「俺は二宮鋭介だ。まあ、よろしく」

「…浅倉威だ」

二人も自己紹介を済ませる。

そこへなのは達が戻って来た。

「あ、すずかちゃん！」

「なのはちゃん！！久しぶり」

なのはとすずかは久しぶりの再会を喜んでいた。

「…仲が良いんだな」

なのはとすずかの様子を見ていた二宮が呟く。

「小学生の頃からの友達だからね」

「ふうん…」

フェイトの言葉を聞いた二宮は、また何も言わなくなった。

(二宮さん、やっぱりさっきの事を…?)

先程二宮から家族の話聞いたフェイトは、彼の様子を見てつい暗い表情になる。

「フェイトちゃん、どうしたの?」

すずかがフェイトに話しかけてきた。

「え? … ああいや、何でもないよ」

フェイトは何でもないと答えた。

その時、また一台の車がやって来た。

「…今日はやけに車を見るな」

二宮がそう言ってる間に、車から何人かの女性と子供(?)が降りてきた。

「やつほおー!」

「皆、仕事してるかあ〜？」

「お姉ちゃんズ、参上！」

現れたのは、フェイトの義姉であるエイミー・ハラウン、フェイトの使い魔であるアルフ、なのはの姉である高町美由希だった。

「…面子が多すぎて、もうわけが分からん」

「じゃははは…」

頭を抱える二宮を見て、なのはは苦笑するしかなかった。

それから皆は夕食の準備に取り掛かったのだが、フォワード陣ははやてが料理しているのを見て驚愕していた。

「部隊長自ら鉄板焼きを！？」

「そ、そんなの私達がやります！！」

「ああ〜…でも待ち時間はあつたし、料理は元々私の趣味なんや」

「はやての料理はギガうまだぞ。ありがたくくださいとけ」

グイータはこう言っているが、実際料理しているのははやてだけで

はない。

「うわぁ、おいしそう〜」

「二宮さん、すごいですね」

「料理が下手だと、一人暮らしも出来ないからな。これぐらいなら普通に出来る」

二宮も料理作りを手伝っていた。

実は二宮も、ミッドチルダに来る前は一人暮らしをしていた為、料理は意外と得意なのだ（腕前は“某スーパー弁護士の助手”に後一歩及ばないくらい）。

そんな中、シグナムはシャマルの方を向く。

「シャマル、余計な手出しはしてないだろうな？」

「あぁ〜、シグナム酷い!!」

「材料切りとかは手伝ってくれたで」

はやてが補足を入れる。

それを聞いたシグナムとヴェータは顔を見合わせる。

「材料切りなら…」

「まあ、大丈夫か」

その会話を聞いていたスバルは恐る恐る聞いてみる。

「シャル先生って、もしかして…」

「違うもん!! シャマル先生、料理下手なんかじゃないもん!!」

「下手な奴は大抵そう言う」

「に、二宮さんまで…酷い…」

二宮にまで言われ、シャルは凹んでしまった。

「二宮さん、シャルが可哀想や」

「なら聞こう。シャルは料理が上手いのか？」

「」「」「……」「」

「何でそこで黙るんですかあっ!?!」

はやて達は完全に黙り込んだ。どうやら事実らしい。

「所詮、お前はその程度だ」

「づづづ…」

シャルは部屋の隅っこで体操座りになってしまった。今の一言で完全にトドメを刺されたようだ。

「さて。そこで凹んでる奴は放つとして、皆で料理を並べていってくれ」

こうは言っているが、二宮の顔はほんの少しニヤついている。

「…二宮さん、ひょっとしてS?」

二宮の表情を見たティアナはそんな事を思っていた。

その後は皆で食事を楽しんだ。

シグナムとヴィータは焼いた肉を求めて争ったり、なのははフォワード陣よりも先に肉を食べるといふ大人気ない行動に出たり、スバルとエリオが次々と料理を平らげていたり、二宮と浅倉は自分の分だけしっかり確保していたりと、色々ありながらも食事は楽しく続いた。

そして、食事が終わった後…

「さて、サーチャーの様子を監視しつつ、お風呂済ましてこか」

「」「はい…!」「」

「あ〜でもここ風呂無いし、水浴びって時期でもないし…」

「だとするとやっぱり…」

「あそこですかね？」

「あそこでしょ」

「「「？」」」」

アリサ達の会話を聞いてるフォワード陣は頭に？マークを浮かべる。

「それじゃあ六課一同、着替えを用意して出発準備！！」

「これより市内のスーパー銭湯に向かいます！！」

「スーパーセントウ…？」

フォワード陣は何の事かわからないらしい。

「簡単に言えば、公共で使う風呂みたいな物だ」

二宮が簡単に説明する。それを聞いたフォワード陣は「へえ」という感じになる。

「さあ出発や！」

そして一同はスーパー銭湯に到着した。

「いらっしやいませ。団体様ですか？」

「はい、子供四人、大人十四人です」

まずはやてが受付で人数を確認する。

「子供って…」

「エリオにキャラと…」

「私とアルフさんです」

「おう！」

子供はエリオとキャラ、ラインにアルフの四名。

大人は二宮、浅倉、なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、スバル、ティアナ、アリサ、すずか、エイミー、美由希の十四名である。

二宮はヴィータに聞く。

「…お前、大人なのか？」

「うつせえっ！！アタシは大人だ！！」

「ガキだな、見た目も中身も」

「んだとお〜！？」

二宮と浅倉に子供扱いされ、ヴィータは二人に突っ掛かる。

「まあまあ。それじゃあ私が会計済ましとくから、皆は先行つとつてえな」

「うん、わかった」

はやてに会計を任せ、一同は先に浴場に向かう。

(良かった…ちゃんと男女別だ)

エリオは浴場が男女別である事にホッとした。

「楽しみだねエリオ君」

「うん、スバルさん達と楽しんできなよ」

それを聞いたキャラは涙目になる。

「エリオ君…一緒に入らないの？」

「えっ、いやでも…僕も一応男の子だし…」

キャラに涙目で迫られ、エリオはタジタジになる。

「あれ？」

キャラは看板を見つけ、それを見て笑顔になる。

「ふふっ、エリオ君。あれ」

「え、注意書き…？ えっと…『男児の女湯への入浴は、十一歳以下のお子様のみでお願いします』」

「エリオ君、十歳でしょ？」

「え…あつ！？」

エリオは「しまった！」という感じの表情になる。

エリオは今、自滅したのだ。

「い、いや、スバルさんにティアナさんもいるし、アリサさん達もいるから…」

「私は別に構わないわよ？」

「ていうか、前から髪洗ってあげるって言ったじゃん」

ティアナとスバルはあっさりOKを出す。

「あたしも良いわよ？」

「エリオも一緒に入ろうよ」

アリサもOKを出し、フェイトはエリオを誘おうとする。

「え、えっと…はっ、そうだ！！ 二宮さんと浅倉さんは…！」

エリオは二人に助けを求めるが…

「さうて、さっさと入ってさっさと上がるうかねえ」

「まあ、そうするのでしょうか…」

二人はあっさりエリオを見捨て、男湯に入っていつてしまった。要するに、エリオは二人に見捨てられたのだ。

「そ、そんな…」

あっさり裏切られ、エリオは啞然としてしまう。

「「ねえ、エリオくん」」

キャロとフェイトが迫る。

「…す、すいません！！ やっぱ僕には無理ですっ！！」

エリオは急いで男湯に逃げ込んだ。

「エリオと一緒に入りたかったなあ…」

フェイトが残念そうにする中、キャロは看板の注意書きをジッと見ていた。

「もう、僕を置いて行くななんて酷いです」

「はいはい、悪かったな」

現在、男三人は湯船に浸かっていた。

「そういえば浅倉さん、その傷はいつたい……」

エリオは浅倉の右肩にある傷跡に気付く。

「これが……火事の時に付いた傷だな」

「あ……すいません」

「気にするなと言ったはずだ」

少しの間、沈黙が続く。

「……二人は、ライダーなんですよね」

「どうした急に」

エリオは二人にある事を聞く。

「何故、ライダーとして戦っているんですか？」

それを聞いた二宮は少し考え、口を開く。

「……簡単な事だ。生きる為だ」

「生きる為？」

「そうだ。世の中弱肉強食だって、前にも言ったよな？ 正に言葉通りだ。自分が生き残る為には、闘って勝ち残るしかない」

「俺の理由も単純だな」

今度は浅倉が口を開く。

「俺はガキの頃から暴力を振るわれてきた。その所為で殴るか殴られるかしていないとイライラするようになってしまった……今じゃもう、闘いその物が俺の生き甲斐みたいな物だ」

「そんな……」

それを聞いたエリオは驚く。

「俺も浅倉も、闘いの中を生き抜いてきた。それに……」

二宮は水面を見る。

「油断したら、いつコイツ等に襲われるか分かんねえしな」

「えっ……うわあっ!?!」

エリオは水面を見て思わず飛び上がった。

『『グルルルルルル……!!』』

何せ水面には、アビスラッシャーやベノスネーカー達が映っていたのだから。

「コイツ等には常に餌を与えないといけない。それを怠れば自分が喰われる事になるからな。誰かにカードデッキを押し付ける事も出来るんだが、それだと俺達のモンスターに対抗する術がなくなる…
…まあ結局、俺達は闘うしかないんだ」

二宮がそう言ったその時…

『一度ライダーになった者は、ライダーとしての宿命を負う。逃げる事は出来ない!!』

「……………」

二宮の脳裏に、“とある人物”の言葉が浮かび上がる。

「とにかく、俺達はこれからも闘い続ける。ライダーとしてな」

二宮が話を纏める。

「…いつか」

「ん？」

エリオは呟く。

「いつか闘いから解放されて、自由になれると良いですね」

「…何故そう言うの？」

「僕もフェイトさんも皆、二人の事が心配なんです。二宮さんも浅倉さんも、僕らにとっては仲間なんですから」

「…そうか」

二宮とエリオが話していたその時…

「エリオくん」

「え…ええっ!? キ、キャロ!?」

なんとキャロが男湯に入ってきたのだ。エリオの慌て方は半端無い事になっている。

「な、何でこっちに!?!」

「ふふっ、十一歳以下なら、どっちに入っても良いんだよ?」

どの道、エリオに逃げ場は無かったらしい。

「行こう、エリオ君」

「え、ちょっと…二宮さん!! 浅倉さん!! 助けて下さあああああああ!!」

エリオはキャロに引きずられ、女湯に連れて行かれてしまった。

「……………」

エリオが女湯に強制連行された為、男湯は二人だけになった。

「…さて、良いように誤解してくれたな」

二宮がまた話を切り出す。

「…全部お前の策略か？」

「信頼は築いておいた方が良い。後で色々動きやすいからな」

そう言って、二宮はまた水面を見る。

アビスラッシャー達はまだ二宮と浅倉を睨み付けている。

「さて」

二宮は湯船から上がる。

「風呂が上がったら、また街に出るぞ」

「…何故だ？」

「何故って…決まってるだろ」

二宮は浅倉の方に振り返る。

「餌の確保の為だよ」

二宮は怪しい笑みを浮かべながら言い放った。

第十二話 夕食&銭湯・二宮の企み（後書き）

次回、またアビスラッシュャー達による被害者が出そうです…。

それでは感想お待ちしております。

第十三話 虐殺（前書き）

第十三話、ようやく投稿！！何かいつもより時間かかったな……。

今回でサウンドステージ編は終了です。ただし今回はタイトル見たらわかるように、死人が出ます。

∴ 死人は必要以上に出さないって感想一覧で言ったけど、何か思ってた以上に死人が増えてる∴ダメだ、ホントにダメだ∴もう有限実行なんてするまい……。

∴ 少々ネガティブになっちゃいましたが、取り合えずどうぞ。

第十三話 虐殺

あれから時間が経ち、一同は全員風呂を上がっていた。

その直後にロストログアの反応があった為、六課メンバーは全員出勤。コテージでは二宮達が待機していた。

「…浅倉」

「…ああ」

二宮と浅倉は立ち上がり、外に出て行く。

「あら？ 二宮さんと浅倉さん、何処に行くのかしら？」

美由希は不思議そうに二人を見る。

「私、ちょっと見てきます」

「気をつけてね」

二人の事が気になるのか、すずかは二人の後を追ってみる事にした。

「おて、どごしよっかな」

二宮と浅倉は再び街を訪れ、適当にうろついていた。

「誰を餌にするつもりだ？」

「ヤンキーでもいれば良いんだがな。まあ、そう都合良くいるわけないか」

二人が話していると…

「イテッー!!」

一人のヤンキーが二宮にぶつかった。

「…マジで？」

何ともまあ、早すぎるエンカウントだ。

「いってえな、てめえ!!」

「ああ、悪いな。気をつけるよ」

二宮は簡単に謝る。しかしヤンキーはそう簡単に許す筈も無く…

「おい、ちょっと待てや」

ヤンキーが二宮の肩を掴む。

「…ちゃんと謝った筈だが？」

「ああ？ そんなんで許されると思ってんのか？ お前の所為で腕

の骨折れたらどうしてくれんだ、ああん？ 責任取れんのか？」

ヤンキーはやけに突っ掛かってくる。

(…ヤンキーってのはここまでイラつく物なのか？)

(自分からぶつかって来たくせにな)

二宮と浅倉は小声で話す。

「おい、聞いてんのかコラァッ！！」

ヤンキーが怒鳴る。

「…なら、俺にどうしろと？」

「そうだな、お前の持ち金を全部よこしてもらおうか」

ヤンキーは二宮に持ち金を要求する。

「ああ…悪いが金は無理だな。こっちは一人暮らしなもんだから、無駄に金をなくすわけにはいかねえんだよな」

二宮は要求を拒否した。

「ほう、ならちょっと付き合ってもらおうか」

「ん……！！」

気がつくのと、いつの間にか五人のヤンキーが二宮と浅倉を取り囲ん

でいた。これでヤンキーは計六人になり、バットやチェーンを持ってる奴もいる。

「…豪華なもんですな」

二宮は呆れ返る。

「お前等も不憫だよなあ。さっさと金払えば、痛い目を見なくて済んだのになあ？」

先程二宮にぶつかったヤンキーが前に出る。どうやらこいつがリーダー格らしい。

他のヤンキー達も余裕の表情である。

周りの人達は只事じゃないと察知したのか、「我関せず」とでも言うかのように急いでその場を退散していく。

(周りの奴等も薄情者だな、おい)

二宮は内心そう思っていた。

「まあ、ここじゃ何だ。ちよっくらついて来てもらおうか」

結果、二人はヤンキー共に強制連行される事になってしまった。

(…よし、作戦成功)

まあこれも、全部二宮の作戦通りだったわけなのだが。

結局、二人は人気の少ない所まで連れて来られた。

「さあ、始めようかあ〜…」

早速六人のヤンキーが二人を取り囲む。

「ああ〜結構やばいかもなあ〜」

二宮はこんな事を言ってるが、実際はかなり余裕である。何故なら
今…

「まずは俺が……ゴハツ!？」

「「「!?!?!」」」

「…はっ」

二宮の隣には、浅倉がいるのだから。

今早速、ヤンキーが一人浅倉によって殴り倒された。

「て、てめえっ!! やりやがったな!？」

ヤンキーが殺意を剥き出しにする。

「すう〜、はあ〜…」

浅倉は息を吸い、大きく吐く。

「んん〜…」

そして首を捻り、首の骨がゴキゴキと鳴る。

「ああ……俺は今、最高に気分が悪い。お前等、俺と遊んでくれよ」

浅倉はヤンキー共を挑発する。

「なっ、てめえー!!」

また別のヤンキーが殴りかかる。だが…

「はあっ!!」

「ぐはっ!?!」

浅倉の膝蹴りがヤンキーの腹に炸裂し、ヤンキーはそのままたまなざし倒される。

「くそっ…!!」

また別のヤンキーが殴りかかっては…

「ふんっ!!」

「ぐえっ!?!」

逆に殴り倒される。

「んの野郎!!」

今度は手に持ったバットを振り下ろそうとすれば…

「おらぁっ!!」

「ぐぶっ!?!」

バットの軌道を反らされ、顔面に拳を入れられる。

「くっ、くそう!!」

また別のヤンキーが、浅倉の右腕にチェーンを巻きつける。

「!!」

右腕にチェーンを巻きつけられ、浅倉は一瞬動きが鈍る。

その隙にヤンキーが殴りかかり…

「ゴスツ!!」

浅倉の顔面に炸裂する。

「よっっ…!!?!」

ヤンキー達は驚愕の表情を浮かべる。

「…はっはぁ」

浅倉は痛がるどころか、逆に不気味な笑みを浮かべていた。

「う、嘘だろ…グフツ!？」

「やっぱめんどくさいな」

浅倉を殴ったヤンキーは、後ろから二宮の右ストレートを受け、ダウンした。

「また俺の邪魔をするか？」

「…うん、普通に浅倉に任せときゃ良かったな」

気がつくのと、立っているヤンキーはもうリーダー格の男一人だけになっていた。

「そ、そんなバカな…!？」

リーダー格の男は焦っていた。顔からはもう、余裕の表情は消えている。

「どうする？二人で決めるか？」

「…その台詞、シグナムにも言われた事があるんだが」

「知らん、文句ならシグナムに言え」

二人はリーダー格の男に向き合う。

「ちよ、ちよつと待…」

「ふんっ!!」

「ふあっ!？」

二人のストレートが決まり、リーダー格の男は倒れた。

「はい、終了」

「ふん…」

あっという間に、ヤンキー達は全滅した。

「ぐう、くそっ…」

ヤンキー達は全員、倒れてはいるが気絶はしてない。

「ああ、まだ気絶はしてないか」

二宮はしゃがみ込み、倒れてるヤンキー達の顔を覗き込む。

「うう…悪かった、俺達が悪かったよ…」

リーダー格の男は先程と違って、かなり弱気になっている。

「もう金を要求なんてしない、だから許し」いや、俺達の目的はそうじゃない「…!？」

ヤンキーの言葉を二宮が遮る。

「正直、俺達はお前等みたいなのヤンキーがいて助かってるんだよ。何せ……」

二宮は立ち上がり、近くのカーブミラーを見る。

「餌に困らなくて済むからな」

二宮がそう言い終わると同時に……

「グオオオオオオオオオオツ!!」

「コイツ!?」

カーブミラーからアビスラッシャーやベノスネーカー達が飛び出して来た。

「ひいつ!? な、何だコイツ等!?!」

ヤンキー達はアビスラッシャー達を見て腰を抜かす。

「さあ、お食事タイムだ」

二宮が言い放った直後にアビスラッシャー達はヤンキー達に飛び掛かり、ミラーワールドへと無理やり引きずり込んだ。

「ひいつ……ぎゃあああああああああああつ!?!」

一人はアビスラッシャーとアビスハンマーに取り押さえられた状態

で噛み付かれたり…

「た、助けがああああああああああつ!?!?」

また一人はメタルグラスとエビルダイバーに頭から喰われたり…

「ぐぎゃあああああああああああつ!?!?」

ベノスネーカーに下半身から喰われたりと、ミラーワールド内ではかなりグロテスクな光景が続く。

「ひいいいっ!?!? おっおい、お願いだ、助けてくれ!!」

ミラーワールド内にいるリーダー格の男は、二人に助けを求める。

「嫌だね、助ける理由が無い。もとより俺達はお前等を餌にするつもりでいたからな」

「そ、そんな…ツ!?!?」

そうしてる間にも、ベノスネーカーが口を大きく開けて迫る。

「や、やめろ…!! 来るなつやめ…ひっ…ひぎゃあああああつ!?!?」

遂にはリーダー格の男もベノスネーカーに喰われ、ヤンキー達は全員契約モンスター達の腹の中に収まる結果となってしまった。

「んん…まあ、これで良いか?」

二宮はアビスラッシャー達の“お食事タイム”が終わったのを確認する。

「これだけで十分か？」

「十分だろ。これでも足りないのなら、また誰か喰わせれば良い話」

二宮は落ちてしているバットを拾い、適当に振るいながら言う。

「…奴等に気付かれてないだろうな」

「多分大丈夫だ。何があったのか聞かれた時は、たまたまモンスターがっついて来てたと、適当に嘘を言えば良い」

二宮はバットを放り捨てる。

「そろそろ、あいつ等もロストログアとやらを封印したか？」

「なら、早く戻った方が良さだろうな」

「ん、そうするか」

そして二人が戻ろうとしたその時…

・カラアンカラアン…

「「！？」」

突然空き缶の音が響き渡り、二人は音のした方を向く。

「あつ……!?!?」

二人の視線の先にはすすかがいた。しかもどこか怯えている様子である。

「（まずい、今を見られたか!?!）…逃がすな」

二宮の命令を受けたアビスラッシャー達はカーブミラーから飛び出した。

「きゃあつ!?!?」

逃げようとしたすすかだったが、あつという間にアビスラッシャー達に取り囲まれてしまい、恐怖でその場に座り込んでしまった。

「…わっ」

二宮はすすかに近寄り、しゃがみ込む。

「…何なんですか、あなた達はいつたい……!?!?」

すすかはかなり怯えているらしく、肩が震えている。

「その前にちよつと聞きたい事がある」

二宮の顔とすすかの顔が近くなる。

「月村すすか。お前はここで、何を見ていた?」

二宮は問い詰める。

しかしすずかは下を向き、黙り込んだままである。

「…もう一度聞く。お前は、今の光景を見ていたのか？」

アビスラッシャーが唸りながらすずかに近寄り、すずかの震えは更に強くなる。

それでもすずかは口を開かない。

「…あくまでだんまりを決め込む気か。なら仕方ない」

二宮は立ち上がる。

「ミッドチルダでまた行方不明者が出るかもな」

「ッ!？」

それを聞いたすずかは顔を上げる。

「お前の大事な友達も、ひよっとしたらミッドチルダで行方不明になっちゃうかもな。モンスターってのはよくわかんないからな。俺達の気付かないうちに、また民間人を襲う事になるかもしれん。もしそうならきつと、皆が悲しむだろうな…」

「わかりました!! 喋ります、喋りますからなのはちゃん達には手を出さないでっ!!」

すずかは二宮の服を掴み、必死に懇願する。よく見ると、微妙に涙目にもなっている。

「なら聞こう。お前は、ここで起こった事を見ていたのか？」

「…見ました」

ようやくすずかは答えた。

「…最初から素直に答えりゃ良いのに」

そう言つて、二宮はアビスラッシャー達をミラーワールドに戻らせ、再びすずかに向き合う。

「良いか？ ここで起こった事は誰にも言つな。この地球には任務で来ているが、ひょっとしたらまたここに来る可能性もある。その時に、もし誰かにこの事が知られていたら…わかるよな？ いちいち口で言わなくても」

二宮はすずかを見下しながら言い放つ。

「…わかりました」

すずかは承諾する。

「…それで良い。ばらすような事さえしなければ、あいつ等には手出しはしない」

二宮は後ろを向き、歩き始める。

すずかはその場に座り込んだままである。

その事に気付いた二宮は後ろを振り返る。

「…どうした？ さっさと戻ろ。今頃あいつ等が心配しているだろっしな」

そう呼びかけ、二宮は再び歩き出す。

先程から黙っていた浅倉も、二宮に続いて歩き出した。

すずかも肩の震えがまだ完全には抜け切れていなかったが、ゆっくり立ち上がり、彼等の後に続いた。

「皆もう帰っちゃったの？」

あれから二宮達はコテージに戻り、六課のメンバー、そして二宮と浅倉はミッドチルダに帰還する為の支度をしていた。

「ん〜まあ、もう少しゆっくりしてもいいんだけど、本来の仕事もサボっちゃいけないしね」

「それに、今の仕事も結構楽しいし」

「そんなんだからワーカーホリックって言われるのよ」

「「……」」

アリサに指摘され、なのはとフェイトは何も言えなくなる。どつちから星らしい。

「全く……ところで」

アリサはすずかの方を向く。

「すずか」

「……」

「すずか」

「……」

「すずかっ!!」

「ひにゃあっ!!!?!」

ボクっとしていたすずかはようやく反応し、変な声が出る。

「たくっ、どうしたのよ？ さっき戻って来てから全く元気ないじゃない」

「ああ、うん。えっ」と

すずかは返答しようとした時、二宮に言われた事を思い出す。

『もし誰かにこの事が知られていたら……わかるよな？口で言わなくても』

「……うん、何でもない。だから気にしないで」

すずかは先程の件についてはだんまりを決め込む事にした。

「ホントに？」

「ホント」

「ホントにホント？」

「ホントにホント」

「嘘は無いね？」

「無いよ」

「……」

アリサはすずかの顔をジロジロと見た後、軽く溜め息をつく。

「…なら良いわ。無理しちゃダメよ？」

「うん、わかってる」

すずかはなんとか笑顔を返す。どこか力のない笑顔ではあるが。

「ほな、そろそろ帰還するで」

一同ははやての下に集まり始める。

「…ねえ」

「ん？」

なのははずかに呼び止められる。

「どうしたの？ はずかちゃん」

「…あの二人」

はずかの視線の先には、二宮と浅倉の二人がいる。

「…なのはちゃんにとって、あの二人はどう思ってるの？」

「へ？ うーん…」

二人の事を聞かれたなのはは少し考え、口を開く。

「ん〜…あの二人についてはまだよくわかんないけど、言える事は
一つ」

なのははずかの方を向いて言う。

「あの二人は悪い人じゃない。なんとなくだけど、そんな感じがする」

なのはは笑顔で答えた。

「……」

それを聞いたすすかは黙り込む。

「なのは、早くしないと置いてくよ」

フェイトがなのはを呼ぶ。

「あ、はい。それじゃすすかちゃん、またね」

「あ…うん」

なのははすすかに手を振った後、六課一同の下に向かった。

（悪い人じゃない？ ……違う、違うよなのはちゃん。あの二人…あの二人が、一番危険なんだよ…）

なのはと別れた後、すすかは心の中で不安を感じていた。

こうして、六課一同による派遣任務は終了し、一同はミッドチルダに帰還した。

第十三話 虐殺（後書き）

さて、次回からホテル・アグスタ編になりますが、こちらの事情により、ここから先は本当に不定期更新になります。

…いやちょっと待て、夏休みの真っ最中である筈なのに不定期更新になるってどういう事だ？

…まあそれはともかく、感想お待ちしてます。

第十四話 ホテル・アグスタ（前書き）

第十四話投稿！！

今回からホテル・アグスタ編です。そして例の“夢のライダー”ですが、意外と早い段階で判明します。

それではどうぞ。

第十四話 ホテル・アグスタ

派遣任務が終わってから数日後…

「…ん？」

二宮は再び、あの真つ暗な空間にやって来ていた。

「またこれか…ッ!？」

二宮が発言しようとした直後に、再び光りだす。

「くそ、ホントに何だっただ」

「ここでお前に会うのは初めてだったな、二宮鋭介」

「ッ!？」

光の中から一人の戦士が姿を現し、二宮の前に降り立つ。

鳳凰の意匠を持った、黄金の戦士。

二宮はその戦士に見覚えが…いや、その戦士を知っていた。

「見た事があると思ったらやっぱりお前か　オーディン」

二宮は突然現れた戦士、“仮面ライダーオーディン”と向き合う。

「やはり、私を知っていたか」

オーディンが姿を現すと同時に光が収まり、また真つ暗な空間に戻る。

「お前には一度殴られた記憶があるからな。神崎の狗が…!!」

二宮はオーディンを睨みつける。

「狗、か……確かに、かつてはそうだった」

オーディンの台詞に、二宮は顔をしかめる。

「かつては？　…今は違つても言いたいのか」

二宮はオーディンに対しての警戒を解かない。

「…そう睨むな。私はお前と話がしたいだけだ」

「信用するとても？」

一触即発の状態が続く。

「信じろとは言わない。だがお前にとつても悪い話ではない。警戒するのは、話を聞いてからでも良いんじゃないか？」

「…内容によるな」

「感謝する」

二宮は一応、警戒を解く。それでも完全に信用したわけではないが。

「まずは聞かせろ。お前は何故俺の前に現れた？ それも夢の中で」

二宮は最初に、一番の疑問を問う。

「…そうだな。まずは私の事について話しておこう」

オーデインは一息つき、再び話し出す。

「私は確かにオーデインだ。かつて、仮面ライダーナイトに倒された…な」

「…秋山か」

二宮の脳裏に、“秋山蓮”あきやまれんこと“仮面ライダーナイト”の姿が思い浮かぶ。

「そして倒された後、私はとある世界に流れ着いた。それが…」

「このミッドチルダ…ってわけか？」

「そうだ。管理局側から見れば、次元漂流者という奴だ」

オーデインは二宮の周りをゆっくりと歩き始める。

「ミッドチルダに流れ着いたとしても、一度倒され、役目の無くなった私には特にやろうと思うような事も無かった。だから私は、この世界でひっそりと隠れて生きていく事にした」

オーデインは二宮の後ろまで来る。

「だが」

オーデインは一旦立ち止まる。

「ある時、このミッドチルダには存在している筈の無い、モンスター達が現れ始めた」

(あのモンスター達か)

二宮はミッドチルダで遭遇したモンスター達を思い出す。

「何故モンスター達が現れたのか、私は様々な手段を使って調べ事にした。そして調べた結果、わかった事がある」

「何だ？」

二宮はオーデインの方を振り返る。

「お前達だ」

オーデインは二宮を指さす。

「二宮と浅倉、お前達がレリックによってこの世界に転移してしま

った際に、世界と世界の境界線が破られ、次元の壁に穴が開いてしまった。その穴から、モンスター達もお前達のいた世界からミッドチルダに流れ着いてしまったのかもしれない」

「要するに、俺達の所為って事か？」

「そついう事だ」

オーデインはハッキリと断言する。

「この世界に流れ着いたモンスターはどれ程いるんだ？」

「思っていた以上に数が多い。しかし数が多いだけで、それ以上増えているわけではない。今は私の力を使って、その次元の穴をどうにか塞ぐ事が出来ている」

「明確な数はわからないって事か…」

二宮は溜息をつく。

「それにしても、その事態はお前の力じゃどうにもならんのか？」

「起こった事態の次元が違うからな。私も、今は次元の穴を塞ぐのに精一杯だ」

「ふうん」とでも言うように二宮は興味の無さそうな顔をする。

「それで、俺にどうしろと？」

「…私はまだ何も言っていないのだが」

オーデインは首を傾げる。

「ここに俺を呼んだって事は、お前は俺に何か用がある。そうじゃなかったらわざわざ話の中にモンスターだとか世界だとか、そんな次元の大き過ぎる話はしない。違うか？」

「……」

オーデインは黙り込む。どうやら核心を突いていたらしい。

「……やはり侮れないな、二宮」

「伊達に人間社会を生き抜いて来たわけじゃない」

「……そんなお前に、頼みたい事がある」

オーデインは再び二宮の前に立つ。

「この世界のモンスター達を退治し「断る」……即答過ぎないか？」

「何でそんな事を俺がしないといけないんだ？ めんどくさくてしようがない。そういう事は浅倉に任せれば良いだろう」

二宮はあっさり断ってしまった。

「ダメか？」

「ダメだ」

「ホントにダメか？」

「ホントにダメだ」

「どうしてもダメか？」

「どうしてもダメだ」

「やっぱりダメか？」

「やっぱりダメだ」

「元の世界に戻れるとしてもか？」

「………何？」

喰いついた。

「…ダメなんじゃなかったのか？」

「元の世界に戻れるなら話は別だ。魔法だとか何だとか、そんなわけの分からん世界に取り残されるなんて冗談じゃない」

それを聞いたオーデインはフツと笑う。

「そうか、それなら良かった」

「…で、その方法ってのは？」

「うむ」

オーデインは自身のカードデッキから一枚のカードを抜き取り、二宮に見せる。

「…それが？」

「そつだ」

オーデインが見せたカード、それは時計の絵が描かれた“タイムベント”だった。

「何のカードだ？」

「タイムベントだ。これのカードを使えば、時間その物を逆行させる事が出来る」

「なっ…!？」

それを聞いた二宮は驚愕した。

「おいおい、そんなカード初めて見たぞ。少し反則過ぎないか？」

「このカードは龍騎やナイトの前で一度使った事があるが、その時お前はいなかったしな。知らないのは当然だろう」

そしてオーデインはタイムベントのカードをしまう。

「モンスター達を全て倒してくれば、このカードをやるう。お前達がこの世界に流れ着く前まで時間を遡る事で、お前達は元の世界に戻る事が出来る。もちろん、記憶を保持した状態でな」

二宮は一度考え込む。

(本当なら一人で帰りたところだが、浅倉もいた方がライダーを減らすのに都合が良い。面倒だが、やっぱり二人で帰るのが一番妥当か…)

「ではもう一度聞こう。お前は、この仕事を引き受けてくれるか？」
オーディンはもう一度、二宮に問い掛ける。

「…わかった。引き受けよう」

二宮は承諾する。

「だが何故俺に話したんだ？ 別に浅倉でも良いだろうに」

「あの戦闘狂に任せるのも少々不安なのでな。お前の方が話を理解してくれるだろうと思っただけ」

「ああ…」

二宮はどこか納得のいったような顔になる。

「話は一旦これで終わるとしよう。モンスター退治、任せたぞ」

「…まあ、良いだろう。めんどくさいけどな」

「そうか。では…」

オーディンは両腕を大きく広げる。

すると再び周りの真つ暗な空間が光りだす。

「ああ、良い忘れていた。お前の今の力だけでは何かときついだろ
うから、お前に特殊な力を与えておこうと思う」

「はっ!?! それってどういう」

二宮が言い終わる前に、空間は光に包まれ

「ッ!?!」

二宮は起き上がる。

そこは男子寮の部屋だった。

「夢だったのか…って、ん?」

二宮は手元に何かがあるのに気付く。

「何だ…ッ!?!」

二宮は手元にあった物を見て驚愕した。

「これは…!?!」

それは、かなり強力な力を秘めたカード…

“ サバイブ『無限』 ” だった。

「さて、任務の話だけど」

現在、六課のメンバーはへりに乗り、目的地まで移動していた。

なのは達が任務内容について話している中、二宮は話を耳で聞きながらもへりの外を眺めており、浅倉は全く話を聞いていなかった。

そして二宮は、なのは達の会話の中からとある次元犯罪者“ ジェイル・スカリエッティ ” という名を耳にする。

（次元犯罪者ねえ…）

二宮は自身の隣に座っている人物を見る。

「……………」

(コイツも犯罪者なんだよなあ…)

隣に座っている浅倉を見た二宮は、そう思わずにはいらなかった。

そんな中、キャロはシャマルが手に持っている箱に気付く。

「あの、シャマルさん。その箱はいつたい…?」

「ああ、これ?」

シャマルはフフツと不敵な笑みを浮かべる。

「隊長達と、二宮さんと浅倉さんのお仕事着よ」

この時、二宮の背筋に寒気が走ったのは決して気のせいではない。

「ハア…やっぱり着せられる羽目になるのな」

「ふん…」

あれから結局、二人は例のお仕事着を着せられていた。それでもやっぱり律儀に着こなしている。

「それじゃあ二人には、はやてちゃん達と一緒に中の警備を頼むわ」

「ん、了解」

「……」

シヤマルに言われ、二人はホテルの中へ入っていく。

（それにしても何故隊長達は中の警備なんだ？ フォワードの奴等に外を任せるのもどうかと思うんだがな…）

二宮は内心そう感じていた。

「おっ、来たみたいやな」

二宮と浅倉はホテルの中で、例のお仕事着でドレスアップしたはやて達と合流する。

「…お前等、気合入れすぎじゃねえか？」

二宮は呆れ顔になる。

「ん、何や？ ひょっとして、私等に一目惚れでもした？」

「寒気のある冗談はよせ」

二宮はバツサリ切り捨てた。

「ううゝ…ちよつとは褒めてくれてもええやんか」

「ああゝはいはい、綺麗ですなえゝ」

二宮はこんな事を言っているが、やはりどうでも良さそうな感じである。

「まあまあ。それじゃ、行こうか」

「モンスターが出たら、俺達はそっちの方に行かせてもらおうからな」

そして二宮達は中の警備を開始した。

第十四話 ホテル・アグスタ（後書き）

今回は意外と早い段階でオーディンが登場しましたが、ボクのシナリオ上ではここから先、他に登場させる場面が無いので早めに登場させました。それに今判明させといた方が二宮達も真面目に働くでしょうし。

何かおかしい点があったら言って下さい。出来る限り修正します。

それでは感想お待ちしてます。

第十五話 鬼ごっこ(前書き)

第十五話投稿!!

よく考えたらスカリエッティまだ登場してねえな……って事で今回の
終わり辺りでやっと登場です。出番少ないですが……。

それではどうぞ。

後書きで皆さんにちょっと聞きたい事があります。

第十五話 鬼ごっこ

二宮達が警備を開始した一方…

少し離れた森の中に、大柄の男と一人の少女がいた。

大柄の男は“ゼスト・グランガイツ”、少女は“ルーテシア・アルピーノ”である。

「…良いのか？ ルーテシア」

ゼストがルーテシアに問い掛ける。

「大丈夫。ゼストやアギトは دکترの事を嫌ってるけど、私はそんなに嫌いじゃないから…」

少女の周りにはたくさん小さな虫、そして二人の後ろからは幾つものガジェットが揃っていた。

その後、ホテル・アグスタの周りにガジェットが出現し、シグナム達ヴォルケンリッターが迎え撃つ。

更にモンスターの反応もあり、二宮と浅倉も変身した後、ミラーワールドへ向かったのだが…

「くそっ、ちょこまかと逃げんなー!!」

「ちっ……!!」

「ゲゲゲゲッ」

現在、アビスと王蛇はイモリ型モンスター“ゲルニユート”と闘っていた。

しかし先程からゲルニユートは逃げてばかりで、二人の攻撃はまともにも当たっていない。まさにライダーとモンスターによる、鬼ごっこのような状況である。

「せいっ!!」

アビスがアビスバイザーから水の衝撃波を発射しても…

「ゲゲッ」

ゲルニユートはジャンプして避けてしまう。

「オラァ!!」

王蛇がベノサーベルを振るっても…

「ゲゲゲッ」

ゲルニユートは壁によじ登って逃げてしまう。

「ゲッゲッゲッゲッゲッゲッ」

着地したゲルニユートは両手を叩きながら二人を見ている。完全に二人をバカにしているのだ。

「ああ…!!」

王蛇もイライラがかなり溜まっている。

「ゲゲツ」

ゲルニユートはまた壁をよじ登って逃げ出す。

「逃がさん…!!」

王蛇が後を追う。

「全く、めんどくせえな…挟み撃ちでもするか？」

アビスはゲルニユートと王蛇が向かった方向とは別の方向に走る事にした。

「ハアツ!!」

「ゲツゲツ」

王蛇は今度はエビルウィップを振るう。

もちろんゲルニユートはそれをヒラリと避ける。

「ちっ…本当にイライラする…!!」

王蛇は再びカードを装填する。

A D V E N T

「ギユアアアアアアアアアッ!!」

ゲルニユートの逃げようとした先からベノスネーカーが出現し、ゲルニユートに向かって溶解液を放つ。

「ゲゲッ」

しかしゲルニユートはまたしても避けてしまう。しかも…

「逃がさ…ってうおう!？」

その溶解液が危つく、別方向から来たアビスにかかりそうになる。

「危ねえ…おい浅倉、お前俺を殺す気か!？」

「…近くにいた、お前が悪い」

そう言って王蛇はまた、ゲルニユートに向かってエビルウィップを振るつ。

「ゲゲゲ」

ゲルニユートはまたジャンプして避ける。しかし…

「…ゲゲツ？」

「コイツ、自分から挟まれやがったな」

アビスの言う通り、ゲルニユートは攻撃を避ける際にジャンプする方向を間違えた所為で、うっかりアビスと王蛇の間に着地してしまったのだ。

「もう逃がさねえよ」

アビスはカードを装填する。

SWORD VENT

アビスセイバーがアビスの手に渡る。

アビスと王蛇はジリジリとゲルニユートを挟み撃ちで追い込み…

「ハアッ！！」

「フンッ！！」

同時に飛び掛かる。

「ゲッ」

しかしゲルニユートは右手の平から粘着糸を天井まで放出し…

「ゲッ」

そのまま天井まで上がっていく。

「「……あ?」「」

そのままアビスと王蛇は…

「ガァンツ!!!!」

「のがっ!!!!?」

「ぐうっ!!!!?」

互いに激突し、そのまま倒れてしまう。

「痛い……!!!!」

アビスは顔面を打ってしまい、のた打ち回る。

「ちっ……おい二宮あつ!!!!」

「うるさいな、あんな形で逃げられるなんて思わなかったんだよ!!!!」

アビスと王蛇は互いに突っ掛かる。

「ギユアアアアアアアッ!!!!」

そうしている間にも、ベノスネーカーがゲルニユートに向かって溶解液を放ち、ゲルニユートは再びそれを避け、何処かへ逃げ出した。

「逃がすか…!!」

「あっおい、ちょっと待て!!」

二人も後を追い、そのまま現実世界に戻って行く。

一方、ヴォルケンリッターだけでなく、フォワード陣も戦闘に加わっていた。

「スバル、行くわよ!!」

「おおっ!!」

スバルはウィングロードを展開し、その間にティアナはカートリッジを四発ロードする。

(証明するんだ…私の弾丸は、何でも撃ち抜けるって事を!!)

「クロスファイアー…シュートツ!!」

ティアナは無数の弾丸を放ち、その場にいたガジェットを全滅させる。しかし…

「えっ？」

弾丸が一発、スバルの方へ飛んで行く。

それに気付いたスバルは思わず目を瞑る。

「くそっ…!!」

気付いたヴィータが向かうが、間に合わない。

その時…

「ゲゲゲ…ゲエツ!!?」

スバルと弾丸の間に、ちょうど良いタイミングでゲルニウトが跳んで来た。

しかも弾丸がゲルニウトに直撃し、大きく吹き飛ばされる。

「…………えっ?」

ティアナ達は呆気に取られる。

「やっと追いついたぞ、この野郎」

ティアナ達の下にアビスと王蛇が駆け付けた。

「…はっそうだ、お前等!! アレはいったいどういつつもりだ!!」

我に返ったヴィータはティアナとスバルに怒鳴りつける。

「す、すいません!! でも、あれは作戦で……」

「作戦も何もあるか!! もう良い、お前等とっ」と……」

「黙れ」

「「「……ッ!!?」「」」

アビスの低い声に、ヴィータ達は思わず威圧される。

「今は戦闘中だ、説教なら後にしろ」

「けど……」

「けどじゃない、俺達の足を引っ張るなよ。でないと……」

ヴィータ達の方を振り向く。

「…………沈めるぞ?」

アビスはかなりの威圧感を放っており、ティアナとスバルは少し震え上がっている。

アビスはまたゲルニユートのいる方を向き、カードを装填する。

STRIKE VENT

アビスの右手にアビスクローが出現する。

「ハア〜…」

アビスは大きく構え…

「ハアツ！！！」

アビススマツシュを繰り出す。

「ゲゲゲエツ！！」

しかしゲルニユートはそれも避けてしまう。

そしてゲルニユートは木の上にジャンプし、木から木へ飛び移りながらまた逃げ出してしまった。

「ちっ……………！！」

王蛇はゲルニユートの後を追う。

アビスも後を追おうとしたが…

「……………ん？」

ヴィータ達が立ち尽くしたまま動かない事に気付く。

「…どうした、行かないのか？」

「えっ…あ、ああ、そうだな」

その一言にヴィータ達はハッと我に返り、再び動き出す。

「…スバルを助けてくれてありがとな」

「…ありがとうございます」

ヴィータ達はアビスに礼を言った後、王蛇達の下へ飛んで行った。

(…礼を言われるような人間じゃねえよ俺は。それに俺が助けたんじゃないくて、あのイモリ野郎が勝手に直撃してただけだしな)

アビスは内心そう思った後、彼も後を追う事にした。

一方、シグナムとザフィーラもガジェットと闘っている最中だった。

そんな中、シグナムは闘いながらもシャマルと念話で話している。

『シャマル、スターズの方はどうなった？』

『さつきヴィータから連絡が来たわ。スバルもティアナも何とか無事みたい』

『そうか』

二人の無事を確認したシグナムはガジェットに向き合う。

「数は減ってきたな…」

「一気に畳み掛けるか」

シグナムとザフィーラがガジェットに向かって駆けよつとしたその時…

・キイイイイン…キイイイイン…

「「ッ!?!」」

突如聞こえてきた金切音に、シグナムとザフィーラは立ち止まる。

「ヴヴヴヴ…!?!」

「なっ!?!」

「くっ…!?!」

シグナムとザフィーラの前に、突然シアゴーストの群れが出現した。

「数が多い…コイツ等もモンスターか!?!」

「こんなに現れるとはな…フツ!!」

ザフィーラは飛び掛って来たシアゴーストを殴り倒す。

「二宮と浅倉もいないしな、我々で何とかするしか…ハツ!!」

シグナムはすれ違い様にシアゴースト達を切り裂いて行く。

しかしシアゴーストが一体、後ろからシグナムに飛び掛かった。

「ツ!？」

「シグナムツ!!」

シグナムが防御を取ろうとしたその時…

A D V E N T

音声が鳴ると同時に何処からかエビルダイバーが飛来し、シアゴーストを吹き飛ばす。

「今のは…!!」

シグナムはエビルダイバーが飛んで来た方を向く。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!!」

視線の先には、シアゴーストやガジェット相手に暴れ回っている王蛇の姿があった。

中には破壊されたガジェットや、切り倒されたシアゴースト等もいる。

「あゝあゝ、随分と暴れてらっしゃる」

シグナムとザフィーラの後ろからアビスが歩み寄って来た。

「二宮か…アレはいったいどうしたのだ？」

シグナムの言うアレとは…

「アアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

王蛇の事である。

「あゝ……さっきイモリのモンスターに逃げられちまってな。それで完全にイライラが頂点に達して、あんな風に暴れてるってわけ」

「なるほど…」

そうしている間にも、どんどんシアゴーストやガジェットは倒されていく。

「…我々の出番は無さそうだな」

「…そうかもしれないな」

王蛇の暴れっぷりに、シグナムもザフィーラも啞然としている。

「ああ、今の浅倉は邪魔しない方が良い。確実に八つ当たり喰らうぞ」

「そ、そうか…」

それから数十分後、アビス達の方によって見事、シアゴーストもガジェットも全滅した。もちろん契約モンスター達はちゃんとシアゴーストの魂を吸収している。

そして、とある研究所^{ラボ}では…

「なるほど、これが彼等の力が…」

一人の科学者が、モニター画面を見て楽しそうにしている。

モニターにはアビスや王蛇の姿が写っている。

この科学者こそが、次元犯罪者“ジェイル・スカリエツィ”である。

「面白い、実に面白い!!! いつかこの手で彼等を手に入れたい、いや、手に入れて見せる!!!」

スカリエツティはかなり興奮しており、二人を自分の手中に収めようと豪語する。

しかし彼は知らなかった。

二宮鋭介と浅倉威。

この二人こそ、今このミッドチルダにいる人間の中で一番敵に回してはいけない危険人物であるという事を…。

第十五話 鬼ごっこ（後書き）

次回辺りでとうとう白い魔王が覚醒します。

さて……どっちに闘わせようかな、二宮にするか、浅倉にするか……
どうしよう？

皆さんはどっちが良いですか？ 二宮は性格上、自分から闘いを挑むのは考えにくいのですが…。

取り敢えず、その事について感想に書いてくれると嬉しいです。もちろんおかしい部分があったらそっちも修正します。

それでは感想お待ちします。

第十六話 激突（前書き）

第十六話投稿！！

まさか一日過ぎてからの投稿になるとは……まあ良いや、投稿出来たし。

今回はついに魔王なのはと激突、そしてアビスの“アレ”が登場します。

第十六話 激突

「ん、うまいな…」

ホテル・アグスタでの任務を終えてからその夜、二宮は缶コーヒーを飲みながら六課の外をうろついていた（因みに缶コーヒーはまだもう一本ある）。

二宮は服のポケットから“サバイブ『無限』”のカードを取り出す。

（サバイブがあるのは良いが、浅倉に目をつけられると後々面倒な事になりそうだしな……まあ、他の連中の前では使わないようにするか）

そう考えた後カードをしまい、缶コーヒーを一気に飲み干す。

「ん？」

二宮の視線の先に、何やら特訓をしているティアナの姿があった。

「よう、何してんだ？」

「ッ！！…二宮さん」

「ほれ」

二宮はティアナに残っていたもう一本の缶コーヒーを投げ渡す。

「お前、こんな時間まで特訓してんのか？」

「…あなたには関係ありません。強いあなたには」

「何？」

二宮は首を傾げる。

「あなたにはわかりませんよ！！ あんな魔導師よりも圧倒的に強い力を持ったあなた達なんかには、凡人である私の事なんてわかりませんよ！！」

（俺を浅倉と一緒にしないで欲しいんだけどな）

二宮は内心そんな事を思う。

「とにかく、今のままじゃダメなんです。執務官になるという夢を叶える為にも、私はもっと強くならないといけません！！」

「…あっそう」

ティアナの台詞を聞いても、二宮は相変わらず無関心である。

「だから邪魔はしないで下さい。まだ特訓は終わってませんから」

「はいはい」

そう言われた二宮は、大人しく退散する事にした。

（夢ね……俺は今更、見たい夢も無いな）

来た道に戻る二宮は、右手に持った空の缶を見つめる。

(夢なんて見ても、いずれは覚めてしまう)

二宮はそのまま、缶を握り潰した。

それから翌日…

「ああ、もう始まっちゃったんだ」

二宮達はなのは達の模擬戦を見学していた。フェイトが遅れてやって来る。

「ん？ 何かキレが無えな」

ヴィータはティアナの動きに疑問を抱く。

(…何か起こりそうだな)

模擬戦を見ていた二宮は嫌な予感を感じ取っていた。

そして模擬戦が続く中、遂に“ソレ”は起こった。

「おかしいな…二人共、いったいどうしちゃったのかな」

「…ッ！！？」

スバルとティアナは、なのはが素手でクロスミラージュの刃を握っているのを見て驚愕する。もちろん、刃を握っている手からは血が出ている。

「ねえ…私の指導、そんなに間違ってる？」

その表情は、かなり暗い物だった。

「へえ…あんな顔も出来るんだな」

二宮はなのはがキれているのを何となく理解していた。

「面白そうだ」

浅倉は顔に笑みを浮かべ、カードデッキを取り出す。しかもいつの間にかVバックルを装着している。

「…いつの間に？」

「さっきだ。いつでも乱入出来るように、あらかじめ装着しておいた」

「おいおい」

二宮は口を引きつらせた後、浅倉に耳打ちする。

(…殺すなよ。まだ利用価値はある)

(わかつている)

浅倉はカードデッキを突き出し、変身ポーズを取る。

「変身っ!!」

そしてVバックルにカードデッキをはめ込み、浅倉は王蛇に変身する。

「浅倉さん!?!」

突然の変身に驚くフェイト達を置いて、王蛇はベノバイザーにカードを装填する。

ADVENT

何処からかエビルダイバーが飛来し、王蛇はそれに飛び乗ってなのは達の元へ飛行する。

「私は…誰も傷つけないから、誰も失いたくないから!」

ティアナの目からは涙がこぼれる。

「だから…強くなりたいんです!」

「…少し、頭冷やそっか」

なのは指を向ける。

「クロスファイアー…」

「ッ……うああああああああっ!」
ファントムブ
レイ

「シュート」

無情にもなのはは、ティアナに攻撃を命中させた。

「ティア…ッ!? バインド!」

「スバル、よく見てなさい…」

なのはは再びティアナに指を向ける。

「なのはさんっ!」

スバルが叫ぶが、その声は届かない。

そしてなのはがティアナを撃墜しようとしたその時…

「ハツハアツ!!」

「ッ!!」

エビルダイバーに乗った王蛇がなのはに向かって突撃し、なのははそれを回避する。

王蛇はスバルが展開したウィングロードの上に飛び乗った。

「浅倉さん!？」

王蛇の登場にスバルは驚く。

「お前等は邪魔だ、引っ込んでろ。それより……」

王蛇はなのはと向き合う。

「浅倉さん、どうして邪魔したのかな……?」

なのはは王蛇を睨みつけている。

「単純な話だ……お前、俺と闘え」

王蛇は手に持ったベノサーベルをなのはに向ける。

「…そんな理由で邪魔したの?」

「お前等の事情など知った事か。俺は前からお前の強さに興味があった、いつかはお前と闘ってみたかった、ただそれだけだ」

「…そう」

なのははレイジングハートを構える。

「…浅倉さんも、頭冷やそっか」

「面白い、俺を楽しませろ…!!」

こうして、二人の鬪いは始まってしまった。

「そんな、どうしよう…!!?」

フェイト達は二人が鬪い始めた事に慌て始める。

そんな中、二宮は一人で考え事をしていた。

(浅倉に任せたのは良いが、何か不安だな。浅倉が高町を殺すような事があると、六課に居づらくなるし…仕方ない。面倒だが、俺も行くとするか)

二宮はフェイト達に気付かれないよう、こっそり移動した。

「…あれ、二宮さんは?」

「えっ?」

フェイト達がそれに気付いたのはそれから数秒後の事だった。

「アクセセルシューター」

なのはは幾つもの魔力弾を撃ち、王蛇はウィングロードの上を走りながら回避する。

「ふん…」

王蛇は一度立ち止まり、またカードを装填しようとしたが…

「させないよ！！」

「何っ！？」

なのはは素早く魔力弾を放ち、王蛇にカードを装填する隙を与えない。

「くっ…！！」

王蛇はどうにか避けながらも、何とかカードを装填する。

A D V E N T

「ギユアアアアアアアアアアッ！！」

建物の窓ガラスからベノスネーカーが出現し、なのはに向かって溶解液を放つ。

「ッ！！」

なのはは溶解液を回避する。

その隙に王蛇はファイナルベントのカードを装填しようとする。

「させないって言ったよね？」

「ぐっ！？」

王蛇に魔力弾が一発直撃し、王蛇はカードを建物の下へ落としてしまふ。

「その程度なのかな…それじゃあ私には勝てないよ？」

「ちっ…！！」

王蛇は舌打ちする。

先程召喚したエビルダイバーに飛び乗ろうにも、なのははその隙を与えてくれない。おまけに王蛇は飛び道具に関するカードは一枚も持っていない。ベノスネーカーが溶解液を放つても、なのはは飛んで簡単に避けるか、防御してしまう。

つまり、今の状況では王蛇の方が圧倒的に不利なのだ。

「逃がさないよ」

「なっ…!?!」

王蛇はバインドで縛られ、両腕が使えなくなる。

「浅倉さんは確かに強い、でもあなたは私には勝てない。いい加減諦めて、頭冷やそっか」

なのはは王蛇に対してそう言い放つ。

それに対して王蛇は…

「クハハハハ…ハハハハハハハッ!!!」

諦めるどころか、逆に大きく笑い始めた。

「…ねえ、何がおかしいのかな?」

なのはは王蛇が笑っている理由が理解出来ない。

「ハハハハハア…楽しいからさ」

王蛇は再びなのはと向き合う。

「俺はこの世界に来てから、闘って満足出来る奴がなかないなかつた。だが、お前は俺をてこずらせている。その事を思うと、俺は嬉しいのさ。対等に闘える奴が俺の目の前にいるのかと思うと、最高に楽しくて堪らなくなるのさ…!?!」

それを聞いたなのはレイジングハートを構え直す。

「そう…じゃあ、私があなを倒す」

「ハツハア…そうだ、それで良い。手加減なんて一切するな、本気でかかって来い…!!!!」

そしてなのはがまた砲撃を放とうとしたその時…

FINAL VENT

「…ッ!!?」

突然鳴り響いた音声。それと同時にエビルダイバーが飛来し、王蛇を縛っていたバインドを破壊する。

「…何だと?」

王蛇はファイナルレントを装填した覚えが無い。

しかし建物の下を見て、王蛇は理解した。

「アイツ、余計な事を…」

「全く、ホントにめんどくさい奴等だ…」

アビスは完全に呆れ果てていた。

何故王蛇のファイナルベントが発動したのかと言うと、実は先程、王蛇が落としたファイナルベントのカードをアビスが自身のバイザーに装填したのだ。

アドベントカードには意外と細かい仕組みがある。

本来、他のライダーがカードを奪って装填したとしても、その能力は本来のカード所有者に発揮されるようになっていく。実際、二宮と浅倉がいた世界では、ゾルダのカードを龍騎が装填しても、そのカードの能力は全てゾルダに発揮された。

アビスは、その細かい仕組みを上手く利用したのだ。

「浅倉には殺すなって言っただけだ」

アビスはカードデッキから一枚のカードを抜き取る。

「…死なない程度なら良いかな？」

そしてそのカードをアビスバイザーに装填する。

U N I T E V E N T

音声が鳴り…

「うぐっ…!!」

抜け出したなのは体勢を立て直そうとするが、ダメージを受けた所為でふらついている。

「余所見してる暇があるのか？」

「!!!？」

なのは声のした方を向く。

その先からは、エビルダイバーに乗った王蛇が突っ込んで来た。

「本命はこっち…!!？」

なのはプロテクションで防ごうとしたが、間に合わない。

「喰らえ…!!」

王蛇のハイドベノンが、なのはに炸裂した。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

なのは大きく吹き飛ばされ、建物の壁に激突した。

気絶したなのは下へと落ちていく。

「ギャオオオオオオオオオオオ!!」

それをアビソドンがうまく受け止め、アビスのいる下へと降りて行く。

「やっと終わったか…」

変身を解いた二宮は、アビソドンがらなのはを受け取る。

二宮は気絶しているのはの顔を見て呟く。

「…さつさと沈めよ。めんどくさいだろ？」

こうして模擬戦は終了し、ティアナとなのはは医務室へと運ばれる事となった。

第十六話 激突（後書き）

うーん……もうちょっと浅倉にボコらせるべきだったかな？

結局、浅倉がメインで二宮が補助、という形になりました。まあ今回は手加減しなければならぬ状況だったし、王蛇には切り札にジエノサイダーがいるし、まだ良いかな？

因みにアビソドンですが、今回は顔見せだけです。アビソドン時のファイナルイベントはもう少し先で判明します。

それでは感想お待ちします。

第十七話 過去

例の模擬戦が終わってから時間が経つ…

「ん……」

ティアナは目を覚ます。

「ここは…?」

そこは医務室のベッドだった。

「あつ、起きた?」

シャマルが覗き込む。

「シャマル先生……」

「全く、びっくりしたわよ。さっき急にここへ運び込まれて来るんだから」

「すみません……」

ティアナは素直に謝る。

「…ティアナちゃん、模擬戦の事は覚えてる?」

「はい……」

ティアナは模擬戦の事を思い出す。

「あの…あの後どうなったんですか？」

ティアナは自分が堕ちた後、どうなったかをシャマルに聞く。

「ティアナちゃんが気絶した後、浅倉さんと二宮さんが止めに入ってたね。そのままなのはちゃんに勝ちちゃったの。ほとんど浅倉さんが闘ってたけど」

「えっ……？」

それを聞いたティアナは驚愕する。

(なのはさんに勝つなんて……あの二人、本当に何者なんだろう?)

ティアナは二宮と浅倉の事に対して疑問に思う。

「それでなのはちゃんも気絶しちゃってたね。二宮さんと浅倉さんの二人があなた達を運んで来たのよ。なのはちゃんはあなたより先に目を覚まして、部屋を出たけどね」

「あの二人が…？」

ティアナは二宮と浅倉が自分達を運んでくれた事を知り、信じられないような表情になる。

「二人共、今は部屋に戻ってるだろうし、ちゃんとお礼を言いに行きなさいね」

「……はい」

ティアナは服を着替え、医務室を出た。

「あゝあ、めんどくせっ」

現在、二宮は部屋のベッドで寝っ転がっていた。

あの模擬戦の後、はやてから散々説教を喰らったのだ。その際はやてから「次から身勝手な行動は禁止」と言われそうになったが、それに対して二宮が「交渉の時の条件が飲めないのか？」と言ったら、大人しく引き下がった。

本来二宮と浅倉の二人は、条件が飲めているから六課に協力しているに過ぎない。六課が条件を破ってしまえば、二人は六課にいる人間を全員殺害するつもりでいるのだ。はやてもそれを思い出したのか、それ以上は何も言わなくなった。ただし、今回は状況的に自分達にも非があると考えたのか、二宮は素直に謝罪していた。もちろん、浅倉は全く反省していないが。

（それに、この世界にいるモンスターを全て倒してしまえば、オーデインの報酬でタイムベントが手に入る。必ずしも、六課と協力しなければならぬわけではない）

二宮は手に持った“サバイブ『無限』”のカードを見ながらそう考えていた。

・コンコンッ

「ん？」

ドアを叩く音に気付いた二宮はベッドから起き上がる（カードは素早くポケットに隠した）。

「誰だ？」

二宮がドアを開けると…

「……二宮さん」

なのはが立っていた。

「……」

「あっちょっと……すみません、ドア閉めようとしなくてすいません！」

めんどくさいと判断した二宮にドアを閉められそうになり、なのはは慌てて食い止めた。

結局、二宮はなのはを部屋に入れる事になった。二宮本人はかなりめんどくさがっているが。

「…それで、いったい何の用」「ごめんなさい!」「……はっ?」

なのはに突然謝られ、二宮は呆気に取られる。

「私と浅倉さんが鬨っていた時、二宮さんの手も煩わせる事になってしまつて…」

「ああ、その事が…」

二宮は頭を掻く。

「それぐらい別にどうだって良い。浅倉の奴はホントに容赦が無いし、流石に死人が出たら洒落にならんからな」

「それでも二宮さんに謝罪するべきだと思つて。浅倉さんにもさつき謝罪しに行つたんですけど…」

「…けど?」

「…ドアを閉められました」

「ああ…」

二宮は納得がいったような表情になる。

「それにしても、お前も随分と律儀だねえ…」

二宮は溜め息をつく。

「…二宮さん」

「あ？」

「…私の教導、間違っていたんでしょうか？」

それを聞いた二宮は数秒間黙り込み、再び口を開く。

「…そんな事、俺だつてわかんねえよ」

二宮はカードデッキを上放る。

「俺はただ、自分のやりたいようにやってるだけだ」

そして落ちてくるカードデッキをキャッチする。

「…そうですね」

それを聞いたなのはは、落ち込んだ様子で部屋を出て行った。

なのはが出て行った後、二宮はベッドに寝つ転がる。

「……間違っているか間違っていないか、そんなのは俺に関係の無い事だ。関係の無い事まで、俺は理解する気にはなれんな」

その時…

- ウウウウウウ!! - ウウウウウウ!! -

突然警報が鳴る。更に…

「キイイイイン…キイイイイン…」

「!?!」

金切り音も聞こえてきた。モンスターの出現である。

「ちっ、めんどくせえな…!!」

二宮はベッドから起き上がり、鏡のある洗面所に向かった。

その後、なのは達もガジェットを殲滅する為に出動する事になった。

現在アビスと王蛇は、再びゲルニユートと対峙していた。

「さて、今度こそ沈んでもらおうか」

アビスはそう言い放ち、アビスバイザーから水の衝撃波を繰り出す。

「ゲゲゲッ」

もちろんゲルニユートはそれを避ける。しかし…

「フンッ!」

「ゲエッ!?!」

ゲルニユートは王蛇の拳を喰らった。

王蛇はゲルニユートが避ける方向を予想していたのだ。

「ゲゲゲエ……」

倒れたゲルニユートは立ち上がろうとする。

「逃がすか」

「ゲエツ!?!」

しかし、そんなゲルニユートを王蛇が踏みつけ、逃げられないようにする。

ここから、ゲルニユートにとっての地獄が始まる。

「さて……」

王蛇はマウントポジションの体勢になり……

「オラアッ!?!」

「ゲツ!?!」

ゲルニユートを殴り始めた。

「今まで散々からかってくれたよなあ……!?!」

「ゲガツ!?!」

もう一発殴られる。

「このイライラ、お前で晴らさせてもらおうか…!!」

「ゲゴオツ!?!」

更に一発殴られる。

「フン!! ハアツ!!」

「ゲグツ、ゲゴエツ!?!」

ゲルニユートは体勢の所為で逃げる事が出来ず、王蛇に何度も何度も殴られ続ける。

それを見ていたアビスは…

「…元の世界に戻ったら、真っ先に勝負挑まれそうな気がするな」

そう言わずにはいられないでいた。

「ハツハア…!!」

「ゲゲ!?!」

何度も何度も殴られ、ゲルニユートは段々弱り始めていた。

「フン…!!」

「ゲギイツ!?!」

そして立ち上がった王蛇に蹴り飛ばされ、ゲルニユートは壁に激突する。

王蛇はベノバイザーを取り出す。

「消える、そろそろ…!!」

カードが装填される。

FINAL VENT

「ブオオオオオオオオオツ!!」

メタルガラスが壁を破壊して出現し、そのまま王蛇の後ろに来る。

「ふんっ」

王蛇はメタルガラスの肩に飛び乗り…

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!!」

メタルホーンを前に突き出し、ヘビープレッシャーが発動する。

「ゲゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!!?」

ヘビープレッシャーが炸裂し、ゲルニユートは爆発した。

「やれやれ、あのモンスターには同情したくなるよ…」

王蛇の暴れっぷりを見ていたアビスはそう呟き、現実世界に戻って行った。

その同時刻、なのは達もガジェット殲滅が終わり、六課に戻っていた。

その後、シャリオ・フィニーノ（以下シャーリー）の話聞いたフオワード陣は、なのはの過去を知る事となった。

ティアナは涙を流し、なのはに何度も謝罪していた。

そして二宮は六課の外で、岩に座りながらまた缶コーヒーを飲んでいった。もちろん缶コーヒーはもう一本ある。

「自分と同じ目に合わせない為、か…」

ちなみに二宮と浅倉も、なのはの過去について聞かされている。

「…甘すぎるのも問題だろうな」

二宮は缶コーヒーを一気に飲み干す。そこへ…

「二宮ちゃん」

「……ん？」

二宮の下に、ティアナが歩み寄って来た。

「あの模擬戦の後の事、シャマル先生から聞きました」

「……そうか」

「……ありがとうございます」

ティアナはペコリと頭を下げる。

「……よせ、そういうのは慣れてない」

二宮はティアナから顔を反らす。

「……吹っ切れたのか？」

「はい」

「なら、もうあんな事が起こらないようにしろ。止めるこつちもめんどくさいんだ」

「………すみません」

二宮の台詞にティアナは申し訳無さそうな表情になる。

「ていうか、礼なら俺じゃなくて浅倉に言えよ。俺は大した事はしていない」

「言おうとしました。言おうとしたんですけど…」

「…ドア閉められたのな」

「……はい」

どうやら当たりらしい。

「…それじゃ、失礼します」

「ん…」

ティアナはもう一度頭を下げた後、寮へ戻っていった。

「…だから、俺は礼を言われるような人間じゃないっての」

二宮はそう呟き、もう一本の缶コーヒーも飲み始める。

(高町もランスターも、何で俺なんかに礼を言うかな。俺は碌な人間じゃないってのに…)

二宮は飲みながら考える。

(………そういえばガキの頃だけ？俺が他人を信用しなくなったのって…)

二宮は過去を思い出す。

(俺の家族が死んだ時も、周りの奴等はどいつもこいつも遺産目当

てで、誰も俺の事を真っ直ぐ見ちゃくれなかった。その所為で誰の事も信じられなくなった。他人に対する憎しみを持ったまま、俺は成長していった…)

二宮は一息つき、また飲み続ける。

(大人になって、神崎士郎に出会い、俺はライダーバトルに参加させられる羽目になった。参加しないならモンスターの餌だと脅されてな…)

気が付くと、缶コーヒーは既に空になっていた。

(そして、奴はこう言っていたな…)

二宮は空になった缶を握り潰し、呟く。

「人間は皆ライダーなんだ」って。なあ？ “高見沢逸郎”」

高見沢逸郎、またの名を“仮面ライダーベルデ”。二宮達がいた世界での、とある大企業の社長である。表向きは人が良いものの、実際はライダーバトルを勝ち残る為に手段を選ばず、人間社会「ライダーバトル」と認識している残忍な男だ。

「奴の演説は壮大だったな…」

「人間社会ってのはなあ、ライダーバトルと一緒になんだ。自分が生

き残る為に、他人を蹴落としてるんだからな！！ 人間は何の犠牲も無しに生きる事は出来ない。人間は皆ライダーなんだよっ！！！！」

二宮の脳裏に、高見沢の台詞が浮かぶ。

「…そうだ。人間社会なんて、ライダーバトルと一緒になんだ」

二宮は立ち上がる。

「俺は何としてでも、この闘いを生き残ってやる。邪魔するなら誰であろうと、この手で沈めてやる。光の見えない闇から、二度と這い上がれなくしてやる……！！！」

そして二宮は、先程潰した缶を投げ捨てた。

第十七話 過去（後書き）

んんん……どうだろう？ 今回の話、分かってくれる人いるかなあ
……？

…まあそれはとにかく、おかしい点があったら言ってお下さい。出来
る限り修正します。

それでは感想お待ちしております。

第十八話 とある休日（前書き）

第十八話投稿！！

すいません、投稿がいつもより少し遅れました。というのも、少し前に懐かしいゲームを発掘して、しばらくの間それにはまっていたのが原因ですが……あっすいません、石投げないで！！ 地味に痛いから！！

…それではどうぞ。

PVがいつの間にか60000を超えてました。読んで下さってる皆さん、ありがとうございます！！

第十八話 とある休日

あれから翌日、今日もフォワード陣は訓練に励んでいた。

ティアナも今までのように無茶をしなくなり、全員今まで以上にキレの良い動きをしていた。

（ふうん、結構やれるんじゃないかねえか…）

二宮は訓練の様子を見てそう思った。

ちなみに、二宮と浅倉もこの訓練を見学している。浅倉はいつものように訓練に参加したそうにしていたのだが、昨日の模擬戦の件があった為に、許可無しで勝手に参加する事は禁止されている（その所為で浅倉はいつも以上にイライラしている）。

そして時間は経ち、訓練は終了する。

「ふう…皆、お疲れ様」

「……はい!」「」「」

フォワードはいつも以上に声が元気だ。

「実はこの訓練、第二段階クリアの見極めテストだったんだけど…」

「……えっ!?!」「」「」

フォワードの四人はそれを聞いて驚く。

「で、結果は…」

なのははフェイトの方を振り向く。

「合格」

「早っ!!」

ティアナとスバルがずつこける。

「まあ…あれで不合格だったら、基礎を最初っからやり直してたところだ」

「あはは…」

ヴィータの一言に、エリオとキャラロは苦笑する。

「皆良い線いってるし、見極めテストはこれで終了!」

「明日からはセカンドモードで訓練するからな」

「はい!!」

「……えっ?」

キャラロを除く三人は大きく返事をするが、キャラロはヴィータの台詞を聞いてある事に気付く。

「あの…明日って?」

「ああ、その事？」

なのはが説明する。

「今日は私達も待機予定だし、皆も今まで訓練漬けだったし」

「訓練については明日」

「今日一日、皆はお休みです」

それを聞いたフォワードの四人はかなり喜んだ。

「まあ、街にでも行って遊んで来ると良い」

「」「」「はい！」「」「」

その後は皆、それぞれに散らばっていった。

「やれやれ、呑気な奴等だよ」

現在、二宮達は食堂で食事をとっていた（やはり浅倉は無言で食事を貪っている）。

二宮は休みと言われてはしゃいでいたフォワード陣に対して、内心

呆れている。

「まあ良いじゃねえか、たまには休みも必要だろ？」

「まあ、それはそうかもしれないが……」

ヴィータにそう言われ、二宮はそれ以上の事は言わなくなる。

『当日、首都防衛隊代表の“レジアス・ゲイズ中将”による、管理局の防衛思想についての表明が行われました』

「……ん？」

二宮達の視線がテレビに向く。

テレビでは、太った男性が何やら演説みたいな事をしている。

「このおっさん、まだあんな事言ってるのな」

「レジアス中将は、古くからの武闘派だからな」

ヴィータとシグナムはテレビを見て呆れ果てている。

「……誰だ？」

当然、二宮と浅倉はレジアスの事を知らない。

「レジアス・ゲイズ中将だよ。時空管理局地上本部の総司令」

なのはが説明する。

「ふうん……で、その隣にいるのは？」

二宮が言っているのは、レジアス中將の隣に座っている三人の老人達の事だ。

「ミゼット提督にキール元帥、フィリス相談役だよ。世間では“伝説の三提督”って呼ばれてる偉大な人達なんだよ」

今度はフェイトが説明する。

「…あ、そう」

二宮はまた食事に喰いつき出す。

「二宮さん、全く興味が無さそうですね」

「まあ、ホントに興味が無いからな。誰がどうであれ、俺には関係無い」

フェイトの言う事に、二宮はそう返事を返す。

「…敵なら、沈めるだけだしな」

二宮は小さくそう呟いた。なのは達には聞こえなかったようだが、黙って飯を食っていた浅倉にはそれが聞こえていた。

「さて、どうするか…」

食事を終えた後、二宮は男子寮の部屋に戻っていた。

ベッドに座り、二宮は今日一日どうするか考える。しかし…

「…寝るか」

やはり特にやるような事は無いらしく、二宮は昼寝する事にした。

一方、訓練場では…

「くははははは…なかなか、やるじゃないか」

「はあ…はあ…ふっ、そっちこそ」

浅倉とシグナムの二人が、壮絶な闘いを繰り広げていた。とは言っても、木刀による単なる打ち合いなのだが。

実は食事を終えた後に、浅倉はシグナムに「木刀を使って勝負しな
いか？」と誘われ、その勝負に乗ったのだ。しかもお互いに戦闘狂、
その激しさはかなりの物だった。

（動きは少々雑だが、それなりに闘い慣れている。やはり楽しい、
楽しいぞ…!!）

シグナムは浅倉の強さに心から歓喜していた。

彼女も浅倉同様、今までなのは達以外で強い者と本気で勝負する事が無かった。その為、今繰り広げている浅倉との勝負が、彼女にとつては楽しくて堪らないのだ。

「どうした、お前の力はまだこんな物じゃないだろう?」

「ふっ、ここからが本当の勝負だ!」

言い終わると同時にシグナムは浅倉に飛び掛かり、木刀を振り下ろす。

浅倉はそれを木刀でうまく受け止める。

「そうか……なら、こっちはどうだ!」

「何……ぐっ!」

浅倉は素早く木刀を払いのけ、シグナムに蹴りを加える。

予想外の攻撃にシグナムは体勢を崩しかけるが、どうにか持ち堪える。

そして二人は再び向き合う。

「…木刀同士の勝負で、普通蹴りなどするか?」

「知らん。闘いはいつでも手を抜かない物だ」

「二宮さんは今どうしてるかな…?」

現在フェイトは、二宮のいる部屋の前まで来ていた。

先程はやてから、二宮と浅倉の二人に謝礼を渡すように頼まれたのだ。実際、彼等二人のおかげでモンスターによる被害が減っているのも事実なので（その二人が民間人を契約モンスター達の餌にする事もあるのだが）、お世話になった分として渡したいとの事だ。

フェイトはドアをノックする。

「二宮さん、いますかー?」

フェイトは二宮の名を呼ぶ。

当の本人は寝ている為、当然返事は無い。

「いないのかな…?」

フェイトはそお〜っとドアを開け、中を覗く。

「なんだ、寝てるのか…」

二宮は完全に眠りに付いている。

フェイトは寝ている二宮に近づいてみる事にした。

「二宮ちゃん…」

小さい声で呼んでみるが、二宮は起きない。

(…寝ているのを邪魔したら悪いし、机にでも置いておこう)

フェイトは謝礼の入った封筒を机に置く。

「……………」

その際、フェイトはチラッと二宮の方を見る。

二宮は起きる様子を全く見せない。

(改めて見てみると、結構かつこいいな…)

フェイトは二宮の顔を覗き込んでみる。が…

「……………何してる?」

「あつ……………」

二宮の両目は、ぱっちり開いていた。

「たくっ目の前に顔があったもんだから何かと思ったぞ」

「あつ……………」

結局、二宮は起きてしまった。

フエイトは拳骨を喰らった後頭部を手で抑えている。

「はぁ……で、何しに来た？」

「あ、うん。二宮さんに謝礼を渡そうと思って……」

「謝礼？」

二宮は机の上に置いてある封筒に気付く。

「二宮さんと浅倉さんのおかげでモンスターによる被害は減っているし、今までお世話になった分として渡してくれって、はやてが……」

「……なるほどね」

二宮は封筒を手に取り、中身を確認する。

「んん……まあ、缶コーヒー買えるくらいの小銭しか渡されてなかったしな。これはこれで、特に不便は無いか……」

財布に収めた後、二宮は再びベッドに寝っ転がる。

「二宮さんは、これからやる事は無いんですか？」

「昼寝以外にする事が無い。というか、それ以外でいったい何をしろと……」

今の二宮は、昼寝以外に何もする気は無いらしい。

「とにかく俺は寝る。モンスターが出て俺は一人で起きられる。」

だから昼寝の邪魔はするなよ」

そう言っつて二宮はフェイトのいる方とは逆の方向を向き、また眠り始めた。

フェイトは一人、ぽつんと突っ立っている。

「もう少し話がしたかったんだけどな…」

フェイトはもう一度呼びかけようとしたが…

「…やめとこう。あの拳骨かなり痛かったし」

先程の拳骨を思い出し、やめておく事にした。

「二宮さんって、あんまり人と話すの好きじゃないのかな…」

二宮の部屋を出た後も、フェイトはずっと二宮の事を考えていた。

「そういえばあの時、あの時…」

フェイトは少し前にあった、派遣任務の時の事を思い出す。

『家族は全員死んでいる。ガキの頃にな』

「あの時の二宮さん、あまり良い目はしてなかったし…」

フェイトは一度立ち止まり、来た道を振り返る。

「…もしかして、支えてくれる人がいなかったのかな？」

フェイトの脳裏に、その時の二宮の表情が思い浮かぶ。

(少しでも良いから、知りたいな。二宮さんの事…)

そう思いながら、フェイトはまた歩き出した。

エリオから通信が来たのは、それから少し経った後の事だった。

第十八話 とある休日（後書き）

…あれ、何だこれ。下手したら、フェイトの二宮に対するフラグが立ちそうな気が…いや、気のせいだよな、そうだよな、あはははは…笑い事じゃないような気もするけど。

とにかく、誤字などの指摘があったらいつでも言っして下さい。出来る限りは直します。

それでは感想お待ちしてます。

第十九話 休み終了（前書き）

第十九話投稿！！

ようやくヴィヴィオとの出会いです。ただし出番は短いです。彼女についてはまた次の機会です。

それから、最後に“とある人物”が登場します。

第十九話 休み終了

エリオの通信が来た後、エリオとキャロの下にスバルとティアナが合流し、それから少し経った後になのはや二宮達も到着した。二宮は昼寝を邪魔された事、浅倉はシグナムとの勝負を中断させられた事で機嫌が悪そうだが。

エリオとキャロの話によると、近くの路地裏のマンホールから若い少女が出てきて、しかもその少女はレリックの入ったケースと繋がっていたらしい。

現在、シャマルがその少女の容体を見ている。

「…うん、大丈夫そうね。命に別状は無いわ」

それを聞いたなのは達は安心した表情を浮かべる。

そんな中、二宮はケースの鎖に気付く。

「…で、結局どうすんだ？ 見たところこのケース、何か鎖みたいなのが繋がっているが」

二宮はなのは達に問い掛ける。

「この鎖……ひょっとしたら、他のケースと繋がってるかもしれない」

フェイトはケースの鎖を見てそう推測する。

「ひとまず、この子をへりで運ぶわ。なのはちゃん、手伝って」

「はい！」

シヤマルとなのはは少女をへりまで運び、残ったメンバーで少女が落としたレリックの回収に向かう事となった。

「さて皆、短い休みは堪能したわね」

「お仕事モードに切り替えて、気合い入れていこう！」

「はい……」

(めんどくせえ……)

スバル達が気合いを入れる中、やはり二宮はめんどくさそうにしていた。

その時……

・キイイイイン……キイイイイン……

「……悪いが、俺達は別行動な」

「えっ？」

間抜けな声を上げたティアナを放置し、二宮と浅倉はちょうど近くに捨てられていた等身大の鏡に向き合い、カードデッキを向ける。

Vバックルが装着され、二人は変身ポーズを取る。

「変身っ!!」

カードデッキがはめ込まれ、二宮はアビスに、浅倉は王蛇に変身した。

「面倒だ、とつとと終わらせて帰って寝る」

「帰ったら、またあの女と闘い合うか」

二人は等身大の鏡からミラーワールドへ突入した。

「ハアッ!!」

「グオッ!?!」

ミラーワールドの中にある路地、そこでアビスと王蛇は二体のレイヨウ型ミラーモンスター“オメガゼール”と“ネガゼール”を相手に闘いを繰り広げる。

早速アビスの蹴りがネガゼールに当たり、吹き飛んだネガゼールは壁に激突する。

「さて、お前も沈めてやるっか…?」

SWORD VENT

飛来したアビスセイバーを手に取り、アビスはネガゼールに向かって駆け出した。

SWORD VENT

一方、王蛇も左手にベノサーベルを持ち、オメガゼールと対峙していた。

オメガゼールは大きな杖を構えている。

「さあ、闘い合おうぜ……」

王蛇がベノサーベルを向けると同時に、闘いは始まった。

まずオメガゼールが駆け出し、王蛇に向かって杖を振り下ろす。

王蛇はそれをベノサーベルでガードし、右足でオメガゼールに蹴りを加える。

「グオオオツ!!」

オメガゼールは思いつきり杖を振り回す。

「ふんっ!!」

王蛇はしゃがんで避けると同時に、オメガゼールの足を引っ掛けて転倒させる。

すぐに起き上がるうとするオメガゼールだが、それを王蛇が許すわけがない。

「はあっ！！」

「グオオツ！？」

王蛇は倒れているオメガゼールにベノサーベルを叩きつける。

しかし一度だけに留まらず、王蛇はベノサーベルで何度も何度も攻撃し続ける。

しかし、流石に何度もやられるわけにはいかない判断したのか、オメガゼールは素早く王蛇の腹に蹴りを加える。

「おあっ！？」

王蛇が体勢を崩すと同時にオメガゼールが起き上がり、連続で杖を振り回す。

「ちっ…！！」

転がって避けた王蛇はどこからかベノバイザーを取り出し、カードを装填する。

A D V E N T

「ギユアアアアアアアアアアアアアアアッ…！！！」

「逃げるなっ!!」

「グオオオオツ!!」

一方のアビスは、ネガゼールに何度も攻撃を避けられ続けていた。そしてネガゼールは、高くジャンプして何処かへ逃げ出す。

「おい、待て!!」

当然、ネガゼールがそれを聞くわけがない。

「…仕方ない、一旦出てから追う事にしよう」

アビスは後を追う為、先程の等身大の鏡から現実世界に戻る事にした。

一方、フォワード陣の四人はガジェットを破壊しながら、レリックのある場所まで向かっていた。

「ケースのある場所まで、もう少しです!!」

キャラロが言ったその時、いきなり近くの壁が爆発した。

「……!?」「」

四人は一斉に身構える。

しかし壁の穴から出てきたのは…

「久しぶりね、スバル」

「ギン姉っ!!」

スバルの姉、ギンガ・ナカジマだった。

スバルはギンガに駆け寄ろうとした。だが…

「キュイイイイン」

「グオオオオオオオオオオオオツ!!」

「……ッ!?」「」

下水道の水面からネガゼールが現れ、スバルとギンガの間に割って入って来た。

「うわわっ、モンスター!?」

「下がちなさいスバル!!」

「 やれやれ、ここまでめんどくさくなるとはな」

「「「!」「」」

誰かの声が聞こえてくる。

フォワード陣だけでなく、ギンガもその声に聞き覚えがあった。

「「「二宮さん!」「」」

「あゝはいはい、良いから騒ぐなっつての」

出てきたのはアビスだった。

更にアビスの後ろからアビスラッシャーとアビスハンマーも現れる。

(あの人は…!!)

ギンガはアビスを見て驚愕していた。

少し前に起こったテロリスト騒動の中、突如姿を現した仮面の戦士。

それが今、再び自身の目の前に現れたのだ。ギンガが驚くのは当然である。

「さうで、今度こそ逃がさねえぞ」

アビスはネガゼールにアビスセイバーを向ける。

それを見たネガゼールは、再び水面からミラーワールドへ逃げよう

アビスダイブが炸裂し、ネガゼールは断末魔を上げながら爆発した。その後、炎の中から出てきたネガゼールの魂は、アビスラッシュャーによって吸収された（アビスハンマーは不服そうにしていたが）。

「……すい」

ギンガは呆然としていた。

「…見た事のある顔がいるな」

アビスはギンガの方を見て呟く。どうやら彼は、彼女の事は覚えていたらしい。

「まあ良いや。さて…」

アビスはフォワード陣の方を振り向く。

「さっさと行くぞ。こんな所で、道草喰ってる場合じゃないんだろ？」

「…はい！」「」

全員が気合いを入れ直す。

それを見たギンガも、ひとまず気合いを入れ直す。

ここで、エリオがある事に気付く。

「…あれ、そういえば浅倉さんは？」

「ああ、置いて来た」

「…ええっ!?!」

「…そこまで驚かなくて良いだろ」

アビスは先程投げ捨てたアビスセイバーを拾い上げる。

「奴の事だ、どうせ後から追いついて来る。良いから行くぞ」

アビスはそのまま奥の方へと向かって行った。

「あ、ちょっと待って下さい!」

フォワード陣+ギンガも、慌てて後を追いかけた。

ちなみに肝心の王蛇は…

「…二宮の奴、何処へ消えた？」

自分が置いてかれている事に、まだ気付いてはいなかった。

同時刻、とある路地裏では…

「んん…今回の収穫はこんなもんかな？」

一人の女性がしゃがみ込み、何やら財布の中身を確認している。どうやらこの財布、彼女の物ではないらしい。

「まあ良いや。さて、次のカモは…」

女性は立ち上がった後、財布を収め、街中へと出て行く。

彼女が立ち去った後、路地裏にあった窓ガラスから…

- ピイイイイイイイイイイ… -

何やら、謎の鳴き声が聞こえてきたのだった。

第十九話 休み終了（後書き）

最後の最後で、謎の人物登場です。とは言っても、多分もうわかってる人もいるでしょうね。

あ、わかったとしても名前はまだ言わないで下さいね。彼女と二宮達の出会いはまだ先ですので。

おかしい所があったらいつでも言ってお下さい。出来る限り修正します。

それでは感想お待ちしてます。

第二十話 地下&市街地の戦闘（前書き）

第二十話投稿！！

オーズも終わり、遂にフォーゼが始まったか……。意外に面白そうだ
と思ったのは果たしてボクだけでしょうか？

…まあとにかく、第二十話をどうぞ。

第二十話 地下&市街地の戦闘

あれから地下を進んでいた六人は、ようやくレリックのケースを見つけた。

しかし…

「…何だこの状況」

六人の前に、紫髪の少女“ルーテシア・アルピーノ”、彼女の召喚獣である“ガリユ”が立ちふさがっていた。

現在、ケースはティアナ達が確保している。

「そのケースを渡して」

ルーテシアはケースを渡すように言う。

「…断つたらどうなる？」

「その時は…」

ルーテシアの言葉を聞いたガリユは構える。

「力づくってわけか」

アビスはバイザーを二回撫でて…

「ホントに…めんどくさいよなあっ…！」

水の衝撃波をガリューに向けて放つ。

ガリューはそれを素早く避け、アビスに向かって飛び掛かる。

闘いの火蓋は、切って落とされた。

一方、とあるビルの屋上では、青いボディスーツを着た女性が二人、遠くのへりを見ていた。

ヴァイス、シャマル、そして例の少女が乗っているへりだ。

「クアットロ、本当に良いのか？」

一人の女性が、「クアットロ」という名の女性に問い掛ける。

「大丈夫よ、デイエチちゃん　ドクターとウーノお姉様いわく、本物の“聖王の器”は砲撃くらいでは死なないらしいわ」

「わかった」

“デイエチ”という名の女性は自身のIS、“イノーマスカノン”を取り出し、何やら準備をし始めた。

同時刻、アビス達はルーテシアやガリユーと交戦していた。

「ハア！！」

「…ッ！！」

ガリユーの攻撃をアビスが受け流し、アビスの蹴りがガリユーに炸裂する。

大きく吹き飛ばされるものの、ガリユーはどうか体勢を立て直し、再びアビスと向き合う。

「ああめんどくせえな、どうするか…」

アビスが呟いたその時、突然アビス達を炎が襲った。

「何…！？」

「うわぁっ！？」

アビス達は大きく後退し、炎が飛んできた方を向く。

「全く、ルーラーもガリユーも勝手にどっか行くから心配したぞ」

突如現れたのは、リインフォース・ツヴァイと同じサイズである小さな妖精だった。

「でももう大丈夫だ。このアタシ、“烈火の剣精アギト様”がいるからな！！　どんな奴でもかかって来いやあつ！！」

アギトは派手に名乗りを上げる。

しかし、それを見たアビスは…

「うわあ、イタいガキがいるな…」

アビスはまるで、イタい物を見るかのような感じで見ていた。

「なっ、アタシはガキじゃねえ！！　てめえよりは長く生きてんだよっ！！」

ガキ呼ばわりされたアギトは怒り、反論する。

それに対しアビスは…

「…あ、そう。で？」

この反応である。

「うう〜……もういい、アタシの力をてめえに思い知らせてやる！！」

言い終わると同時に、アギトはアビスに向かって炎を繰り出した。

しかしアビスは自身のバイザーから水の衝撃波を発射する事でそれを相殺し、カードを抜き取る。

「…どうでも良いけどお前、水と炎では相性が悪いってわかってるよな？」

STRIKE VENT

アビススクローが装備され…

「ハアアッ！！！」

アビススマツシュが発動する。

炎は簡単に打ち破られ、そのままアギトに炸裂する。

「嘘おっ！？ うわああああああああっ！！！」

アギトは大きく吹き飛ばされ、壁に激突する。そして落ちてきたアギトをガリユーが両手で受け止める。

「きゅっっ…」

壁に激突した所為か、アギトはガリユーの手の中で気絶してしまっ

た。「全く、いったい何しに出て来たんだか…」

あまりの呆気無さに、アビスは完全に呆れ果ていた。

『お前等、伏せていろ』

「ガキを捕まえるのは少々気が引けるが、公務執行妨害だ。逮捕する」

「やれやれ、やっと寝れる…」

アビスは寝る事以外何も考えてなかった。

その後ヴィータはスバル達に、はやても甲冑を纏って出動した事などを色々と話していたが、そんな事はアビスの耳には届いてはいなかった。

その時である。

「…逮捕は良いけど」

確保されてからずっと黙っていたルーテシアが、突然口を開いた。

それに気付いたメンバーは顔を向ける。

「　　大事なヘリは、放つといて良いの？」

「「「!?!?!」」」

メンバー全員が驚愕の表情を浮かべる。

「チャージ、開始…」

ビルの上で、ディエチは構えたイノームスカノンをへりに向け、エネルギーをチャージし始めた。

「さあディエチちゃん、思いっきりやっちゃいなさーい」

「わかってる…後12秒、11、10…」

「しまった、それが狙いだったのか…!!」

「ど、どうしよう…!?!」

狙いがへりである事に気付いたヴィータ達はかなり焦っていた。

「ふあ…」

しかし、アビスだけは全く動じないでいた。おまけに仮面の中で欠伸もしている。

「って、二宮さん!! 何でそんな平然としてるんですか!!」

「何でって…お前等なあ」

アビスはフォワードの四人に言い放つ。

「いったい何の為に浅倉を置いてったと思ってんだ？」

それと同時に…

「8、7、6…」

デイエチはカウントダウンを進めていた。

その横でクアットロはニヤニヤしている。

「5、4、3…」

残り2、3秒まできた…

その時である。

「ギユアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

「！！？」

突如、二人の後ろからベノスニーカーが現れ、二人に向かって溶解

液を放ってきたのだ。

「なああっ!?!」

「くっ…!?!」

二人はどうにか回避するが、その所為で砲撃は失敗に終わってしまった。

溶解液のかかった所はジューと音を立て、少しずつ溶けていっている。

「い、いきなり何ですか!?!」

「わからない…ッ!?!」

デイエチは気配のする方を向く。

「くはははは…」

物陰から、ベノバイザーを持った王蛇が現れた。

「…あなた、何者ですか?」

クアットロが問い掛ける。

「…浅倉威だ。いや、そんな事はどうでも良い」

王蛇はカードデッキから一枚のカードを抜き取り、ベノバイザーに

装填する。

SWING VENT

「二宮達を捜していたら、ちょうどお前達を見つけたんだ。だから……」

王蛇は飛来したエビルウィップをキャッチし、二人に言い放つ。

「お前等、俺と遊んでくれよ?」

「え、遠慮しますわあ〜!!」

そう言つて、クアットロとデイエチはその場から逃走し始めた。

「逃がすか……!!」

王蛇はエビルウィップを振るい、それを二人に巻き付ける。

「キヤアツ!?!」

「うわっ!?!」

二人はアツサリ捕まり、動けなくなる。

そこへなのはやフェイト達、そしてアビソドンに乗ったアビスも合流する。

「おお、やっぱりそこにいたのか浅倉」

「ふん…」

アビスの台詞に王蛇はそっぽを向く。

そしてなのはとフェイトが前に来る。

「市街地での危険魔法使用、及び殺人未遂の容疑で逮捕します！」

（それ浅倉にも言った方が良くないんじゃ？ …ああ、俺が言えた義理じゃないか）

なのはの台詞を聞いたアビスは、内心そんな事を考えていた。

「投降しないなら、容赦はしません」

なのはとフェイトがデバイスを構える。

クアットロも最初は自身のISである“シルバーカーテン”を使おうかと考えたが、既に王蛇のエビルウィップで縛りつけられている為、逃走はどう考えても無理だった。

二人が戦意喪失しかけたその時…

「！！…何か来るな」

王蛇が何かに気付く。

そして…

「ん…グッ!？」

「がつ…!?!」

突然アビスと王蛇に、謎の攻撃が炸裂した。

「二宮さん、浅倉さん!?!」

フェイトが驚く中、クアットロとディエチの下にまた別の女性が現れた。

「何をしている貴様等」

「す、すみません…!?!」

二人の下に現れた女性“トーレ”に怒られ、二人はシュンとなる。

「仲間…!?!」

「今回は退散させてもらう」

トーレはクアットロとディエチを抱えて逃げようとする。

「逃がさないよ!?!」

なのはとフェイトが魔力弾を、“シュモクモード”となったアビスドンが砲撃を繰り返す、トーレ達のいた所が爆発する。

「当たった?」

煙の所為で、直撃したかどうかはよくわからない。

王蛇はエビルウィップを確認する。

「…いや、逃げられたな」

エビルウィップは先の部分が干切れていた。どうやら逃げられてしまったらしい。

「ダメか…」

これ以上追う事も出来ない為、なのは達は諦めざるを得なくなった。

その後、ヴィータ達も仲間の一人である“セイン”によってルーテシア達に逃げられる事となってしまい、ケースも奪われてしまった。ただまあ、肝心の中身は機転を利かせたティアナとキャロによってどうにか確保されていたらしく、それを聞いたヴィータは啞然としていたが。

ちなみにこの騒動が終わった後、置いてけぼりにされたのを思い出した浅倉が二宮と数時間程、木刀を片手にリアル鬼ごっこをしたのは別の話である。

第二十話 地下&市街地の戦闘（後書き）

今回はいくつかアレンジがあります。

地雷王が登場しなかったり、デイエチの砲撃を発射前に止めたり等々……原作の流れの方が好きな方がいたらすいません。

はやて「私の出番が無かった…orz」

…ホントにすいません部隊長さん。

まあとにかく、感想お待ちしてます。

第二十一話 ある意味の惨劇・オーディンの報告(前書き)

第二十一話投稿!!

ああ疲れた…。学校に行く事自体は別に苦ではないんですが、毎日ボクの苦手な英語があるって、何コレ死ねる…orz

…まあとにかく、第二十一話どうぞ。

第二十一話 ある意味の惨劇・オーディンの報告

「ああ、全く、何で俺がこんな目に……」

現在、二宮は自分の部屋に戻ろうとしていた。

先程、二宮は置いてけぼりにされたのを思い出した浅倉とリアル鬼ごっこをする羽目になってしまい、訓練場のいろんな所を逃げ回った。しかし、それを見て楽しそうだと思ったシグナムまでこれに参戦してしまった事で事態は悪化、同じく訓練場にいたスバル達も巻き添えを喰らうほど激しくなり、もはや鬼ごっこも何も関係無い壮大な闘いへと発展してしまった。まあ二宮の場合は、シグナムと浅倉をつまくぶつけさせる事でどうにか難を逃れたのだが。

これ以上の運動は勘弁だと思った二宮は、部屋に戻ってベッドでくつろぐ事にしたのだ。

「もうダメだ、これ以上動きたくねえ……」

部屋に入った二宮はベッドにダイブし、そのまま眠りについてしまった。

現在の訓練場では、ある意味で惨劇が起こっていた。

「くははははは…面白くなってきたな」

「はあ…はあ…確かに、な…」

周りにいくつもの瓦礫が落ちている中、訓練場の中心では王蛇とシグナムが対峙していた。

最初は木刀を使っていた浅倉もいつの間にか王蛇に変身しており、シグナムも木刀ではなくレヴァンティンを使用している。おまけに王蛇のボディには傷がいくつもついており、シグナムもバリアジャケットがボロボロになってきている。

「…「きゅっ」…」

「ふ、二人共…やりす、ぎ…」

ちなみにこの二人の闘いに巻き込まれたスバル達は既に戦闘不能になっている。スバルとエリオ、キャロの三人は目を回しており、かろうじて意識が残っていたティアナは二人に抗議の声を挙げようとしたが、結局は体力が尽きて倒れてしまった。

今、この訓練場で立っているのは王蛇とシグナムだけである。この二人、この闘いのきっかけが二宮である事は完全に忘れている。

「さあ、楽しい祭りはこれからだ…!!」

「フツ…派手に楽しもうではないか!!」

二人がまた激突しようとした…

その時である。

「二人共、いったい何をしているのかなあ……？」

この訓練場に、低い声が響く。その声を聞いたシグナムはギクツと反応し、王蛇は「？」と頭にクエスチョンマークを浮かべる。

二人が振り向いた先には、バリアジャケットを纏ったなのはが立っていた。それを見たシグナムは顔がサア〜と青くなり、逆に王蛇は仮面の下でニヤリと笑みを浮かべた。

「た、高町！！ これは、その……」

「訓練場がここまで荒らされたんだよ？ それで今更、私が言い訳を聞くと思う？」

シグナムが何か言おうとしたが、なのはがそれを遮る。確かになのはが言っている事は正論なので、シグナムは何も言えなくなる。

「面白い…オイ、お前も俺と闘えよ」

なのはが乱入してきたのを見てラッキーだと考えたのか、王蛇はなのはにベノサーベルを向ける。

「浅倉さん、あなたはまた……」

「あの時は二宮が余計な事をしたからなあ、今度こそ決着を着けようじゃねえか…!!」

それを聞いたなのは「ハア…」と溜め息をつき、レイジングハートを構える。

「二人共…少し、頭冷やそうか…」

「上等だ…!!」

「ま、待て!! 私は」

ドゴオオオオオオオオオオン!!!

シグナムが言い切る前になのはの砲撃が飛び、闘いは再開された。

それから数分後、部隊長のはやてによってこの騒動は終結し、三人は大説教を喰らう事となった。もちろん、闘いに巻き込まれたスバル達は医務室行きである（しかもなのは達の攻撃による流れ弾も喰らっており、余計にダメージが増えている）。

「…あ？」

二宮は目を覚ます。

そこは、真つ暗な空間だった。

「またここか…」

二宮が上半身だけ起こしたその時…

『聞こえるか？』

「！」

突如聞こえてきたオーディンの声に、二宮は振り返る。しかし、オーディンの姿は見当たらない。

「何処だ？」

『ここだ』

「何…ッ!？」

二宮はポケットが一瞬だけ光った事に気付き、ポケットに手を入れる。

そして取り出したのは“サバイブ『無限』”のカードだった。

「…まさか、このカードから聞こえてんのか？」

『その通りだ』

カードが点滅したと同時に、オーデインの声が聞こえてくる。

「…どうなってんだ？」

『今、私はそのカードを通じる事で、お前に話しかけている』

二宮の疑問にオーデインが答える。

「…何故声だけなんだ？」

『お前にそのサバイブのカードを渡しているからな…それが無いと、私は実体を保てない』

「よくわからんな。お前の体の仕組みって」

二宮は溜め息をつく。

「それで、話は何だ？ 俺をここに呼ぶって事は、俺に何か用事があるんだろ？」

『その事なんだが…』

オーデインは一息つき、話し始める。

『実はこの世界に、ライダーがもう一人やって来ている』

「…はっ？」

それを聞いた二宮は呆気に取られる。

「…どういう事だ？ この世界に流れ着いたライダーは、俺と浅倉だけじゃなかったのか」

『お前達とほぼ同じタイミングでこのミッドチルダに来ていたんだが、それを伝えておくのを忘れていたのだな。だから今、こうして伝えているのだ』

「…そういう事は早く言えよ」

二宮は呆れ返る。

『そのライダーも、このミッドチルダに潜んでいる。三人で協力して、モンスターを退治していつて欲しい』

「…ん？ ちょっと待て」

二宮はオーデインに問い掛ける。

「そのライダーって誰なんだ？ 特徴くらい教えてくれないとわからんぞ」

『なんだ、そんな事か』

すると突然、二宮の目の前に等身大サイズの鏡が出現する。

「ッ！？」

『その鏡を覗いてみる』

オーディンに言われた通り、二宮は鏡を覗き込む。

鏡には、薙刀のような武器でシアゴーストを切り倒している、白いライダーの姿が映っていた。

「これがそのライダーか……ん？」

二宮はある事に気付く。

『気付いたか？』

「このライダー……フォームからして、女性か？」

『そう……。そして、そのライダーの名は……』

仮面ライダーファム

「……」

二宮はベッドからガッツと起き上がる。

そこは真っ暗な空間ではなく、二宮が借りている男子寮の部屋だっ

た。

「仮面ライダーフォーム…女性が変身しているねえ…神崎の考えてる事はわからないな。何で女性までライダーに選んだんだか…」

ここまで言つて、二宮は気付いた。

「…変身している奴の名前聞き忘れてたな」

二宮は“サバイブ『無限』”のカードを見ながら呟く。

「…まあ良いか。そのライダーとも、いずれ出会う事になるだろうし」

二宮はカードをポケットに収め、ベッドから起き上がる。

「さて、これからどうするか…」

二宮は部屋から出て、なのは達の下へ向かう事にした。

それから数時間後…

「なあ、高町、シグナム」

「はい？」

「何だ？ 二宮」

「…何で俺まで乗せられてんの？」

現在、二宮、なのは、シグナムの三人は一台の車に乗っていた。シグナムが運転席、なのはが助手席、そして二宮が後ろの席である。

「どうせ昼寝以外にする事なんて無かるう？ 少しくらい我々のやる事にも付き合え」

「それに二宮さん、任務やモンスターが出た時以外ほとんど外出してないじゃないですか。たまには外出してみるのも大事ですよ？」

「いや、そう言われてもな…」

シグナムとなのはにこう言われ、二宮は何も言えなくなる。

「それに、主はやてから聞いているぞ？ お前達二人はモンスターが出た時以外でも、手伝える事は手伝ってくれろと」

「うっ…」

二宮は言葉に詰まる。

(あのまま寝てりゃ良かったな…)

二宮は昼寝から起きてしまった事を後悔した。

「…それでこの車、いったい何処に向かってんだ？」

「ああ、実は…」

なのはの話によると、街中で保護した少女のいる病院まで向かって
いるらしい。

(そんな事に俺を付き合わせるなよ…)

二宮は内心そう思っていた。

その時、シグナムに通信が入った。

『騎士シグナム、こちらシャツハ・ヌエラ』

「どうした？」

『すみません!! こちらの不手際で……検査の合間に、あの子が
姿を消してしまいました!!』

「…やれやれ、まためんどくさくなりそうだな」

今の会話を聞いていた二宮は小さく呟いた。

第二十一話 ある意味の惨劇・オーディンの報告（後書き）

まさか前回のリアル鬼ごっこがここまで発展するとは……自分でも思ってませんでしたね、はい

ファムの正体の事ですが、名前はまだ言わないで下さいね？ 肝心の装着者の名前がまだ話の中に出てませんので。

それでは感想お待ちします。

第二十二話 少女ヴィヴィオ、爆弾投下（前書き）

第二十二話投稿！！

ずっとパソコンに向き合っていたもんだから、肩めっちゃ凝った……！！

まあとにかく、更新出来ました。サブタイトルの意味は……内容を見たら分かります、はい。

一部再編集。

第二十二話 少女ヴィヴィオ、爆弾投下

あれから三人は病院まで到着し、シスター・シャツハと合流した。

「状況はどうなってますか？」

「はい、それが…」

シャツハの話によると、移動や転移等の反応は出ておらず、少女は外には出ていないらしい。

「手分けして探しましょう！」

「我々は中を搜索する。高町と二宮は外を頼む」

「はい！」

「ん…」

シグナムとシャツハは中、なのはと二宮は庭の搜索を開始した。

「全く、めんどくさい事になっちゃったな…」

二宮は缶コーヒーを飲みながら搜索していた。

「…そのコーヒーは何処から出したんですか？」

「好きな時に好きな物飲んで何が悪い？」

「真面目に探して下さい！！」

「飲みながら探しとるわ。ちなみにまだもう一本ある」

「まだあるんですか！？」

相変わらずフリーダムな二宮は、なのはの突っ込みも軽く一蹴する。
すると…

・ガサツ・

「…！！」

近くの草木から音が聞こえ、二人は立ち止まる。

そしてその草木から、あの少女が姿を現した。少女の両手には、ウサギの人形が大事に抱えられている。

「あっ」

「…！？」

なのはが声を上げた事で、少女も二人に気付く。

「こんな所にいたの。心配したんだよ？」

なのはが少女に優しく声をかけるが、少女は少し怯えているように、
なのはに近付こうとしない（ちなみに二宮はその後ろでコーヒーを
飲んでいる）。

その時…

「 逆巻け、ヴィンテルシャフト!! 」

「 「ッ!?! 」 」

「 ブフウッ!?! 」

いきなり甲冑姿で現れたシャツハなのはと少女は驚き、二宮は思
わずコーヒーを吹いてしまった。

「 ちょっと!?! 」

「 下がっててください。この子は私が… 」

シャツハはデバイスを構え、少女に近付いていく。少女は先程以上
に震えが強くなり、抱いていた人形を落としてしまった。

そこへ…

「 おいこら 」

「 えっ…痛っ!?! 」

二宮が後ろから、シャツハの後頭部にチョップを炸裂させた。

「子供を脅かすな。泣かれたりしたら、あやすのが面倒だ」

「し、しかし…」

「それから」

二宮は空になっている缶を放り捨てる。

「…お前の所為でコーヒーこぼれちゃっただろっがっ!」

「ぎゃんっ!」?

シャツハの額に、二宮の左ストレートが炸裂した。

「痛いっ…!!」

シャツハは殴られた額を抑えて悶えている。

「…遠慮という言葉は無いのか奴には」

「にゃははは…」

「?」

後から追いついて来たシグナムとなのはは苦笑し、少女は頭にクエスチオンマークを浮かべる。

「…あつごめんね。びっくりしちゃったかな?」

なのははしゃがんで少女に話しかける。

「私は高町なのは。君の名前は？」

「…ヴィヴィオ」

「ヴィヴィオ…良い名前だね」

なのはヴィヴィオに対して微笑んで見せた。

「…いないの」

「ん？」

「…パパとママ、いないの…」

「…そっか。じゃあ一緒に探そうか？」

一方、ミッドチルダの街中では…

「あ、あれ！？ 財布が無い！？」

「お、俺もだ！？」

何人かの男性が、何故か財布が無くなっている事で焦っていた。周りの人達は「何だ何だ？」という感じで見ている。

(よっしやあゝ、財布ゲットオ…!!)

そんな中、一人の女性が陰でガッツポーズをしていた。

そんな彼女の手には、男性達の物と思われる財布があった。

(中身も結構あるみたいだし、そろそろホテルに戻るか)

女性は財布を全て懐にしまい、急いでその場を立ち去った。

「くっそあゝ、誰だよ俺の財布を盗んだ奴は!!」

「見つけたらとっちめてやる!!」

財布を盗まれた人達はかなり怒っていた。

もちろん、彼等は気付いていなかった。

・キイイイイン…キイイイイン…

『キシヤアアアア…!!』

近くの店のショーウィンドウに、異形の姿が映っていた事に…

あれから時間が経ち、二宮達はヴィヴィオを連れて六課に戻る事となった。戻る前にヴィヴィオの親探しをするという事もあったが、結局見つかる事なく終わってしまった。

そして六課の部隊長室では、はやてとフェイトがある事について話し合っていた。

「はやて、そろそろ聞いても良いよね？ 六課建設の本当の理由」

「…せやな。私とフェイトちゃんとなのはちゃんの三人、あと二宮さんと浅倉さんもおった方が良えかもしれへん」

そしてはやてはなのは、二宮、浅倉の三人を呼ぶべく、モニターを開く。

しかし…

『うわああああああああん！！』

モニターに映ったのは、大泣きしているヴィヴィオの顔だった。

「ヴィヴィオちゃん、お願いだから泣かないでえ〜！」

なのははヴィヴィオに泣き付かれて困っていた。

フォワード陣も、何をどうすれば良いかわからず、オロオロしている。

もちろん、二宮はこんな時でも平然としていた。

「に、二宮さん！ 手伝ってくださいー！！」

「無理」

なのはによる必死の頼み事も、二宮はあっさり一蹴する。

なのはが困り果てたその時、はやてとフェイトがやって来た。

「エースオブエースにも、勝てへん相手がおるもんやなあ」

はやてはニヤニヤしながらなのはを見る。

『フェイトちゃん、助けてー！！』

なのははフェイトに念話で助けを求める。

フェイトはそれに応じたのか、泣いているヴィヴィオの前でしゃがみ込む。

そしてフェイトの巧みな話術により、なんとかヴィヴィオの説得に成功した。

「ふうん…ガキの面倒見るのは得意なんだな」

「二宮はこう言ったが、もちろん彼は興味なんて微塵も持ってはいない。」

「…ん？」

するとそこへヴィヴィオが寄って来る。

そして、とんでもない“爆弾”を投下するのだった。

「行ってらっしゃい、パパ」

「パ、パパッ?!?!」

ヴィヴィオとフェイトを除くメンバーは、全員啞然となった。

「二宮は数秒間硬直し、ギギギッとフェイトの方に首を向ける。」

「…ハラオウン、いったい何を吹き込みやがった？」

「えっ、ええつと…」

追い詰められたフェイトは白状した。

ヴィヴィオには両親がいない。“ママ”の方はなのは、そして何故かフェイトも当てはまる事になったのだが、それだと今度は“パパ”の方がいない。仕方なく二宮をその“パパ”に当てはめる事で、ヴィヴィオの説得に利用したのだ。

「おつ…お・ま・え・なあ…!!!!」

二宮は右拳をワナワナと震えさせる。

「へえ、良かったやんか。二宮さんもパパにな…」

・ゴスツ!!!!

「みぎゃあつ!!!!」

「」「」「!!?」「」

二宮をからかおうとしたはやての額に、二宮の右ストレートが炸裂した。

「きゅっっ…」

まともに喰らったはやてはバタンと倒れ、気絶してしまった。

「えつと…駄目?」

「冗談じゃねえ、何で俺がパパになんて…!!」

フェイトは上目遣いで見てくるが、二宮はパパと呼ばれる事を本気で嫌がっていた。

今まで黙っていた浅倉も口を開く。

「はっ別に良いじゃねえか、二宮パ…」

・ガキインツ!! -

… いったい何処から取り出したのか、二宮と浅倉は互いの木刀をぶつけ合った。

「…OK、お前も今すぐ死にたいようだなあ浅倉!!」

「上等だ、今ここでケリを着けたって良いんだ…!!」

二人の木刀が互いを押し合う。よく見ると、木刀に少しずつヒビが生え始めている。

(((…だっ誰か、この空気どうにかしてえ〜!!!((()))))))

この恐ろしい空気に耐えられなかったフォワード陣はガタガタ振るえながら、心の中で誰でも良いから救いを求めている。

すると…

・キイイイイン…キイイイイン… -

「「!!」」

突如聞こえてきた金切り音。モンスターの出現だ。

「…命拾いしたな」

「それはどつちだかな…」

「ふんっ」

二人は木刀を放り捨て、鏡のある場所まで向かった。

「「「ホッ…」」」

フォワード陣はそれを見てホッとしていた。

「!!…またモンスターか!!」

とあるホテルでも、あの女性がモンスターの出現を察知していた。

彼女はすぐに鏡のある洗面所まで向かい、白いカードデッキを突き出す。

変身ポーズを取り、彼女は叫んだ。

「変身！！」

カードデッキがはめ込まれ、彼女は白鳥を模した戦士“仮面ライダーファム”への変身を遂げた。

ミラーワールド内のある駐車場にて…

「キシヤアアアアアアアアッ！！！」

アビスと王蛇の二人は、鳳凰型モンスター“ガルドサンダー”と対峙していた。

「こいつ、神崎の…！」

アビスはガルドサンダーに見覚えがあった。

元々ガルドサンダーは、ライダーバトルの首謀者である“神崎士郎”に従っていたモンスターだ。その時のガルドサンダーの役目は、神崎にとって邪魔である存在を排除する事だった。“手塚海之”こと“仮面ライダーライア”の友人を捕食したのもコイツだ。しかしこの世界に神崎はいない為、このガルドサンダーは別個体である可能性がある。それでも、その強さに変わりはないのだ。

「全く、めんどくさい奴が出て来たな」

「何でも良い、楽しめるなら何でも構わん…！！！」

そう言って王蛇は、ベノバイザーにカードを装填しようとする。しかし…

「キシヤアアアアアアッ！！」

「何っ…！？」

ガルドサンダーは長く伸ばした尾羽を使って王蛇を捕縛、王蛇は大きく転倒してしまった。

「ちっ…！！」

王蛇は落としたベノバイザーを拾うべく手を伸ばすが、届きそうに届かない。

「キシヤアアアアアアッ！！」

「ぐうっ！？」

ガルドサンダーは尾羽を引っ張って王蛇を引き寄せ、彼の腹に右フックをヒットさせる。

「くそっ…！！」

王蛇は尾羽に縛られた所為でうまく動けない。

このままガルドサンダーが優位に立つかと思われたその時…

「俺を忘れんなよ？」

SWORD VENT

「キシヤアアアアアアッ!？」

王蛇とガルドサンダーの間に割って入ったアビスが尾羽を切り裂き、ガルドサンダーを蹴り飛ばした。

「苦戦するなんてだらしのないなあ、浅倉」

「…さっきの仕返しか？」

「さあ、何の事だか」

アビスはガルドサンダーの方を振り返る。

「シヤアアアアア…!!！」

立ち上がったガルドサンダーは炎を纏い、火の鳥となって何処かへ逃げようとする。

「あつ待て!!！」

アビスバイザーで水の衝撃波を放つも、結局は飛び去ってしまった。

「ちっ、逃げられたか…」

これ以上の深追いは厳禁だと判断し、二人は現実世界に戻る事にした。

ちなみにその後、二宮と浅倉の喧嘩が再開されたのと、はやてが気絶しているのを理由に、目的の“とある場所”に行くのはかなり遅れる事となった。

「ふうん、大した事なかったね」

ミラーワールド内、アビスと王蛇が闘っていたのとは別の場所で、ファムは自身のバイザーである“ブランバイザー”を鞘に収める。

彼女の後ろには一体のシアゴーストが倒れていた。その体が少しずつ消滅し、その中から魂が出現する。

「ピイイイイイイイッー!!」

何処かから白鳥型モンスター“ブランウィング”が出現し、その魂を吸収した。

「さあて、さっさとホテルに戻ろっと」

ファムはライドシューターに乗り、その場を去って行った。

彼女と二宮達が遭遇するのは、まだもう少し先の話である。

第二十二話 少女ヴィヴィオ、爆弾投下（後書き）

やっちまったぜ、二宮父親フラグ…！！

後で二宮に半殺しにされそうだな…

今回はファムの行動も一部だけ書きました。まあそこまで目立った事はしてませんけど。

そして今回登場したガルドサンダーですが、後にまた現れます。

まあとにかく、皆さんの感想お待ちしてます。

第二十三話 変わる予言（前書き）

第二十三話、やっと投稿…!!

全く、予言を考えるだけで何でこんなに苦労しなきゃならないんだ
……もつと古典勉強すれば良かったな…

…まあとにかく、更新しました。それではどうぞ。

第二十三話 変わる予言

あれからなのは、フェイト、はやて、そして二宮と浅倉の五人は、目的地である“聖王教会”へと訪れていた（二宮と浅倉の喧嘩&はやての気絶が原因で、到着はかなり遅くなったが）。

「初めまして、カリム・グラシアです」

聖王教会の騎士“カリム・グラシア”は、二宮と浅倉に自己紹介をする。

「二宮鋭介だ。まあ、よろしく」

「…浅倉威だ」

二宮と浅倉も自己紹介を済ませる。

「久しぶりだな、フェイト執務官」

「クロノ提督も、お久しぶりです」

フェイトは事務的な返事を返す。それを見たカリムは微笑みながら言う。

「二人共、そう堅くならないで。私達は個人的にも友人だから、いつも通りで平気ですよ？」

「じゃあ…久しぶり、クロノ君」

「久しぶり、お兄ちゃん」

なのはとフェイトは言い直す。

「…よせ、お互いに良い年だろうに」

フェイトの兄、“クロノ・ハラオウン”は恥ずかしそうに顔を逸らす。

「…お兄ちゃん？」

二宮と浅倉は、話に全くついていけてない。

「クロノ君とフェイトちゃんは兄妹なんや」

「義理の兄弟だがな」

はやての説明に、クロノが付け加える。

「ふうん…」

二宮はやはり興味が無さげである。

そして全員が座り、はやてが話し始める。

「さて、改めて六課の事と……今後の事についても、色々話しておかなあかん」

「…というか、いい加減教える。何で俺達までここに連れて来られたんだ？」

二宮と浅倉は、自分達がここに連れて来られた理由が未だに分かっていない。

「ああ、今回の事は君達にも話しておいた方が良いでしょう。ライダーである君達にも、関係のある事かもしれないからな」

「ああそう……って、何でお前が俺達の事を知ってる？」

二宮はクロノが自分達の事を知っているのに疑問を抱く。

「はやて達から聞いているよ。最近になって出沒し始めた例の怪物達を、次々と倒していつている二人のライダーがいると」

「へえくなるほど……八神が、ねえ……？」

それを聞いた二宮は、はやて達を横目でギロリと睨みつける。それに気付いたはやて達は思わずビクツと反応する。

「ああ、安心してくれ。君達と六課は契約上で手を組んでいるんだろ？ 我々も、君達の事は上層部に報告するつもりは無い」

二宮がはやて達を睨みつけているのに気付いたのか、クロノはさすがフオローを入れる。

「信用して良いんだな？」

「大丈夫だ、約束は守る」

二宮はクロノを睨んだまま、数秒間黙り込み……

「…なら良い」

やっと警戒を解く。はやて達はホッと胸を撫で下ろした。

『ありがとなクロノ君』

『なに、大した事ではない』

はやては念話でクロノに礼を言う。

「…失礼、少し話が脱線してしまった」

「いえ、大丈夫よ」

クロノは謝罪し、カリムはそれを許す。

「…さて、話を再開しよう」

クロノが再び話を切り出す。

六課建設の理由、設立の協力者達の事、カリムの希少技能^{レアスキル}など、様々な事が話された。二宮と浅倉は話にくくついていけず、退屈そうにしている。

そしてカリムが紙の束を取り出し、その紙を宙に浮かべる。二宮が覗き込むが、何て書いてあるのかはさっぱり分からない。

「…何だこりゃ」

「古代ベルカ語、かなり昔の言語です」

「古代ベルカ語…？」

フエイトが説明するも、二宮と浅倉にとってはチンプンカンプンだった。二宮と浅倉は今までに、昼寝や模擬戦以外のあまった時間で、何度かミッド語を六課メンバーに教えてもらったりしていた。そのおかげで、簡単な文章ならどうにか読めるようにはなったが、より複雑な文章となるとそうはいかない。古代ベルカ語なんて、この二人が解読出来るわけが無い。

「解釈ミス等も含めれば、的中率や実用性はよくあたる占い程度です。あまり便利な能力ではありませんが…」

「聖王教会だけでなく、次元航行部隊のトップもこの予言はよく目を通してている。信じるかどうかは別として、有職者の予想情報の一つとしてな」

「因みに地上本部は、この予言を嫌つとる。トップのお人が、この手のレアスキルをお嫌いやからな」

(地上本部のトップ……確か、レジアス・ゲイズだっけ…?)

二宮は前にテレビで見たレジアスの事を思い出す。

「そして、予言の内容がこれです」

カリムは一枚の紙を取り、静かに語り出す。

- 旧き結晶と無限の欲望の交わりし時 -
- 死せる王の下 聖地より彼の翼は蘇る -
- 死者は踊り 大地の法の塔は虚しく焼け落ち -
- それを先駆けに 数多の海を守りし法の船は地に墮ちる -

「これって、まさか…」

「そう… “ある事件” について、指している予言よ」

なのは達は内容を聞いて驚く。しかし二宮と浅倉は目を瞑っており、一言も喋らない。

「そして、この予言なのですが…」

カリムはまた別の紙を手取る。

「つい数日前に、予言の内容が大きく変わっていたのです」

「「「えっ…!?!?」「」」

それを聞いたなのは達は驚く。

「そして、その内容ですが…」

カリムは二宮と浅倉の方を向く。

「恐らく、あなた達も関連している可能性があります」

「：！」

二宮と浅倉は目をパチリと開ける。

「内容はこうです」

カリムは、再び語り出す。

・旧き結晶と無限の欲望が交わりし時 異界の者達は大地に降り立
つ・

・死せる王の下 聖地より彼の翼は蘇る・

・死者は踊り 大地の法の塔は虚しく焼け落ち・

・それを先駆けに 数多の海を守る法の船は地に墮ちる・

・異形は世界に行進し 世界に更なる惨劇を招く・

・虚しき闘いの中 空を舞う聖剣 無限を司りし最凶に挑まん・

「これは…」

「…内容がかなり変わっているな」

なのは達は驚愕する。先程のとは、内容がかなり変わっているからだ。

「“旧き結晶”はレリックって分かるんやけどな…」

「二宮さんと浅倉さんは、何か分かりましたか？」

フェイトが二人に聞いてみる。

「何となくだが……“異界の者達”は俺達の事、“異形”はモンスターを指しているって事くらいだろうな。他はよく分からん」

「…同じく」

二宮と浅倉でも、大した事はよく分からないらしい。

「まあ内容からして……この先、碌な事が起こらないのは確かだろうな」

クロノの発言に、なのは達は息を呑む。

「…これから先、いったい何が起こるのかは私等にも分からん。せやけど、最悪な事態だけは何としてでも避けなあかん」

はやてが口を開く。

「皆、協力してくれへんか？」

はやては顔を上げ、なのは達に懇願する。その表情は、かなり真剣な物だった。

「非力ながらも、協力させてもらつよ」

「というよりそれ、今更聞く事でもないよ？」

なのはとフェイトは、始めから協力するつもりでいたようだ。

「…まあ、元々そういう契約だったしな」

「俺は闘えればそれで良い」

「二宮と浅倉も、肯定したようだ。」

「…皆、ありがとな」

はやての目には、ほんの少しの涙が浮かんでいた。

その後、二宮達は六課に戻り、それぞれの時間を過ごす事となった。

「二宮は自分の部屋でくつろいでいたのだが…」

「……………」

「え、ええつと……すみません」

「スウ…スウ…」

現在、部屋には二宮、フェイト、そしてヴィヴィオの三人がいた。ヴィヴィオはベッドでぐっすり眠ってしまっている。

「…そういえば俺、父親認定されてたんだっけ？ どっかの誰かさんの所為で」

「うっ…」

二宮はわざと大きい声で言う。実際、フェイトがそう教えていたのが原因である為、彼女は何も言えなくなる。

「…駄目でしたか？」

「いや、別に良い。今更子供を泣かせるのも、流石に気が引ける」

二宮はヴィヴィオの頭を撫でながら言う。撫でられているからなのか、寝ているヴィヴィオは少し嬉しそうな顔をしている。

フェイトは二宮の表情を見ている。その表情は、何処か哀愁が漂っていた。

(やっぱり二宮さんは、家族の事が…)

フェイトは直接聞いた事があった為、二宮が家族を失っている事は知っていた。彼女も過去が過去である為に、やはり二宮の事が他人

に思えないのだろう。

(一度でも良いから、見てみたいな……二宮さんが笑っている所を……)

フェイトは二宮の顔を見てそう思っていた。

「…何故俺の顔を見ている？」

「…あついえ、何でもありません!！」

二宮に聞かれたフェイトは顔を赤らめ、すぐに顔を逸らす。

(あれ、何でだろう……二宮さんの事を考えると、何故か急に顔が熱くなってきたよ……!?)

フェイトは顔を赤くしながら困惑していた。二宮は頭に「？」とクエスチョンマークを浮かべているが。

その時である。

・キイイイイン…キイイイイン…

「…ッ!？」

「…俺達に休む暇も与えてくれねえのか、あの怪物共は」

突然の金切り音に、フェイトも我に返る。二宮は立ち上がり、洗面

所の鏡に向き合う。カードデッキをかざし、変身ポーズを取る。

「変身!」

二宮はいつものようにアビスに変身し、鏡からミラーワールドへ突入した。

「…頑張ってください、二宮さん」

フェイトはアビスの飛び込んだ鏡を見て、そう呟いた。

「……ウツへウツへ」

ミラーワールド内では、シアゴーストの群れが待ち受けていた。

「ここかぁ、祭りの場所は…」

「お前等も、沈めてやろうか」

合流したアビスと王蛇は、シアゴーストの群れに向かって突撃した。

第二十三話 変わる予言（後書き）

予言自体はあんまり捻りはありません。一応、とある伏線は張ってあるのですが、果たして何人がそれに気付くかな……？

ちなみに、次回からはまたオリジナルが入ります。二宮達とファムの装着者を早く会わせないといけませんので、ナンバーズによる二度目の襲撃は当分先になると思います。

それでは感想お待ちします。

第二十四話 閃光の翼（前書き）

テスト終了、そして第二十四話やっと投稿…！！

疲れた…今はとにかく休みたい…

今回でようやく、ファムの装着者と遭遇します。

第二十四話 閃光の翼

二宮達が聖王教会を訪れてから数日が経った。

現在、二宮達は食堂にて昼食をとっている。

「うう〜」

ヴィヴィオは今、皿上のピーマンを睨み付けていた。

「ママ〜」

「もう、ダメだよヴィヴィオ？　ちゃんと食べないと、綺麗になれないよ？」

「…だってさキャラ」

「…食べます」

エリオの皿にこっそりニンジンに移そうとしていたキャラは、諦めてニンジンを口に含んだ。やはり、女の子は“綺麗”という言葉には敏感なようだ。

そんな中、二宮は黙々とご飯を食っていた。

（今日のうちに、色々調べておくか…）

何かを企んでいるようだが、もちろんなのは達はその事には気付いていない。

その時、浅倉とシグナムが立ち上がる。

「さて、飯は喰った……そろそろ闘るとするか」

「今度こそ、決着を着けようではないか」

二人が食堂を出て行く。数秒後、なのは達がハッと気付く。

「しまった！！ このままだと訓練場がまた荒らされる！！」

「私が行くよ！！ あの二人には私がたっぷり“お話”しないと！！」

「いや、なのはも十分荒らしてるからね！？ この前の被害がかなり酷かったよ！？」

「お願いやからこれ以上訓練場を荒らさんといて！！ 修理費が馬鹿にならんやあああああああああ！！！！」

「…さて、行くか」

色々と騒いでる隊長陣をそのまま放置し、二宮も食堂を出た。

「来たのは良いが、どうするか…」

二宮はミッドの街中に来ていた。普段めんどくさがり屋な彼が、こうして街中に出ているのにも理由がある。

「万が一って事もあるからなあ…」

今は六課に滞在している二宮と浅倉ではあるが、もし一般人を契約モンスター達の餌にしている事がばれてしまえば、六課に滞在する事は難しくなる。その時の事を考えて、六課以外でアジト代わりに使えそうな建物か何かないかと探しているのだ。

(ホントに、どうするか…)

二宮が歩いていたその時…

「離せ、離せよ!！」

「良いじゃねえかよお」

「俺達と遊ぼうぜえ〜?」

「…ん?」

二宮は声のした方を振り向く。何やら一人の女性が、チンピラらしき男二人に絡まれていた。

「…関わらない方が良さそうだな」

二宮は巻き込まれたくないが故に、すぐにその場を去ろうとした。

だが…

「…あつ！ ねえ！」

「何だ……ん？」

突然呼び止められたかと思ったら、女性がいきなり腕に絡みついてきた。

「ああ？ 何だてめえ？」

「関係無え奴は引つ込んでろ！！！」

チンピラ二人は二宮をどかさうとするが、ここで女性がとんでもない発言をする。

「関係無くないもん、あたしの彼氏だもん」

「…な、何いつ！？」

「…はい？」

その一言に、チンピラ達も二宮も啞然となった。

「と、いうわけで……助けてダーリン」

「な、ちよっ……おい!!」

二宮はわけがわからないまま無理やり押し出され、女性はそのまま何処かへ逃げ出した。

「ほぐう……お前、ホントに彼氏なのかぁ？」

「まあ何でも良いや、邪魔するならボコボコにしてやるよ」

チンピラ二人は拳をパキパキ鳴らす。

「…外に出なけりゃ良かったか？」

二宮は溜め息をついた。

数分後…

「」「ぐう」「」

「…ちとと」

チンピラ共を半殺しにした後、二宮は首を「キッと鳴らす。

「ぶう……ん？」

その時、二宮はポケットの違和感に気付く。何かと思い、ポケットに手をつ突っ込むが…

「…無い」

そう、二宮の財布が消えていたのだ。

もう一度手をつ突っ込むが…

「……」

やはり無い。

「…落としちゃったか？ 参ったな、いったい何処に…」

言いかけていたところで、二宮はハッと気付く。

先程までは、ポケットには何の違和感は無かった。しかし、女性にいきなり助けを求められ、向かって来たチンピラ共を半殺しにした後、気付いたら財布は無くなっていた。

ここまで考えると、怪しいのは一人しかない。

「…あの女か」

「よっしゃあ、大成功!!」

その女性は今、路地裏に隠れていた。

ポケットから二宮の財布を取り出し、中身を確認する。

「おお、結構持つてるなあ。よし、さっきの奴には悪いけど、これはあたしが頂いちゃいまゝすつと」

女性はそのまま財布を懐にしまおうとし……

「そうはいかねえよ泥棒女」

「えっ……痛だだだだっ!?!」

二宮に腕をつかまれ、阻止された。しかもかなり力を込めている為、かなり痛い。

「全く……女の癖にスリとは、ご苦労なもんだな」

「痛だだだだ、ちょっと放せ、頼むから手を放せって!!」

二宮は彼女の手から財布を取り返した後、ようやく放した。

「痛うゝ…あんだ、何であたしの居場所がわかったんだ!?!」

「何でも良いだろ。ていうか人の財布を盗んどいて、謝りもしない

のか」

「何言つてんの、盗まれる方が悪いんでしょ？ あたしがあんな形で近づいて来た時点で、何で気付かないかなあ？」

「開き直りかオイ」

「あっそれとも、あたしのこの美貌が悪い？」

「開き直りはスルーか」

「あっそれともあ、あたしをこお〜んな綺麗にした、神様が悪い？」

(…もう突っ込まなくて良いよな)

二宮は完全に呆れ果てていた。

「「おい!」」

するとそこへ、先程のチンピラ達がやって来た。

「さつきはよくもやってくれたなあ」

「お前等、覚悟は出来てんだろうなあ？」

半殺しにされた所為なのか、チンピラ達はかなり機嫌が悪いようだ。

「な…:ちょっとあんた、いったい何をしたのよ!？」

「さあ？ いきなり殴りかかって来た奴等を返り討ちにした事以外

に、全く覚えが無えな」

「原因それだよ!?!? ていうか言ってる時点で覚えてんじゃん!?!?」
そんなやり取りをしていたその時…

・キイイイイン…キイイイイン…

「「…ッ!?!?」

突如、金切り音が聞こえてきた。

・グサツ

「…ん?」

チンピラの首に何かが刺さり…

「何だ…!?!? う、うわあああああああああ!?!?」

「「!?!?」

「ひいっ!?!?」

チンピラの耳からいきなり白い糸が出てきて、チンピラはそのまま窓ガラスの中へ吸い寄せられてしまった。

辿り着いた先ではシアゴーストの大群が待ち構えており、ファムが既に闘っていた。

「またコイツ等か…」

アビスはカードを装填する。

SWORD VENT

アビスセイバーを手に取り、アビスもシアゴーストの大群に向かって突撃する。

「フツ、ハアツ!!」

アビスは向かって来るシアゴーストを次々と切り倒す。

「ヴウツ!!」

「おっと」

シアゴーストの振りかぶる腕を避け、右足で蹴り飛ばす。

「…助っ人を呼ぶか」

アビスセイバーを一度地面に突き刺し、カードを装填する。

AD VENT

「ウツへウツへ」

音声が鳴ると同時にシアゴーストが飛び掛かり…

「ズドオンッ！！」

「ヴウッ…！？」

「グルルルル…！！」

アビスハンマーの砲撃に打ち落とされる。

「グオオオオオオッ！！」

アビスラッシャーは二本の剣を振り、シアゴーストをなぎ倒す。

「さて、あっちはどうだ…」

アビスはファムの方を向く。

「フッ、ヤアッ！！」

ファムはブランバイザーを持ち、すれ違い様にシアゴースト達を切り倒していた。

「数が多くてキリが無いし、一気に片付けよう」

カードデッキからカードを一枚抜き取り、ブランバイザーに装填す

る。

FINAL VENT

「ピイイイイイイイイイイイッ!!」

何処からかブランウイングが飛来し…

「『ヴウツ…!?!』」

突風を起こし、シアゴースト達を吹き飛ばす。

吹き飛ばされた方向にはファムがおり、彼女はブランウイングの翼のフチを模した雑刀“ウイングスラッシュャー”を構え…

「フツ!! ハツ!!」

何度も、何度も、何度も、飛んで来るシアゴースト達を切り倒し…

「ハアッ!!」

最後の一体も切り裂く。

切られたシアゴースト達は全て爆散した。

これがファムの必殺技“ミステリースラッシュ”である。

「ほう、あれがあの子の実力か…」

アビスが關心していると…

「ウツへ」

「うおっとー！」

シアゴーストが殴りかかる。もちろんアビスは簡単に回避する。

「…面倒だな、一気に決めるか」

アビスバイザーにカードが装填される。

U N I T E V E N T

「グオオオオオオオオオオオツ！！！」

アビスラッシャーとアビスハンマーが一箇所に集まると同時に光り出し…

「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！！！」

アビソドンへとパワーアップした。

「一気に蹴散らせ」

アビスが命令すると、シュモクモードになったアビソドンが砲撃を繰り返し出し、シアゴースト達を次々と爆散していく。

「…!?!」

闘いに集中していた所為で気付いていなかったのか、爆音を聞いたファミはようやくアビスの存在に気付いた。

「あいつ、まさかさっきの…」

アビソドンが砲撃を放った結果、シアゴーストはとうとう一体だけになった。

「…後はこれで良いか」

アビスはカードを装填する。

FINAL VENT

アビスは先程地面に刺したアビスセイバーを抜き…

「フツ!」

物凄いスピードでシアゴーストに接近する。

「ハアアアアアアアアアアアアッ!」

「ヴツヴウ…ヴ…!?!」

連続でシアゴーストを切りつけた後…

ファムが言い切る前に、アビスは窓ガラスから現実世界へ戻って行く。

「えっ…あ、いやオイ、ちょっと待ってよ!」

置いてかれまいと、ファムも慌てて後を追った。

第二十四話 閃光の翼（後書き）

アビスの第二の必殺技ですが、あれ以外に良い名前が思いつきませんでした。作者はネーミングセンスがイマイチな物で…orz

そしてどうでも良いかもしれないけど、シアゴーストの捕食の仕方って結構恐いですよね……それとも、そう思っているのはボクだけでしょうか？

…まあ良いや、後々もつと凄いな事になるし。

取り敢えず、感想お待ちしてます。

第二十五話 戦力確保（前書き）

第二十五話投稿！！

ボクの方はもうじき文化祭になりますね。ちなみにボクはいつものように食べ歩きをする気満々です。

えっ？ 自分のクラスの出し物はどうすんだって？

ボクのクラスは何故かクイズ大会です。んまあ、適当に最低限の仕事をしたら後はサボります ヲイ

まあとにかく、第二十五話どうぞ。

第二十五話 戦力確保

先程の戦闘から数分後：

「ふうん、あんたもライダーだったんだねえ」

「俺も、お前がライダーだなんて知らなかったな」

二人は今、近くの喫茶店で改めて対面していた。ちなみに屋外である。

「お前もこの世界に来ていたとはな……今まで何をしていたんだ？」

「うーん、そうだなあ……そこらの男共から財布盗んだりしたり、モンスターを倒したり、この世界の事を知る為に情報収集したりとか、そんな物かな？　ちなみに今は、盗んだ金で近くのホテルに滞在してるんだ」

一通り言った後、女性はケーキを食べ始めた。女性が頼んだのはイチゴの乗ったショートケーキと紅茶、二宮はコーヒーのみである。もちろん、コーヒーは無糖だ。

「…それで、俺の財布まで盗ろうとしたってわけか？」

「ええつと……まだ怒ってる？」

女性は恐る恐る聞く。

「…いや、もう良い。そんな事でいちいち突っ掛かっても仕方ない

しな」

「そ、そうか……」

「だがな」

「え……痛だだだだだだっ!？」

二宮は女性の頭に、アイアンクローをかまし始めた。

「もし、また同じような事を俺に対してやらかしたら……分かってるよな? 口で言わなくても」

二宮は笑顔ではあるが、目が笑っていないかった。それどころか、彼の背中から何やらドロス黒いオーラのような物が見えている。周りの客やウェイター達もそれに気付いたのか、『我関せず』とでも言うかのように二人のそばを離れて行く。

「痛だだだだだ!! ちょっ分かった、分かったよ!! もう盗ったりしないって!!」

「ホントに反省してるのか? ……まあ良い、俺に対して二度とあんな事をしないように、今ここでたっぷりお仕置きしてやるからよ」

「どの道お仕置きは食らうのかって痛だだだだ!! ちょ、待って!?! なんか力、手の力が強くなっていったって!?!」

二宮の手の力が段々強くなっており、女性の頭は何やらミシミシと悲鳴を挙げている。

「…それで？ お前の名前は何て言うんだ？」

「えっ……ああ、まだ名乗ってなかったね」

やっと痛みが収まったのか、女性は立ち上がって席に座る。

「霧島美穂だ、よろしくな」

そう言っつて、皿の上のイチゴを頬張った。

一方、六課では…

「ぐぐふう…」

「ぬぐぐ…」

浅倉とシグナムは、闘い過ぎた所為で完全に力尽き、大の字になって寝そべっていた。もちろん、周りの被害は甚大である。

「ま、またやられた…」

「訓練所が…」

くしゃみをしていた。

「…風邪引いたか？」

「おゝい、こつちだよ」

現在、二宮は美穂が滞在しているホテルまで案内されている所だった。

「…それにしても、本当によくホテルになんて泊まれたな。俺達の世界とミッドチルダでは、言語に通貨も違ってたのに」

「あたしがミッドに飛んで来た時にね、たまたま地球の文化を知ってる奴と知り合いになってさ。今はそいつと一緒にホテルに滞在してるんだ」

「地球の文化を知ってる…？」

「うん、ちょっと変わり者だけどさ…あ、着いたよ」

話している間に、ちょうどホテルに到着した。

「地球の文化を知ってる、ねえ…」

ホテルを見上げながら、二宮は小さく呟いた。

二人はホテルに入った後、エレベーターに乗り、美穂が滞在している部屋の前までやって来た。

「おゝい、帰ったよ」

コンコンとドアを叩いた後、美穂はドアを開けて中に入る。

「ほら、アンタも早く入りなよ」

「ちよっ…分かったから押すなつての」

美穂に押されながら、二宮も部屋に入る。

「全く…」

「へえ、面白そうな客を連れて来たね。美穂ちゃん」

「！」

二宮の前に、一人の少年が姿を現した。帽子の上に更にフードまで深く被っており、目元が隠れているように見える。

「…誰だ？」

「嫌だなあ。名前を聞く時はまず、自分が名乗るべきじゃない？」

「…まあそつだな。俺は二宮鋭介だ、よろしく」

「二宮鋭介か…僕はルシファー、よろしくね」

二人は握手をする。

「…にしても、霧島の知り合いがまさかこんなガキだったとはな」

「むっ、酷いなあ鋭介ちゃんは。美穂ちゃんでもガキ呼ばわりなんてしなかったのに」

「え、鋭介ちゃん…？」

ルシファアの呼び方に、二宮は思わず顔を顰める。それに気付いた美穂が説明を加える。

「ああ…ルシファアはさ、相手が誰であっても必ず下の名前で呼ぶんだ。たとえ、相手がどれだけ嫌がってもね」

「君だって僕をガキ呼ばわりしたんだし、文句は言えないよね？」

ルシファアは勝ち誇ったかのような顔をする。

「お前…いや、やっぱり良い。怒るのもめんどくさい」

二宮は諦めてベッドに座る。

「まあ、そう怒らないでよ。何で怒ってるのかは知らないけど」

（コイツ、分かかって言ってるな…！！）

二宮は一瞬イラツとなるが、すぐに怒る気力も失せた。

「まあ良い…それで、お前はいつたい何者なんだ？」

「何者って聞かれてもねえ……僕はただの、しがない暇人さ」

そう言いながら、ルシファーは棚から何かを取り出す。

「まあ……ちよつと訳ありだけどさ」

「？」

ルシファーが取り出したのはノートパソコンだった。

「……何だそれ」

「まあ、今にわかるよ」

ルシファーはパソコンを操作し始める。

「ええつと確か……ああ、あつたあつた。はいコレ」

ルシファーはパソコンの映像を二宮に向ける。

「何だ……ん？」

二宮はパソコンの映像を見て驚いた。

何せその映像には、アビスや王蛇の姿が写っていたのだから。

「驚いたでしょ？」

ルシファーは再びパソコンを操作し、パソコンに契約モンスター達

の映像も写る。

「前にクラナガンのショッピングモールで、テロリスト事件があったでしょ？ その時、人質に取られていた人達は君達の姿を実際に見ているんだ。君達の存在は、一部の人間には既に知られているのさ。僕はそれよりも前に美穂ちゃんに会っているから、ライダーやモンスターについての存在は知っていたけどね」

「ああ、そんな事もあつたな…ん？」

「……」

二人が話す中、美穂は何も言わず、ただパソコンの映像を睨み付けていた。

(この女……いや、今はどうでも良いか)

二宮は対して気にせず、パソコンの映像に目を向ける。

「鋭介ちゃんは今、六課に滞在してるんだよね」

「ん？ ああ、そうだが……何故それを知ってる？」

「盗んだからさ、情報をね」

「情報を？ …お前、もしかしてハッカーか？」

「その通り」

ルシファーはまたパソコンの操作を再開する。

「僕は今までに、いくつものコンピュータやシステムにハックを仕掛けた事があってね。偽情報を流したり、盗んだ情報をネットに公開したりして、それが原因で特定の会社が潰れるなんて事もあった」話を続けながら、ルシファーはパソコンを操作する。

「管理局のコンピュータにも侵入した事もあってさ。おかげで僕は管理局から追われる身になったって訳なのさ。その際、地球にも逃げ込んだ事もあってね。おかげで、地球の言語なんかも完璧になっちゃったよ」

「ふうん…」

二宮にしては珍しく、興味深そうに映像を見る。

「機動六課のコンピュータにハックしてみたらさ、六課に美穂ちゃん以外の次元漂流者がいるって事を知ってね。ライダーに関する事は何も記録が無かったけど、そっちで何か口止めでもしているのかい？」

「…余計な首は突っ込むな、とは言っているが」

「ああ、だから情報が無いのか」

ルシファーがパソコンを操作しているのを見て、二宮は考える。

（しかし凄いな……管理局のコンピュータには簡単に侵入するし、証拠隠滅も完璧で管理局には全く気付かれない……なるほど、使えるな。情報源として）

二宮は小さな笑みを浮かべた。

「もう六課に戻るのか？」

「あんまり遅くなると、六課の奴等に怪しまれるからな」

「じゃあ、何かあった時はここに集合って事で」

「ああ、それで構わない」

あれから二宮は、美穂とルシファアの二人と互いに手を組む事になった。もしもの事を考え、二人には今まで通り、陰で行動してもらう事になったのだ。

「それじゃあね、鋭介ちゃん」

「…出来ればその呼び方はやめろ」

「諦めなよ、何言っても無駄だろうし」

「はあ…」

溜め息をつきながら、二宮はホテルを出て行った。

「……………」

ルシファーは二宮が去って行くのを黙って見ていた。

「…ルシファー？」

美穂がルシファーに問い掛ける。

「退屈そうだね、鋭介ちゃんは」

「へっ？」

突然の発言に、美穂は思わず間抜けな声が出る。

「…何でそんな事が言えるんだ？」

「目を見たら分かるよ、大体は」

（分かるもんなのか…？）

美穂はそんな疑問を抱く。

「嘆かわしいよねえ……人生は一度つきりなんだから、思い切って
楽しまない」と

「ああ、そう（やれやれ、ルシファーはホント緊張感が無いな……）」

美穂は内心呆れていた。

（まあでも、あたしにはやらなきゃいけない事があるんだ……何と
してでも…!）

美穂は力強く拳を握った。

「ふむ…」

二宮は帰りながら、考え事をしていた。

(ひとまずファムの装着者には会えなし、貴重な情報源は手に入
たし、収穫は結構良いかな？ アイツ等のいるホテルは、拠点と言
うには微妙な所だが…)

一度立ち止まり、空を見上げる。

(…戦力を揃えた方が良さそうだな。これからの為に)

そして、二宮はまた歩き出した。

ちなみにその日、ボロボロになった六課の訓練所は修理費がまた凄
い事になり、はやてが死んだ魚のような目をする羽目になったのだ
が、もちろん二宮はそれを知る訳が無い。

第二十五話 戦力確保（後書き）

恐らく皆さんが予想していなかったであろう、まさかの新キャラ『ルシファー』登場！！ これからの事を考えて、二宮は六課にはれないように少しずつ戦力を揃えていきます。ちなみにルシファーのキャラ設定についてはまたいつか載せます。

それから今の内に言っておきます。次回もちょっとだけオリジナルになる可能性がある上に、更新も少し遅れるかもしれません。すいません、ここから先は結構大事な場面になりますので。

それでは感想お待ちします。

第二十六話 六課の平穩（前書き）

第二十六話投稿！！

今回もオリジナルになるかもしれないとは思っていましたが、執筆の結果、それほどでもありませんでした。

はあ……もつと文才が欲しい…orz

まあとにかく、第二十六話をどうぞ。

第二十六話 六課の平穩

ある時…

「ぜえ、ぜえ、はあ、はあ」

人気の無い道を、一人の男性が走っていた。

それも、ただひたすら。

まるで、自分を追ってくる“何か”から逃げているかのよう。

「くそつ、何でだ……何で俺が、こんな目に……!!」

男性は一度路地裏に隠れ、誰も来てないか警戒する。

「冗談じゃねえ……絶対に、死んでたまるかよ……!!」

呼吸を整えた後、男性は再び走り出した。

男性が走り去って数秒後…

・シユタツ・

黒いスーツの女性が、その場に降り立つ。

男性が逃げた方向を確認し、一言呟く。

「…逃がさない」

彼女の瞳は鋭く、ギラリと光るのだった。

一方、ミラーワールドでは…

「ハアッ!」

「グオオツ…!?!」

浅倉は王蛇に変身し、いつものようにモンスターと闘っていた。

そして今、その決着が着こうとしている。

FINAL VENT

「ハアアアアアアアアッ!!!」

「グオオオオオオオオオオツ!!!?」

ベノクラツシユがが決まり、レイヨウ型モンスター“メガゼール”は爆散した。

「ギユアアアアアアアアアアッ!!」

炎の中から出てきたメガゼールの魂をベノスネーカーが吸収し、そのまま何処かへ姿を消す。

「ふん、つまらん……この程度か」

王蛇はベノサーベルをそこらに投げ捨てる。

その時、王蛇はある事に気付く。

「……二宮は何処行つた？」

「ひひひひひひっ!? お、お願いだ!! 助けてくれえっ!!」

「「グルルルルル……!!」」

王蛇が闘っていたのはまた違う別の場所で、一人のチンピラがアビスラツシャーとアビスハンマーに袋小路まで追い込まれていた。

「そつは言つてもな」

そこへアビスが歩み寄る。

「まあ安心しろ。どうせお前みたいなチンピラが死んだ所で、誰も悲しみはしないさ」

「そ、そんな……ひいつ!?!」

アビスラッシャー達がチンピラに迫る。

「…残さず喰えよ」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアッ!?!?!」

チンピラの断末魔が響く中、アビスは振り向きもせずにもその場を去った。

「ふう」

ミラーワールドから出てきたアビスは変身を解除し、二宮の姿に戻る。

そこへ浅倉が歩いて来た。

「…また人間を喰わせたのか?」

「アビスラッシャー達が飢えてるもんでな」

そう言っつて、アビスのカードデッキを懐にしまっつ。

「ふん……ここ数日、手ごたえの無いモンスターばかりだ。もっと強い奴はいないのか」

強いモンスターと闘えない浅倉は愚痴を漏らす。

「そう言われてもな……あ、そうだ」

二宮はある事を思い出し、浅倉の方に振り返る。

「浅倉」

「何だ」

「…今のうちに話しておこう」

その後、二宮は浅倉に様々な事を話した。

オーデインからの依頼、元の世界に戻る方法、美穂やルシファーとの協力関係など、浅倉に話していない事のほとんどを話した。ただし、サバイブのカードについては黙ったままだ。

「この世界のモンスターを全て倒せば、俺達は元の世界に戻る事は出来る。本来なら怪しい所だが、今はそれ以外に方法も無い」

「なるほどな……だがどうする？」

「ん？」

「このまま倒し続けていれば、モンスターの数も減って、普通の餌を求めるのも難しくなる。かと言って、人間を喰わせていてもいつかは六課の奴等にバレる。いつまでも騙し通せるわけでもあるまい……」

「だからだよ」

「何……？」

「……だからこそ、準備が必要なんだよ。これから先の為にな」

そう言い放ち、二宮は路地裏を出て行く。

「……相変わらず、用意周到な奴だな」

そう言つて、浅倉も後に続く。

（それにしても……仮面ライダーファム……霧島美穂、か……強い
のなら良いんだがな……）

ニヤリと不敵な笑みを浮かべながら、浅倉も路地裏を出て行くのだった。

ちなみに……

「はあつくしゅん!! …ふう」

「あれ、美穂ちゃん風邪？」

「かなあ? …参ったなあ。これからまた、一盗み行こうと思っただのに」

例のホテルでこんなやり取りがあった事など、誰も知る由は無い。

その後、二宮と浅倉は六課に帰還した。しかし…

「ふう…」

「…何やってんだお前」

二宮と浅倉が歩いていた廊下で、シグナムがしゃがんで休んでいた。何故か彼女の右手には、モップが握られていたが。

「ああ、実はその…少し前の模擬戦で、な…」

シグナムが涙目で答える。

「…ああ、なるほど」

二宮は何となく理解出来た。

実はと言うと、シグナムは今、モップを使って廊下掃除をやらされていた。

少し前に浅倉とシグナムが行った模擬戦という名目の暴走によって、訓練所がまたズタボロ状態になり、修理費も凄い事に。それで彼女一人、はやて達から“お話”を食らったのだ。ちなみにこの時、浅倉はうまい事その場から姿を消し、彼女達の追撃を逃れていたが。

「浅倉！！ お前があの時逃げた所為で、私一人がお仕置きされる羽目になったではないか！！」

「知るか」

シグナムにこう言われても、浅倉は軽くスルーする。

(浅倉にお仕置き…)

二宮は頭の中で、浅倉が廊下を掃除している姿を想像するが…

(…いや、無いな。浅倉に限ってそれは無い)

その想像もすぐに消えた。

「とにかくだ！！ こうなった原因はお前にもあるのだから、少しは私を手伝…」

シグナムの台詞が途切れた。

何かと思い、二宮も振り返るが…

・ヒュウウウウウウウ…

気付いたら、浅倉の姿がその場から綺麗に無くなっていた。

…要するに、また逃げたのだ。

「あ……浅倉あああああああああああああああああ
あっ……！」

「…もう知らん」

完全に怒り狂ったシグナムが大声で叫ぶ中、二宮は「我関せず」と
でも言うように、自分の部屋に戻って行った。

しかし、自分の部屋に戻っても…

「…ハラオウン」

「は、はい……」

「…俺のペースを乱して楽しいか？」

二宮の顔は引き攣っていた。

何せ…

「スウ…スウ…」

ヴィヴィオにまたベッドを占拠されたからだ。しかも、ヴィヴィオをここに連れて来たのはフェイトだったりする。

「ああもう、どいつもこいつも…!!」

「す、すいません!!」

二宮は浅倉ほどではないがかなり苛立ち、フェイトも申し訳無さそうに謝る。

「たくっ…お前も、何で俺の部屋に連れて来た」

「い、いやだって…ヴィヴィオがここで寝たいって言うから…」

「…何だって？」

二宮はヴィヴィオの方を向く。

「スウ…スウ…」

やっぱりヴィヴィオは気持ち良さそうに寝ている。

(たくっ、気持ち良さそうに寝やがって…!!)

二宮の苛立ちは収まらない。すると…

「うん……パパ……」

「ん…!」

ヴィヴィオの寝顔を見た二宮は、ある事に気付く。

「パパ……ママ……」

ヴィヴィオの目から、涙が流れていたのだ。その表情もとても悲しそうで、手に持った人形を必死に抱いている。

「ヴィヴィオ……」

心配したのか、フェイトはヴィヴィオの頭を撫でようと手を伸ばした。が…

・ポンツ・

「…え？」

フェイトの手は途中で止まった。

「…全く、なんて悲しげな顔してやがる」

フェイトよりも早く、二宮がヴィヴィオの頭に手を置き、撫でていたのだ。頭を撫でられて安心してはいるからか、ヴィヴィオの表情は先程よりは和らいでいる。

「二宮さん……」

「……後で泣きつかれると面倒だからな」

素直じゃないのか、それとも本気でそう言ってるのか、よくわからない所である。

「……優しいんですね、二宮さんって」

「別に……俺はお前等が思ってるような人間じゃない」

「ううん……」

その時、寝ていたヴィヴィオが目を覚ます。

「あ、起きたんだ」

「ママ……」

ヴィヴィオはフェイトの方を見た後、二宮の方も見る。

「……パパ？」

「むっ……」

二宮は言葉に詰まる。一度は諦めても、やはり父親扱いされるのは慣れてないらしい。

「…パパ！」

「うおっ!?!」

ヴィヴィオは二宮にダイブする勢いで抱きつき、二宮は思わず転倒しそうになる。

「」

「ヴィヴィオったら……二宮さんに懐いちゃったようですね」

「こっちは良い迷惑だな……」

二宮は溜め息を吐く。

「ホントにそうですか?」

「あ?」

「二宮さん……そんなに嫌そうな顔してませんよ?」

「……つるせえ」

二宮は顔を逸らし、それを見たフェイトは思わずフツツと笑みが零れる。ヴィヴィオは二宮に抱きついて嬉しそうである。

三人がくつろいでいる中、別の場所ではシグナムがシャーリー達から励まされて余計に虚しい気分になったり、ヴィヴィオに忘れられかけて若干落ち込みかけているのはをはやてが慰めたりと、もうじき公開意見陳述会があるにも関わらず、六課は相変わらず楽しそうであった。

その日の夜…

「はあ、はあ…」

とある路地裏にて、一人の男性が逃げ込んでいた。

男性は周りを見渡し、誰もいない事を確認する。

「ふう………ここまでくれば…」

男性は一息つき

「眠りなさい」

「え」

「ドオンッ!!--」

頭部を撃ち抜かれた。

男性はそのまま倒れ、ピクリとも動かなくなった。

数秒後、黒スーツの女性が姿を現す。彼女の右手には、散弾銃型のデバイスが握られている。

（これで、また一人…）

女性はしゃがみ込み、男性が死亡しているのを確認する。

そこへ…

「順調のようだな」

「…！」

彼女の前に、仮面ライダーオーディンが姿を現した。

第二十六話 六課の平穩（後書き）

ええ〜……新キャラ、またやっちゃいました。ですがボクは謝らない！！ コラ

まあ、本格的な登場はまだ先ですが。

実体を保てていない筈のオーディンが何故動いているのか、その理由は後に判明します。

次回から本編の流れに戻ると思います。二宮達ライダーは、ナンバーズのどのメンバーとぶつけるべきか結構悩んでいます。

取り敢えず、皆さんも感想お待ちしています。

第二十七話 ナンバーズ襲撃、数時間前（前書き）

第二十七話、ようやく更新…！！

皆さん、本当にすみません。修学旅行もあつた上に、それが終わって一週間後にはすぐ定期テスト…何このハードスケジュール、ボクを殺す気か？

…とにかく、どうにか更新しました。原作の流れに戻しはしましたが、まだ戦闘はありません。おまけにいつもに比べると、話の内容がほんの少し短いような気がします。

それではどうぞ。

第二十七話 ナンバーズ襲撃、数時間前

公開意見陳述会、当日…

「ふあ〜…」

二宮は段差に座り、缶コーヒーを片手に欠伸をする。

二宮と浅倉の二人はこの日、はやて達に頼まれて警備の手伝いをやらされていた。しかし…

「全く、あいつ等も面倒な注文じゃがる…」

実は二人共、他の局員に見つからないように別の場所で待機しているように言われていたのだ。管理局には既にライダーの存在は知られているのだが、二宮が口止めしている為に、そのライダーが機動六課に滞在しているという事は知られていない。ただでさえ戦力が過剰な機動六課にライダーまでいるなんて知られば、確実にレジアス中将等に目をつけられてしまう。なので、陳述会が終わるまでの間、二人は見つからないような場所で待機する事になったのだ。

「まあ、それは良いとして…」

二宮は懐からある物を取り出す。

二宮の右手には、三日月型のアクセサリが握られていた。

「…どうするかな、これ」

何故二宮がこんな物を持っているのか。

それは数日前の事…

「何だこれ？」

六課の食堂にて、二宮はフェイトにアクセサリーを渡され、頭にク
エストヨンマークを浮かべていた。

「少し前に、エリオとキャロが外出した際に買った物です。あの二
人、私や他の皆の分も買っていたらしくて」

「…それで、俺にもこれを渡そうと？」

「迷惑…でしたか？」

フェイトは上目遣いになる。それを見た二宮は…

「…いや、一応貰っておこう」

アクセサリーを受け取る事にした。それを聞いたフェイトは小さく
ガッツポーズをしたが、二宮は気付いていない。そこへ…

「パパ」

「ん？」

ヴィヴィオが二宮の下まで寄って来た。ヴィヴィオの目は何かを訴えている。

「…はいはい」

その意図を察した二宮は、ヴィヴィオを抱き上げ、膝の上に乗せる。

「えへへ〜」

「やれやれ……ん？」

二宮は気付く。よく見ると、ヴィヴィオも二宮と同じアクセサリーをしていた。

「御揃いですね」

「…お前もか、ハラオウン」

「あはは……」

フェイトもちやっかり同じアクセサリーをしている。

「全く、何が嬉しいんだか……」

「」

こうして三人は甘い空気の中、食事を進めた。

「私も一応ママになってるんだけどなあ……はあ」

「…どんまい」

忘れられているのはは、ヴィータに慰められていたが。

そして時は戻り、現在に至る。

「貰ったのは良いが…」

二宮は缶コーヒーを一気に飲み干し…

「邪魔でしかないんだよな、全く」

缶を握り潰し、そこらに放り捨てた。

「……」
「……」

ホテルにて、美穂はコートを着て身支度をしていた。

「あれ、美穂ちゃんまた行くの？」

「うん。この町はカモが多いしね」

「カモ、ねえ……まあそれは良いけどさ。管理局の連中にはなるべく見つかるなって、鋭介ちゃんから言われてなかったっけ？」

「大丈夫、うまくやるからさ」

ルシファアの忠告にも、美穂はウィンクして答える。

「…まあ良いや、それじゃあ気をつけなよ」

「はいはい。それじゃ、行って来まあす」

美穂はルンルン気分で部屋を出て行った。

「やれやれ、楽しそうだねえ……さて」

美穂が出て行った後、ルシファアは懐から通信機を取り出す。

『ん、お前か。ルシファア』

「ヤッホー、鋭介ちゃん」

「…やっ」

ホテルから出た後、美穂は手に持ったカードデッキを見つめる。

（やらなくちゃいけないんだ……何としてでも、“あの男”との決着だけは……！！）

そしてカードデッキをポケットにしまい、美穂は歩き出した。

「……あつあれ、財布が無い!？」

（ま、こっちもやらせてもらっけどさ）

すれ違い様に早速男の財布を抜き取るなど、やはり彼女は抜け目が無かったりする。

「相変わらずヘラヘラしてやがるな、お前は」

『いやあ〜そう言われても、生まれつきな物でね』

二宮は少し前に買った通信機を使い、ルシファーと連絡を取り合っていた。

『ところで、そっちはどうかな？ 機動六課のお嬢さん達とうまく

馴染めてる?』

「まあ、こっちはこっちでうまくやってはいる……ヴィヴィオとかいうガキに、色々と振り回されてはいるが」

『へえ〜。流石の鋭介ちゃんも、子供は苦手なのかな?』

「……ああ、苦手だな。子供の面倒見るのは得意じゃない」

「おまけに」と言つて、二宮は先程のアクセサリーを取り出す。

「少し前に、ハラオウンからアクセサリーまで貰ってしまった。しかもよりによって、あの女とガキの御揃いになっちまった」

『…アツハツハツハツハ』

そう言うと、通信機からルシファアの笑い声が聞こえてきた。

『それは本当にお疲れ様だねえ。鋭介ちゃん』

「ああ、こっちは疲れるぜ……全く、俺は役者が羨ましいよ」

『アツハツハ……えっ?』

ルシファアの笑い声が途中で切れる。

「……どうすれば、“優しい人間”をうまく演じられるのか、教えて欲しいくらいだよ」

二宮は怪しい笑みを浮かべる。

『…外道だね、鋭介ちゃん』

「…一応、褒め言葉として受け取っておく」

二宮はアクセサリーを懐にしまう。

『ところで、鋭介ちゃんは今何をしてるんだい？』

「八神部隊長から頼まれて、陳述会とやらの警備だよ。ただ、他の局員にばれると面倒だから、実際の場所とは少し離れた所にいるが」

『そう。それなら気をつけなよ。少し前に、管理局上層部の局員が何者かに射殺されたって情報があったからさ』

「！…ああ、気をつけよう」

二宮は立ち上がり、首を軽くゴキツと鳴らす。

「ところで、霧島は今何をしてる？」

『いつものように一盗みだけど？』

「…あの女」

二宮は溜め息をつく。

『まあ、僕の方から一応注意はしておいたよ』

「そうか、なら良い……そろそろ切るぞ」

『うん、了解。それじゃあ頑張つてね、鋭介ちゃん』

「…一度は諦めたが、どうにかならんのか？ その呼び方」

『うん…うん、無理かな』

「死ね」

ブツツと通信機を切る。

「全く……これから暇だな、どうするか…」

二宮は二本目の缶コーヒーを取り出し、飲み始めた。

一方…

「ふう」

路地裏にて、浅倉は木箱の上に座り、右手に鉄パイプを持ってくつろいでいた。

その近くには…

「」「う、う、ぐう……」「」

チンピラ共が捻り潰されていた。浅倉にカツアゲしようとして、返り討ちにされたのである。

「ケンカをしたのは良いが……やはりイライラが収まらん……」

チンピラ共を潰しても、やはりそれだけじゃ彼のイライラは収まらないらしい。

（そういえば、俺達以外にもライダーが一人いたんだっただか……）

少し前に、二宮から仮面ライダーファムの事について聞いたのを思い出す。

（俺が見た事の無いライダーだ。少しは楽しめれば良いんだが……）

浅倉はニヤリと笑みを浮かべる。

木箱の上から立ち上がった後、浅倉は鉄パイプをその辺に放り捨ててから歩き出した。

「うう……グヘッ!？」

その際、チンピラを一人踏みつけながら。

数時間後、鬨いは始まる。

第二十七話 ナンバース襲撃、数時間前（後書き）

…一応言っておきますが、二宮はいつでも外道です。読者の中には、『二宮がヴィヴィオの影響受けてるんじゃない？』と不安になっている方がいましたが、大丈夫、問題はありません。二宮は二宮のままですから。

次回でナンバースと激突……の予定ですが、どのメンバーをアビスと激突させるべきかまだ悩んでいます。もうノーヴェやウエンディ辺りで良いかなあ…？

ああ、ちなみに王蛇の場合はとあるイベントがありますので、今は取り敢えず除外します。

浅倉「何…ッ!？」

…コラそこ、一人でショック受けない。

それでは皆さんの感想、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2616u/>

魔法少女リリカルなのはStrikers ~二人の最凶~

2011年12月11日00時48分発行